

在日韓国・朝鮮人はいま

——その生活と意見 —



■ ■ ■ はじめに ■ ■ ■

私は、一九九〇年四月、日本語を勉強するために韓国、ソウルから来日し、一九九一年四月からは、（財）京都市国際交流協会の職員として働いています。

来日するまで私は、ほとんどの在日同胞チニルドンゴ（在日・韓国朝鮮人）は母国語もできて、考え方や習慣なども韓国から来た我々と全く差はないと思い込んでいました。

しかし、日本に来てから仕事を通じて多くの在日同胞の方々に出会い、私の考え方が間違っていたことに初めて気がついたのです。

韓国でも、知識人による在日同胞の問題を取り上げた討論会やシンポジウムが一般市民向けに行われていますが、市民の理解はそれほど深くありません。それは、在日韓国・朝鮮人が直面している諸問題について、実際の体験者である彼らに話してもらう機会があまりにも少ないからです。

韓国政府が、もっと在日同胞社会に眼を向け、また、日本が歴史教育に対しても、より積極的な動きを見せてくれることが私の個人的な願いです。

この冊子では在日韓国・朝鮮人の歴史をはじめ、文化・教育・職業・将来の展望などが京都在住の在日一世から三世の経験に基づいて語られています。在日のことを理解したうえで、改めて前向きに今後の生き方を一緒に考え、誰もが住みやすい日本にしたいという願いをこめて企画しました。「異民族に対する理解から」という国際交流が、この冊子を通して輪になり、京都から広がっていくことを願います。

*** 四 次 ***

第一回 「歴 史 くふるさとを離れてく」

第二回 「文 化 ～わが家の韓国・朝鮮文化～」

第三回 「教 育 ～在日の心を育てる～」

第四回 「仕 事・生 活」

第五回 「若 者 と 将 来」

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

……第一回 「歴 史 うふるさとを離れて」 ……

パ ネ ラ 一

王 利 鎬 氏 (在日一世・会社役員)
朴 王 鐘 氏 (在日一世・会社経営)

コードィネーター

一九九二年十月十五日実施

第一回 「歴史へふるまいを離れて」

第一部 一 始

仲尾 本日は、連続フォーラム「在日韓国・朝鮮人はいま」の第一回、「歴史へふるまいを離れて」
というテーマです。今回、在日韓国・朝鮮人の方々の直接のお話が聞けるというのが連続フォーラムの
特徴です。日本にいらっしゃる在日の方々の中でも、もつとも苦労された、もつとも厳しい時代を生
きてこられた一世の方々のお話をまず聞く「うどくう」と、第一回日にそのお話をつかがえる「ことにな
りました」。

今から、それぞれ来日に至ったごめんづり、それから日本に乗られても「どう苦労された?」とをお伺
いします。そしてその後、簡単に私の方から、在日として「られた前後の歴史を説明させていただめ
す。

それでは、まず王利錦さんからお話を伺いたいと思います。

苦しい釜山の生活

王 利錦 私の一生の歴史みたいなものをお話しさせていただきます。今は釜山市になつていいので
すが、当時はとても田舎でした。昭和五、六年頃には日本にも不況がおどされましたが、韓国はもつと
ひどい状況でした。食うが食われるか、移民もあつたように思つります。その時、私は小さかつたけれ
ども、朝から晩まで働いてもお粥がすすれなこという状態で、あの頃の「ひとを離れて」の年になつても
クッと胸がつまるのです。

韓国では、頭に物を乗せて約十キロくらいの町の中の市場まで歩いて行って、それを売つても今にすれば二十銭ほどにしかならない、そういう時代でした。売れた分からもとを引いて、帰りに子供のおやつとして芋の端くれの安い、捨てるようなやつを買つてもらつて食べるのが嬉しかつたという記憶もござります。

当時、私の兄さんと叔父さんが私より四、五年前に日本に来ておりました。奉公して一年に十円ずつ送つてきました。昔のお金は紙で十円と言つたら青い立派なものでございました。そのお金で母親は助かつたりして、私も学校へちょっとは行つたのですが…ちょっとごめんなさいね、何か思う出ると胸が詰まりまして。そういう中で生活していたものですから、食うに食われんから日本へ行こうというになりました。家から約十里くらい離れた町に、今の釜山桟橋の方に警察がありまして、日本に行くためにそこに頼みにいくわけなんです。私も小さいから分からんけど戸籍謄本を持って行きますと、当時韓国は植民地ですから、警察は非常に横柄な態度で「今日は忙しいから帰れ」と言つのです。ものも分からんし抵抗もだしませんから、何回も足を運んでやつと許可を得る」とができました。

職を求めて京都へ

そうして連絡船に乗つて、日本に来たわけですが、食事が全然違いますから、醤油の匂いをかいだだけでもなかなかご飯が食べられないという状態で、弁当はもらつたけど食べずに日本にたどり着いたのです。昭和五年の十一月二十八、九日頃だったと思います。それで一、三日して正月を越して、日本には兄さんもおつたけれど、口減らしというか、すぐ奉公に出されました。その時は言葉も分からないし、「お前を殺す」と言われていても分がらない状態でした。それで「お前も朝早く起きなあかんぞ、朝五時起床や」というんです。私が行つたところはあまり裕福ではなかつたんでしきうね、私の奉公先は水

引きを作つていました。あれは漆を使つてするものだから漆に負けちやつて、顔が横に腫れてお化けみたいたいな顔になりました。それでも医者に行かしてもらつわけでもなくそのままでした。

朝、目が覚めるのは、三時頃か四時頃か、真つ暗で分からんですね、そして起きてこたつを抱いて、夜が明けるまで待つて、五時には必ず起きて拭き掃除をさせられました。冷たい井戸水で外の部分全ての拭き掃除をしました。拭き掃除すると手が荒れて、血が出てとっても痛いんです。十二歳の時にご飯も炊がされました。ご飯を炊くのも今のガスと違つて割り木です。うまくしないと新聞紙ではなかなか火がつかない、丁稚奉公時代はそんな生活でした。泣いても笑つてもよそへ行くこと知りませんしね、今考えるとバカ正直と叫んでしようか、ずっと辛抱しなならんと思っていました。いつも漆にまけてそりひじりを腫らして癌だらけでしたが、一年間は休む」とは言わせませんでした。

苦勞労働の日々

そんな苦勞している時に、偶然に知り合ひと会いました。「お前そんな所におらんと、わしがおる織物屋に来いや」と言つて下さい。思いもしないのに、そう言われると行きたくなつましくね、さあもう何も見えません。何ば主人が止めても、そうと逃げようかと思うくらいでした。主人にわけを話したら「貴様、何いうてるんだー」とほっぺたを殴られました。当時はその織物屋に行きたい気持ちばかりで全く辛いとは思ひませんでした。

今度は、その織物屋に行きました。そこには小さく子守もおりましたので、子守をしたりもしました。ちょうど十五、六才の頃に、今度は兄さん呼ばれたのです。百姓みたいな仕事をしてゐるし、それ手伝えと言つて下さい。それでしばらく兄の仕事を手伝つたわけですが、それがあまり間に合わないものですから、また違う仕事を少ししました。

仕事上の差別

色々と見込みのある仕事を畠おうてめたのに、いい所は韓国人はなかなか使ってくれませんでした。どこに行つても下働きみたいな」とばかりでした。そしてそのうちに丸物百貨店、今の近畿百貨店ですね、今はエレベーターですが、当時は下からモルタルを担いで十階まで階段で上がるんです。一日中、上つたり下りたりして練ったセメントを運んだり、大人の仕事をやつとつたんです。鉄工所へ行つても下働きみたいな仕事をしかさせてもらえませんし、自分が思つていたことは全部はずれてしましました。しまいには嫌気がさして職を変えたりもしました。昭和九年に、養鶏場へ行つて養鶏でも畠おうと思いました。当時は何を畠つても韓国へ行つて何かしようという希望がありました。

養鶏場にいた時、昭和九年九月二十一日の午前八時に室戸台風が上陸しました。これは今でも忘れません。鳥小屋が約十棟ほどあつて鳥は一萬羽か三万羽おつたと思います。鳥小屋が風で倒れましてひどいことになりました。板張りで釘打ちされただけのものでしたから、ちょっと傾いただけで釘が全部、上向いているんです。それで釘ばかり抜かされまして、もう釘をなんぼ踏んだか、五、六回踏んだんです。足の裏に釘がブス一つと入りました。当時は医者にも行けずに、黴菌殺すから金槌で穴を叩けといふんです。パンパン叩いたら血が吹き出します。治つたことは治りましたけど、鳥小屋がもう全部倒されましたから足引きずりながら釘抜きをしました。ちょっと熱ができると足が切れるぐらいに痛くて、黴菌が入つて死ぬのと違うかと思つたくらいでした。奉公している間にお医者さんの顔は一遍も見たことがないし、行かしてもらつたこともないです。これではいかんということや、百姓の野菜でも買つて売つた方がましじやないかと思い、それもちょっとやりました。

ちょうど昭和十五年だったと思いますが、結構裏面田な青年だつた」といふと、数えの一十三歳の時に人にはすめられて三つ年下の家内をもらいました。そして昭和十六年に長男をもうけました。そのうち

に大東亜戦争が始まりました。それでいつもさういちもいかなくななりまして、名古屋の方のエンジンを作れる会社で三菱飛行機工場の用地の地ならしに従事しました。国の仕事やから徵用もないしね、あの時、三菱重工いうたら軍備についてもあらゆる物を向こうで作っておりました。一生懸命やつている間に終戦を迎えるました。何とか韓国へ行こうと思って金を貯めていました。その時の六万円というたら今のお金にしたら大きな金なんですね。一銭も使わず着のみ着のままで儲けて、國へ早く行って成功しようと思つていました。が、当時は連絡船も何もありませんから、國へ行こうと思ってもなかなか行けませんでした。

戦後の京都で成功

当時、私の遠縁にあたる者が隣に住んでいたのですが、私が貯めたお金をすっぽり持つて韓国へ行つてしまつたんです。着のみ着のままで韓国へ行こうと思っていましたので、送るほどの物も何もないんですけど、着物や布団や買ったものは皆送つてしまつた後で、お金まで盗られたのですから、この世が真つ暗になりました。私は何十年も働いてせつかく貯めたのに、私の一生はおしまいだと思いました。空を見たら星みたいなのが、目のところにパツチヤパツチヤと光るんです、よっぽど困ったんじゃないかと思うんです。それでそれから間もなくして、終戦の十月にさしかかりまして、結局、名古屋に二年間おつたのですが、もう一円もないのだからこれではいcantということで、再び京都に戻りました。色々な仕事をしました。当時は何とかして國へ帰ろうということばかりあほみたいに思つてて、お金を母親に見せてやりたいと思ってたのですが、無念ながら盗られちゃつて一円もありませんでした。お金を盗んだ敵を討ちに行くというたつて一円もないんだから、行くこともできませんでした。

そういうするうちに、知り合いもできましたが、日本は戦争に負けたし、石炭も出えへんし、炭坑も

皆やめだし、我々同胞も皆、國へ帰りました。あの時二百万人も韓國から来ておりましたが、日本でも仕事がなくなり多くの同胞が帰りました。その当時は、材木も薪もなくて、京都の染め物屋も往生していました。その時、友達に「山をやらんか」と誘われました。私は山に足を踏み入れたこともなかつたんですが、何もせんでもいいから金だけ出してくれということで、資金を二十万円ほど出しました。当時の二十万円は今の一億円くらいの値打ちがあつたのかもしません。そういう仕事をして、約十何年が過ぎました。今考えるとしれどるんですけど、いくらか資金ができました。それで昭和四十年からは自分の知恵で土地を買ってそこに家を建てる商売を始めましたところ、ちょうど家が不足しているからものすごく良いということです、現在まできたわけです。

大体はそんなもので、これまでのことを思い出すと、涙が出るしね、喉が言おうと思つてもね、ピヤツと止まることがあるんですよ。いまだに、母親のこと、苦労したこと、自分のことを思つと、ピヤツと喉が詰まつて今も涙が溢れるんですよ。話しかけていた間もだいぶ耐えなんですが、そういう苦労をしてきましたんです。

ちょうど二十歳くらいの頃でした。道を歩いつたら一人の若い男が走つて行きよるんですね、しばらくしたら巡查が追つかけて来て、いきなりほつべたをパチーンと二つ殴られました。「何事や、何でしづくのか」て言つたら、「お前、今、あそこで何か盗つたやろ」と言つわけです。「何の話ですか。今あそこを走つて行つた人が」と言つたら「あゝ、すまなんだ」と言つて走つて行つたんです。今だったら許されないけどね、あの時は許すも許さんも、文句言つたらまたどつかれますからね。そういう時代を乗り越えて今まで苦労してきたのでは今は氣楽にさしてもらつています。

佐藤 どうもありがとうございました。限りある時間に、非常に「苦労された」とかびあがつて
くるような気がいたします。今日はもうお一人、**朴正鎮**さんに来ていただきておりますが、偶然にも
お年もあまり変わらず、日本に来られた時期もほぼ一緒というのです。よろしくお願ひします。

苦労して京都へ

朴正鎮 私、日本名で「アライ」と申します。これは、日本でもらったいわゆる日本名なんですよ。
自分たちで作ったのではなく、皆さんと一緒にいますが、「お前は日本人なんだぞ」ということで
我々は一時、日本人になつたのです、終戦後また戻りました。私は、今は通名で「アライ」だとおつて
ます。今年七十二歳です。

一九一〇年に韓国の昌原郡という所で生まれました。当時は大変苦しい生活を強いられておりました。
以前はかなりの田畠を持つておつたのらしいんですけど、農地改革なんかで全部取られてしまつて本当に
にもうお父さんひとりがどうにか守つていけるくらいの田んぼだとか畑しかなかつたことで、おやじは
借金で苦労して、とてもこれではこの土地に居られないという」とで逃げるようにして日本に入つて來
たのですね。

ちょうど小学校六年生の初め頃に「とりあえず俺は先に日本へ行く、落ち着いたらお前たちも皆日本
に入つて來い」と、先におやじが日本へ入つてきたんです。当時、我々は友達同士でも色々話をするん
だが、とにかく日本へ行つたらもつと勉強もさせてもらえるし、生活も楽になるし、日本に行きたい行
きたいという希望も多かつたんですよ。当時、また北海道開拓問題がいつでも出でましてね、皆北海道
へ來い、北海道へ來いちゅうて、皆希望を持って北海道へ新開拓に出かけて行つたよつなども聞いて
おります。一年ほどして、やつと落ち着いたので來いといふとで、いくらかの旅費が送られてきました

た。母親と第二人と一緒に、四人で日本に来ましたのがちょうど小学六年の秋頃でした。関釜連絡船で下関に着いて汽車に揺られて京都まで鉄道でやつてきましたが、下関から汽車に乗って一滴の水も喉を通らんくらいの苦労をしながら、ようまあ辛抱して京都まで来たなあと今になつて思います。皆、そやつて我慢しながら京都まで辿り着いたというような」とでした。おやじはとりあえず迎えに出てくれたんですけど、当時は普通の長屋の一軒屋で四畳半が一間、こういう家が多かつたんですが、その四畳半一間に一世帯一緒に住むんですよ。その一間に私たち親子五人が住まなくてはならないような状態でした。それで私達が入ってきたのが十月頃でしたが、十日か十五日くらいしてすぐ奉公に行けといふ」とで友禅屋に出されました。これはもちろん口減らしですよ、生活していくんですね。おやじを見ていると煙草拾つて吸うたりね、そんな惨めな」とをやつていましたよ。それでも故郷で辛い思いをするよりまだよかったです。

強制される同化

約三年ぐらい奉公生活しましたけれど、日本人の中に入りこんで私は日本人になりきつてしまいました。故郷の言葉も忘れてしました。もちろん両親と会つて話をするという機会もなかつたし、本当に奉公生活にどっぷりつかつておりました。その奉公生活のなかでも同じ仲間で色々差別がございましたね。「朝鮮人、朝鮮人」ってね、それも語り方が「朝鮮、朝鮮」と、こう言つてます。これは軽蔑した物の言い方です「朝鮮人」というのと「朝鮮」というのと発音で違うでしょ。いつも中で随分嫌な思いもしましたけれども、そういう差別を受けないようにしようと思つたら、やっぱり皆と同化することですね。皆と仲良く、何とかやつていかないかんといふことでも死に堪えて、何を言われても笑顔を忘れないと、う形のなかで、また進んで自分から皆の中に飛びこんでいくような気持ちを持つて奉公

生活を二年間続けていました。その間に色々職業も変わっています。初めは友禅工場に入ったのですが、約一年ほどしてその会社はつぶれてしまつて、それから今度は洋服店、そして電気店と職を転々としました。そういう経過を経て、今度は家に帰ることになつたんですが、少しは生活も楽になつたのですが、やっぱり何とか働いて親に少しでも樂をしてもらおうかという気持ちもあり、弁当を持って勤めに行くようになりました。奉公時代の一ヶ月の給金というたら五十銭もあつてたんですよ、当時は一ヶ月五十銭だったんですね。それが弁当を持って働きに行つたら一日五十銭くれるんですね。これはもう本当に嬉しくてね、今までがあまりにも人間扱いされていなかつたんだなあと考へたんですけど、将来のために辛抱して仕事を身につけないかんという気持ちも働いたので、特に恨んでいませんでした。働きに出てみると一ヶ月分の給料が一日で貰えるとこうことで随分と家の手助けもできたような」とやした。

その頃には家に帰つても国の言葉は使わなかつたですね。平素でも自分がもう日本人になりきつたような気持ちでした。しかもそれがために祖國の言葉や文字を全部忘れてしまつような状態でした。でも二十歳で結婚して所帯を持つようになつてからは、やっぱり私の今まで踏んできた道が間違つているんじゃないかと、もう少し国のこととも考へて祖國の言葉も覚えないかんということに気が付いたんだけどもうその時は遅かつたような状態で、本当に日本人になりきつていきました。だから友人もほとんど日本人ばかりで韓国人の友人はいませんでした。まあこれがいい」となのが実は非難されるような事なんかはわかりません。今でもなぜか帰化したいという気持ちがあるんですよ。あの差別が嫌なんです。

帰化に揺れる心

今、鉄工所をやつておりますけど、いい仕事は貰えないんですね。今でもやっぱりそういう差別がある

んです。帰化すれば日本人としてどこの会社でも入れます。「仕事下さい」って言えます。今は朝鮮人、いわゆる韓国人といふことでいい仕事をもらえません。私の弟は相模原にいますけど帰化して今は立派な会社の仕事をやつてているんですよ。だから私も帰化をすすめられ、実は帰化申請を何通か書いてはそのままほつてしまつうとこうことを繰り返していましたけど、やっぱり思いきつてできないですね。一世の子どもたちにも「お父さん帰化しよう、帰化しよう」なんていつも責められていますが、私はこんな年で今更そんな必要もないだろうとこう気持ちもありますが、子どもたちは帰化したいという気持ちがあります。娘は日本人と一緒になつていてるんです。はつきり言って日本人と一緒になれば帰化も簡単に許可が下りるんですよ。孫達の将来のことを考えてみると今さら本国に帰つて生活はできません。本国にはもう何もありませんし、誰もいません。身内はいるようなのですけれども、会おうとも思わないし全く連絡は途絶えています。会つたかといつてどういうこともないし、日本でとりあえず骨を埋めるつもりでいます。子どもたちも当然そななるだろうし、私の子どもや孫達は本国語は全くわかりません。教えてないし、また彼らも覚えようともしない。どうせ日本で骨を埋めるんだつたら日本の習慣に基づいて日本人と同じ生活をやつていかななんらんという気持ちもはたらきましたし、今でも差別を受けるとかそういう事が若干あつても私自身の行ひでどうにもなるものだとこうとを悟つて、進んで皆に奉仕するという気持ちが大変良かつたのかとも思ひます。

地域に奉仕

いろんな団体にも顔を出してお手伝いをする「こう」とからか、今の老人クラブの会長になつたり町内会長も約十年間ほどやつてしまひましたし、地域の青少年育成協議会の副会長をやつたりしました。現在は少年補導委員会の副支部長や老人クラブの会長をしております。自分が進んで皆の中へ飛びこん

でゆくと差別がなくなるんですね。だからこれは差別は自分が作るんじゃなくて飛び込んで差別をなくすような努力をせないかん」と悟りました。だから子どもや孫達にも「皆に奉仕することによってお前はリーダーになれるぞ」と言つんですよ。何でもお手伝いしたらいいいじゃないかと。自分からすんで何でも奉仕するようにしないといけないという気持ちを私はいつも子どもたちに話すんです。

今、七十二歳で仕事はもうあまりできませんね。勤める」ともできないし、やりかけの仕事をどうにか続けております。我々は現在、税金を納めたり色々と日本、つまり地域のために努力してまいりましてけれども、市民権としては全く保障されてないんですね。今まで色々と苦労してきました」とや、これまでの奉仕に対する感謝状とか表彰状をたくさんもらっています。ところが、これは何の支えにもならないし、自分がやつたことについての報酬として褒め言葉をいただいているのだとうへんしか感じてないんですよ。これが生活にプラスしているのかというと全くプラスにはなっていません。奉仕していることは経済的にはマイナスなんですね。とりあえず夜であれ昼であれいつも今日は会議だとか今日は何があつたとか引っ張り出されるのです。「アライさんがやつてくれないと」ということだ、とにかくやつてくれといわれて引き受けるのですがなかなかやめられません。私としては「一期で辞めよう、一期で辞めよう」と言いながらどうしても引っ張り出されるという状態です。

今一つほどそういう事情がありまして、なかなか世代交替ができるないという状態が続いております。奉仕することによって私の人生はこれで満足せないかんなあということで、特に国と国との問題とかはあまり考えたくないのです。また質問があればお答えしますけど、これ以上話す」とはありませんので、それで勘弁して下さい。

仲尾 どうもありがとうございました。

今、朴さんの方から、非常に厳しい同化を強制する日本社会の現実とその中でどうやって差別を越えて生きたりいいかという点で大変示唆的なお話をいただきました。また帰化の点につきましても、思ひが揺れると言いますか、そういう率直なお気持ちを聞かせていただきました。少し時間がありますので、そのあたりを含めて王利錦さん、もしお話の追加がありましたらお話をいただけるでしょうか。

本名で生活できる環境を

王 利錦 そうですね、今、アライさんの話しさを聞いておりまして、もちろんそういう点もたくさんあるかと思うのです。私の願いは日本が国際化に溶けこんで、こんな思いをさせないでほしいのです。息子も孫も日本生まれで、韓国語も息子はしゃべれるけど孫はあまりしゃべれませんね。職業の問題もあります。大学を卒業しても使ってくれる所がありませんね。だから日本も国際化してもらってその人間の成績並びに人格を見て、本名で採用してくれるような日本の社会へ溶けこめるようにしていただければ、朴さんがおっしゃったような帰化しなければ働く所がないとか、差別して使うてくれる所がないとかいうことがなくなると私は思うんです。今、話されたように韓国も中国も台湾も国籍関係なしですね。

また、結婚問題にも国際化は必要です。結婚についての問題は皆持っています。韓国の娘が日本の青年と結婚したり、また韓国の青年が日本人の娘もらったり、現在非常に多くなっているんですが、私のお願いといったしましては、国籍や名前が韓国であっても我々は全く日本社会に溶けこんでおりますから何とか差別なしでいいてほしいと思います。私たちは変わりはない気持ちでおります。なるべく社会奉仕して、日本人よりもっと正しい事をしても当たり前でいいのです。同じようにならね、「朝鮮」とか言われますからね、日本人が五つすれば「つちは十までして、ちょっと優位にたつような仕事をし

なければなかなか認めてもらえないような状態です。私がお願ひしたいのは日本社会で差別なしで、ど
川でも働けるようしていただきたいのが私の一番の念願であります。私の孫にしても大学を卒業し
てどこか働きに行かそうかと思う所はあんまりないんですね。

平等に働ける社会へ

現在、三越土地株式会社という建売業をやっているんですが、この頃、承知の通りバブルで非常に困
難な状況に陥っています。土地をたくさん買つたり地上げしたりしている者はほとんどが今滅びる状態
になつております。私は昔の固い人間ですかから毎年、「買つた買つた」と言つたおかげで、今もな
んとか過ぐせるような状態です。

とにかく、今私が申し上げた通り、国境なしでね、川の会社でも使ってくれるような社会になつて
欲しいなど、日本の皆様にお願いしたいのです。

仲尾 ありがとうございます。まだお聞きしたことはないのですが、これは一つ皆様の質問の
中で、まとめてお答えしていいのかと思ひます。

来日の背景

それでは一世の方々が日本へ川られた背景の歴史を簡単に、説明させていただきたいと思います。こ
れはあるべき朝鮮半島の姿です。つまり三十八度線とか軍事境界線とかそういう分断の線が入つていな
い世界図です。本来はこういう所でありました。王さんがこの釜山でお生まれになつて、朴さんは昌原、
馬山の近くでお生まれになりました。やはり地理的な関係も川てしまつてしまつし、それから農業地帯とい
うこともありまして、この半島の主として南半分、慶尚道、全羅道、あたりからおこしになつた在日の

方が圧倒的に多いとかがっています。

今日のお二人もそうして釜山の近くと馬山の近くからおこになりました。近代になって日本が朝鮮半島に関わりをもちだしたきっかけは一八七五年、江華島事件からです。このときに不平等条約を強い、そして一九〇五年には保護条約を結ぶことになりました。それに対しては抗日義兵闘争というのが日清戦争を機会に当然のこととして起きましたけれども、それについては容赦ない弾圧が加えられたわけです。一九一〇年、明治四十三年八月三十日、日韓併合と日本で呼んでおります時の毎日新聞に書いてありますように「新東洋の平和を永遠に維持し、帝国の将来を保証する必要なるを願い」ということで、日本帝国のために合併したということを、天皇詔書は正直に言っています。そしてここにもあるように韓国の現状はまだまだ治安が十分ではない、つまり治安が十分でないというのは抗日義兵闘争がまだ続いている、そういうことをなくすために頑張るんだというようなことをこの詔書ははからずも正直に言つております。

併合直前の統監でありました伊藤博文をハルビンで射殺した安重根は戦前の日本では暗殺者、チロリストとしての評価でしかありませんでしたけれども、彼は長い間独立抗日運動をやって、最後にもつといれしか手段がないということで伊藤博文の射殺に踏み切ったのです。今、ソウルに行きました、安重根記念館がありましてその事跡が紹介されております。

三十六年間の植民地支配

ソウルに行かれた方はご存知だと思いますが、今、博物館になつておりますのは總督府の建物です。この建物は李朝の宮殿のありました勤政殿、景福宮の前に建てられ、このソウルの目抜き通りから光化門を通して見ると、この建物だけが見えて宮殿が全く見えないという、そういう日本支配の象徴のよう

な建物が建てられました。それから一九一〇年から四十五年までの三十六年間の植民地支配が続いたわけです。

今、お二人が言われましたように朝鮮半島で貧乏になつた、食つていかれないなつたということの原因ですが、これは一九一〇年から三〇年にかけて、産米、朝鮮半島でとれたお米を日本に持つていつてしまつたということがあります。見ていただいたら分かると思いますが、一人あたりの年間消費量を石で表しますと、日本本土で日本人がとつております年間の米の消費高は、一石をやや越えております。ところが、朝鮮半島の場合は、一九一四年の頃が一石をきつて六斗、約七斗という数字ですが、一九三二年お二人がお越しになつた前後には、約四斗というふうに日本の半分以下になつております。それに比例して、日本への輸出高が非常に増えているということですね。ですから自分達が食うのをやめてでも輸出にまわさなければならなかつたという政策が総督府によってとられたということです。米だけではなく綿、大豆なども盛んに持つていつたということもありました。（表1 参照）

それからもう一つ忘れてはならないのは、来年は関東大震災からちょうど七十年にあたります。一九二二年のことですが、九月一日の大震災の時に警察から「朝鮮人が井戸に毒を投げ込もうとしている」というデマが流されてその結果非常にたくさんの中華人の方が虐殺された。その虐殺は警察や軍隊というよりむしろ民間の我々普通の市民がデマに怯えて竹槍や棒切れで武装して朝鮮人を殴り殺したというのが大半であつたのです。これはやはり忘れてならないこととして朝鮮半島から来られた方だけでなく日本には現在たくさんの外国人の方が働いておられます。そういう外国人に対する排外意識というものはちょっと火が付くともう手に負えなくなるという、これは決して七十年前のことではないという思いがいたします。

そしてそのような在日の方が日本に来られたのはいつ頃からだったかというと、一九一〇年の併合の頃には七百九十人しかおられない、しかもこれはほとんどが留学生だつたんですね。急速に増え出したのはシベリア出兵の一九一八年、米騒動があつた時代から増えています。これはやはり産米供出運動が軌道に乗つて日本にどんどん米を持って来てしまつたということです。今の関東大震災の時には八万人の方が日本におられましたが、その内のかなりのパーセンテージの方が犠牲になつたわけです。

強制連行の実態

それからお二人がおみえになりました一九三〇年には、二十九万八千人、三一年には三十万八千一百十一人が日本におられたという事になります。そしてこの一九四〇年を越えると、また百万を超える人が日本におられる。そして敗戦の一九四五年の時には、二百三十六万五千人という数字が出ておりますが、これは公式の統計に出ている数だけだと思います。この頃はいわゆる強制連行、徴用という形で朝鮮総督府と日本政府が、工場や鉱山の労働力の枯渇を防ぐため、特に男子の人々をいわば強制的に引つ張つて来たのでこのように増えたわけあります。（表2参照）

京都市の社会課、今の民生局の前身が一九三七年に実施した市内在住の朝鮮出身者に関する調査から京都の場合を見てみると、当時の人口百八万五千九百二十一人の中で朝鮮出身同胞人口というのは三万一千百四十三人、世帯数で四・一%、総人口に対する割合は二・九%ということになつております。この数字は現在京都市の人口は百四十万、そして今京都市に在住の方が三万七千人くらいだと思いますがほぼそれに近い数字ですね。現在いらっしゃいますのと同じくらいの数字が一九三七年の時点までであります。京都市の商工会議所の統計によると、一九二九年の失業者は日本人が四千三百六十六人、朝鮮人が三百六十五人です。ところが一九三〇年になりますと、失業者総数は日本人は減つていますが朝鮮

▲表1 朝鮮産米と日本への移出量・1人当たり年間米の消費量

年次	生産高:A (千石)	反当収量 (石)	日本への 移出高:B (千石)	B/A (%)	1人年間米消費量(石)	
					日 本	朝 鮮
1914	14,131	0.952	1,143	8.1	0.981	0.694
1915	12,846	0.858	2,205	17.2	1.111	0.724
1916	13,933	0.917	1,257	9.0	1.078	0.676
1917	13,688	0.895	1,131	8.3	1.127	0.731
1918	15,294	0.988	2,062	13.5	1.144	0.682
1919	12,708	0.826	2,800	22.0	1.125	0.734
1920	14,822	0.957	1,986	13.3	1.118	0.623
1921	14,324	0.935	3,387	23.6	1.154	0.660
1922	15,014	0.964	3,138	20.8	1.102	0.650
1923	15,175	0.979	4,051	26.8	1.156	0.628
1924	13,219	0.839	4,857	36.7	1.122	0.6032
1925	14,733	0.932	4,745	32.2	1.128	0.5186
1926	15,301	0.964	5,776	37.7	1.131	0.5325
1927	17,299	1.080	6,456	37.4	1.095	0.5245
1928	13,512	0.890	7,010	52.0	1.129	0.5402
1929	13,702	0.840	5,781	42.1	1.100	0.4462
1930	19,181	1.154	5,164	26.9	1.077	0.4508
1931	15,873	0.948	9,027	57.0	1.128	0.5201
1932	16,346	0.955	7,478	45.7	1.014	0.4119
1933	18,193	1.072	7,885	43.3	1.095	0.4117

小早川九郎著「朝鮮農業発達史」付属・資料篇より。

ただし年間消費量は旧岩波講座「日本歴史」現代2所収の山辺健太郎「日本帝国主義と植民地」より。

■朝鮮産米生産・移出指数

	栽培面積	収穫高	反当収量	移出高
1910（明治43）	100	100	100	100
1920（大正9）	115	143	124	403
1930（昭和5）	123	184	150	1,060
1935（昭和10）	125	172	137	1,823

細川嘉六「植民地」ならびに小早川九郎、前掲書より。

▲表2 在日朝鮮人の人口推移（日本敗戦まで）

年度	在日 朝鮮人數	前年比 增加人口	備考
1876 (明治 9)	-	-	朝鮮の開港（「江華条約」）
1895 (明治28)	12	-	日清戦争終結
1905 (明治38)	303	-	日露戦争終結。日本、朝鮮を「保護国」とする
1909 (明治42)	790	-	安重根、伊藤博文を射殺
1910 (明治43)	-	-	「日韓併合」。日本、朝鮮を植民地化する
1911 (明治44)	2,527	-	朝鮮総督府の「武断政治」
1912 (大正 1)	3,171	644	土地調査令。中華民国の成立
1913 (大正 2)	3,635	464	第1次世界大戦（～1918）
1914 (大正 3)	3,542	93	1
1915 (大正 4)	3,999	447	期
1916 (大正 5)	5,638	1,649	ロシア革命
1917 (大正 6)	14,501	8,863	日本、シベリア出兵。米騒動
1918 (大正 7)	22,262	7,761	3.1独立闘争。上海に大韓民国臨時政府
1919 (大正 8)	28,272	6,019	朝鮮総督府の「文化政治」。産米増殖計画実施
1920 (大正 9)	30,175	1,901	
1921 (大正10)	35,876	5,693	
1922 (大正11)	59,865	23,989	
1923 (大正12)	80,617	20,752	関東大震災。多数の朝鮮人が虐殺される（約6,000人）
1924 (大正13)	120,238	39,621	
1925 (大正14)	133,710	13,472	2 朝鮮共産党創建される。治安維持法成立
1926 (昭和 1)	148,503	14,793	6.10独立万歳闘争
1927 (昭和 2)	175,911	27,408	新幹会（統一戦線の抗日組織）成立。日本で経済恐慌
1928 (昭和 3)	243,328	67,417	張作霖爆殺事件
1929 (昭和 4)	276,031	32,703	元山ゼネスト。光州抗日学生闘争。世界大恐慌
1930 (昭和 5)	298,091	22,060	間島5.30蜂起
1931 (昭和 6)	318,212	20,121	万宝山事件。「満州事変」
1932 (昭和 7)	390,543	72,331	「上海事変」。「満州國」成立
1933 (昭和 8)	466,217	75,674	第 日本、国際連盟を脱退
1934 (昭和 9)	537,576	71,359	産米増殖計画中止
1935 (昭和10)	625,678	88,102	3 「天皇機関説」問題化
1936 (昭和11)	690,501	64,823	期 祖國光復会（会長金日成）。朝鮮思想犯保護觀察令
1937 (昭和12)	735,689	45,188	「慮溝橋事件」。日中戦争の全面化。「皇國臣民の誓詞」
1938 (昭和13)	799,865	64,179	朝鮮陸軍志願兵制
1939 (昭和14)	961,591	161,726	「創氏改名」。国民動員計画。第2次大戦（～1945）
1940 (昭和15)	1,190,444	228,853	第 日独伊三国同盟。大日本産業報国会
1941 (昭和16)	1,469,230	276,786	朝鮮思想犯予防拘禁令。太平洋戦争はじまる
1942 (昭和17)	1,625,054	155,824	4 朝鮮徵用令。朝鮮語学会弾圧
1943 (昭和18)	1,882,456	257,402	「カイロ宣言」。朝鮮学徒兵制
1944 (昭和19)	1,936,843	54,387	朝鮮徵兵制。建国同盟結成
1945 (昭和20)	2,365,263	428,420	8.15「解放」

出所：桃山学院大学人権委員会「定住外国人の人権」より作成（備考欄は著者）

人の方は七・七%から十・一%というふうに比率の上からも絶対数からも増える」ということになつています。一九三一年になりますと、それはもつと厳しくなり、失業者数は日本人が四千九百七十人、総人口の三・一%なのに、朝鮮人の方は五千五十三人で実に三十八%の人、つまりほん一人に一人の人が京都市内でもともな仕事がなく失業されているという状況になつたのです。このまつただなかに朴さんがお越しになつたということです。王さんのお越しになつたのは一九三〇年の頃です。（表3参照）

生活苦の朝鮮出身者

生活困難という人が、二五年で三十一%，三四年では三十五%と増えております。求職、出稼ぎ、まあこれも生活困難と関わりがあると思うのですが、一十七・一%，三十一・三%と増えております。ただ単純に「金儲け」と答えられている人が、十七%あるいは十三%といったわけですが、「金儲け」と比較的余裕のある答えをした人が三十四年には減つていて。つまりそれだけ情勢が厳しくなつていたということだと思います。（表4参照）

それから、それ以外の項目として「生活の向上のために来た。あるいは内地への憧れのために来た」という答えがありますが、これは先ほどのお話をもりますように、日本へ行つたら少しでもましな暮らしができるのではないかという思いが、来られる」とのもう一つの背景と言いますか、行こうという意志を固める一つの理由になつていて。逆に言ひますと、それほど朝鮮半島での生活が耐え難いものになつていたということかと思います。

次に、先ほどの社会課の調査報告の中の一節には、京都へ来られた方は、その頃から一ヵ所に集まつて生活される、これは助け合い、それから仕事の情報交換という」ともあつてまとめて住んでおられた」とどがつたのです。

千本三条を西へ一丁、元辻紡績の跡地にはかなりの方が住んでおられた。ここは、いずれも甚だしい晒屋で堀つ立て小屋となんら変わることではなく、人間が住むに最悪の条件を備えていると考えてよい。居住者の多くは市の失業救済対策であるということが出ております。次に下京区東九条岩本町、ここは今もたくさんの方が住んでおられます。河原町塩小路南へ五丁、土地は平坦であるが湿地であり住宅地としては不適当であるとされている。家屋は瓦葺き、トタン葺きの木造平屋建て長屋が主であつて、棟数は二十八、戸数七十三戸。建築年令数は約二、三十年であるが相当荒廃している。それから職業としては、日雇い、土木、くず買い、工場雜役等であるということであります。

厳しい住居環境

この地域は元一般住宅であったが朝鮮出身同胞が住み始め、また付近に「内鮮戰融和団体」が「協助会なるアパートを建設せしより、急激にその増加をみたのである」ということで今日の岩本町の歴史を物語つております。三番目は中京区西ノ京南原町、西大路三条を東へ約一丁ですね、ここは合計約四十九戸となっておりますが「住家としての形態を整えたものは数戸に過ぎず、他は古き納屋・馬小屋・倉庫等を改修し、あるいは建具をもつて固いして居住している。屋根はトタン葺きで天井低く、建具の完備しているのは少ない。降雨の際はすぐに氾濫する」こういう非常に厳しい居住条件の中で住んでおられたというのが当時のお二人の来日された頃の率直な状態でござります。(表5 参照)

一九四〇年をこえますと、強制連行が本格化しました。一九四四年には全炭坑労働者に占める朝鮮人の割合は三十三%に達し、これら連行者は日本人の約半分の賃金で長時間労働させられ、逃亡するとみせしめのために虐殺されるケースもあつたということです。このあたりのことについては、新聞、テレビ等で最近ようやく取り上げられるようになりましたのでご存知かと思います。このような実態が日本

▲表3 京都市社会課「市内在住朝鮮出身者に関する調査」1937年

行政区	総世帯数	総人口数	朝鮮出身 同朋世帯数	総世帯比 (%)	朝鮮出身 同朋人口	総人口比 (%)
上京区	53,708	254,519	1,912	3.6	5,546	2.2
左京区	26,770	123,857	1,472	5.5	3,858	2.1
中京区	34,023	181,451	1,354	4.0	5,487	3.0
東山区	26,129	118,235	473	1.8	1,596	1.3
下京区	47,653	235,292	1,835	3.8	7,327	3.1
右京区	16,995	77,970	1,302	7.7	4,118	5.3
伏見区	19,385	89,268	928	4.8	3,211	3.6
計	224,663	1,080,592	9,278	4.1	31,143	2.9

▲表4 市内在住朝鮮人渡日理由

理 由	1 9 2 5 年		1 9 3 4 年	
生活困難	149人	32.4%	274人	35.3%
求職出稼	125人	27.2%	243人	31.3%
金 儲	80人	17.4%	106人	13.7%
小 計	354人		623人	
生活向上	33人	7.2%	30人	3.8%
内地憧れ	51人	11.1%	46人	5.9%
小 計	84人		76人	

「京都商工会議所統計」各年度版より

一、中京區壬生神明町

市電本三條西へ約一丁先は紡績廣地跡である。面積約四五〇坪、周圍に石垣をめぐらし一見城郭の感がある。

斯かる弊の中に密集地帯が存在するなど途行く人々にとつても殆ど氣付かないでらう。
家屋は平家造長屋四戸建二棟、六戸建三棟、八戸建一棟三十八戸といふと相當なもの様に聞えるが何れも甚だしい積屋で頗る小屋と稱せよ所はない、殆んど人の住むに最適の條件を具へてゐるものと考へよい、居住世帯は約四〇世帯、其帶人月一八四人、内大人三四人、學齡兒三人、乳幼兒八人(昭和九年六月調)である。居住者の多くは市の失業教導士工である。之はもと紡績にて使用せる朝鮮出身同胞の從業員に賃付けたものであるが、解雇後も立退かず合先附續後は却て戸数を増加し現在に及んだのである。

一戸當世帯數 一戸當人口 一戸當収賃 一戸當家賃 一人當収賃
一・四 六・六 八・七 一 一 一・三

二、下京區東九條若木町

河原町坂小路南へ約五丁京都府南口東へ約四丁の地域である。地域面積約一千坪、周圍は何れも田畠空地である。

土地は平坦であるが溝地であり住宅地として不適當のものと思はれる。家屋は瓦葺、トタン葺の木造平家建長屋が主であつて棟數は二八、戸數七三戸である。

建築年輪は約三十三年であるが相当完熟してゐる。一戸の大きさは大體四間半及三間の二間であるが數種帝群居せるもの多く、その世帯數一二七、人員五六四人である。而して中乳幼兒は一八八人、學齡兒は九一人である。職業としては日傭、土工、肩負、工場雜役等である。この地域は元一般住宅であったが朝鮮出身同胞が住み始め、又附近に内鉄廠和團體が協助會なるアパートを建設せしより急激にその增加を見たのである。

一戸當世帯數 一戸當人口 一戸當収賃 一戸當家賃 一人當収賃
一・六 七・三 七・四 六・七五 一・〇

三、中京區西ノ京南原町

市電西大路三條東約一丁に存在する。一戸建一六戸、二戸建八棟一六戸、四戸建三棟二三戸、五戸建一棟五戸、計四九戸である。然し住家としての形態の盛ひたるは數戸に過ぎず他は古き納屋、馬小屋、倉庫等を改修し或は建具を以て囲ひして住居してゐる。屋根はトタン葺で天井低く建具の完備せるものはな少い。上下水の設備なく不潔甚しく辟開の際は雨水氾濫する。世帯數七八世帯三三六人、内乳幼兒四〇人、學齡兒四四人(昭和九年四月調)である。尚附近に市電繕保館、京都共濟會經營の公設質屋がある。

一戸當世帯數 一戸當人口 一戸當収賃 一戸當家賃 一人當収賃
一・六 六・九 六・九 六・七八 一・〇

全國にあつたのです。京都近辺もあのウトロの京都軍用飛行場や、今は自衛隊になつております桂の三
菱の軍需工場、それから東山トンネル等の建設現場には非常に多くの朝鮮人労働者の方が働いておられ
ました。

強化されるイデオロギー教育

戦争が厳しくなつていくにつれて朝鮮半島では、朝鮮の方々に対して「お前たちも日本皇國臣民である」というイデオロギー教育が非常に強化されまして、毎朝、学校や職場では皇國臣民の誓詞を唱えなければいけない。私達日本人は教育勅語というものを暗記させられましたけれども、あれと同じように異民族である韓国人の方々にもこのようなことが強制されたのです。児童は「一、私どもは大日本帝国の臣民であります。二、私どもは、心を合せて天皇陛下に忠義を尽くします」と唱えさせられました。

ここでどうして天皇陛下が出てくるのかと言いますと、当時の朝鮮総督府の總監は日本の帝国議会にも責任を負つていないので、直接天皇から任命されて、天皇の下で色々な命令を出すという制度でした。だから朝鮮半島は日本本土と違ひ法律は適用されず、全て「命令」なんですね。

例えば国民総動員法という法律が、本土ではありましたが、朝鮮半島に対しては、国民総動員令を總督府が出すという形で天皇の直轄支配であったのです。そういう所で一体感を高めるために、こういう文言が出てきたわけです。「三、私どもは、忍苦鍛錬して立派な強い臣民となります。」これは一種の同化政策の強制であります。先ほど朴さんもおっしゃったように日本名を名乗ることを強制されたというのが第二次世界大戦中の朝鮮半島の姿でした。一世の方々はこういう歴史背景の中で日本に渡つて「られた」というのが実状です。

第一部

仲尾

お二人のお話しされて、たくさんの「意見」、「質問をいたしました。限られた時間です
で質問の形でいただきましたものについてはお二人方に、あるいは指名されてあるものについてはその
いずれかの方に、お答えいただこうと思ひます。
まず、「」いう質問がございました。「現在の韓国・朝鮮の現状についてどのように考えておられる
かお伺いしたい」これは王利鎬さん自身の「」意見を一言お願いできますでしょうか。

市民権の獲得

王 利鎬 先ほど申し上げたのとあまり変わりませんけどね。我々が韓国人・朝鮮人やからいうて、
逃げ回るようになつた原因は差別されるからであつて、これから先は差別なしに、国際化して、朝鮮の
名前であろうが韓國の名前であろうが、自分の本名を名乗つても官庁とか色々の職場に就くよくな体制
になつて欲しいと、それをお願いしたいですね。

現在は通名と本名があるんですが、孫の名前を付けるときに通名も両方いけるように作つたんです。
王というのは自立ちます、日本人で王というのはありませんからね。日本の名前で呼びやすいように名
字を直せということだつたんですけど、王という名字は先祖代々からのもので、李朝時代の前の高麗時代
からの王建という初代の王様から四百八十五年間続いた名字なのです。この名前は捨ててはいけないと
いうことで、その下に「本」だけ付けて、名前は「ミキオ」とつけましたような次第です。

これから先も私の事業が益々発展すれば、息子たち代々ずっとやつていこうかと思つてゐるんですけど、もしも、この商売が上手くいかない時には自営業をする以外には使ってもらう所がないわけなんで

す。ですからこれを解消するためには日本の社会においても、アメリカのよつに国際化しておればよいのになあと思います。我々は何十年おつても市民権も何もありませんから、市民権を得られるように努力して欲しいと思うんです。アメリカでは五年以上おつたら自動的に市民権も得て、参政権もあるようになります。日本の社会では現在、絶対そんなことがあります。色々な保護問題も全く欠けています。私の場合は税金もすぐたくさん払っているのですが、やはりこれから自分の商売のこと非常に不安です。

仲尾 ありがとうございました。今のお答えの中に、何人かの質問者のお答えが含まれていたと思いますので一問一答という形にはなりませんけれども、お答えの中からそれぞれの思いを汲み取つていただきたいかと思います。朴さんにはかなりの具体的な質問が二つ三つあります「朴さんには帰国される希望があつたのかなかつたのか」ということが一つ。それから「日本の国籍をとる、いわゆる帰化ということについて、先ほど思いを語つていただきましたけれど、もし仮に日本の国籍をとられたとして、個人の状況は良くなつたというだけで、日本の社会は何も変わらないのではないか、外国人であつても、日本の市民権が得られる、そんな日がくる」と願つてやまない。という意見を含めてそのあたりの気持ちをもう少し語つていただきたいという、とでござります。その一点でお話しいただけますでしょうか。

暨にぶつかる結婚問題

朴 田舎 帰化の問題ですけれども、同胞の中にも「何でお前は日本人になるんだ」という考え方をもつてゐる方もいらっしゃいます。ところが、日本で生活する以上は「郷に入りては郷に従え」で、別に日本に帰化してもいいんじゃないかという人も実は多いんです。私もその意見と全く同じです。

先ほどもお話をさせてもらいましたけど、帰化申請するためには何度か法務省に行って用紙をもらって、書いては没にして、またもらってきてという」と四五回繰り返してきてるんです。結局、自分でそのことをできないでいます。一番末の息子は日本人と結婚しました。先方の「両親ともお会いして、いろんな話しをして結婚に賛成という形になりました。結婚式をちゃんと挙げて披露もしようじゃないか」という時点で、やっぱり相手の方が身内に知られたくない、韓国人のところに嫁に行つたという事を大変恥に考えているのでしょうか、披露はしたくないということでした。じゃあ、どうすればいいんだということになつたのですが、「人がどこか旅行に行って、例えば教会でも行って密かに式を挙げて一人が幸せになればそれでいいじゃないか、周囲がどうのこうのということはないじゃないか」というのが先方の意見だったのです。ところがこつちにしてみればやはり、男の子が嫁をもらつて、これからまた人生の第一歩を踏み出すのに披露しないで「あいつはどう」の馬の骨ともわからぬ者と一緒にになって」というのではなく、もとと知人や友人に披露して祝つてもらいたいという親心としての希望があつたんですけど、どうしても先方は身内に知れたら困るのでという希望があつたので、結局、旅行先の教会で式をあげて一緒になつたといういきさつがあります。

周囲が許さない

私たちは日本人と身内になつて親戚になつたわけでも、お互いに心を許し合つてお付き合いせねばならぬでしあうが、こういうことから考えても、どうしても身内だと周囲をばかって反対するんですね。自分たちはいいけれど周囲が許さない、許さないというより引け目を感じていてるというのか、そういうものがあるんです。そういうとこの障害をなくすには、あらが帰化するしかないでしょ。それでも帰化して一年間は「新日本人」と書くんです。新日本人で一年経過するとそれがこんどは消えて「日本人」

ということになるんですが、本籍地と両親の名前は載っているんです。だから戸籍謄本をみれば帰化をしてはいるけれども、もともとは日本人じゃないことが分かるでしょう。ところが、本人にしてみたら一応帰化すれば日本人としての権利は得られるはずだと、例えば選挙権もあれば日本人が国から受ける待遇は同じように受けられるはずです。そんなことで私は帰化もおおいに賛成なんです。

息子は現在帰化申請中ですが、申請して早くて約半年、一年くらいしないとはつきり許可するという通知は来ないんです。許可がおりる際にも、非常に厳しい条件がありまして、財産があること、しつかり税金を納めていること、それからいわゆる人間の品行ですね、いろんな調査があるわけです。とにかく条件が大変厳しいんです。いつ日本に来た、どこへ上陸した、今まで自分の動いた範囲を全部書かなければならぬのです。もしカットしたりしたことが後でばれたりしたら駄目なんです。「そこまでしなあかんか」と少し抵抗も反感もあります。

厳しい帰化条件

帰化する時には日本人になるつもりで帰化申請するのだから快くOKしてくれたらいといふ気持ちはなるでしょう。それがあんまり厳しくされると何か反感をもちたくなるね。ところが、有名人やタレントはすぐ許可が下ります。我々のような者は細かい調査があつて、しかも財産がないと駄目なんですよ。帰化条件の中に「日本国に迷惑をかけてはいけない」というのがあり、そのへんが色々引っ掛かる問題となることもあります。

現在、私の子どもと嫁と弟は帰化しています。一番末の息子の帰化申請はおりる寸前までいつてあります。私はいいとして、孫たちは将来日本で生活をしていかなければなりませんので、帰化申請はちゃんとしてやらなくてはならないなあと考えております。これは考えによつては「お前は祖国から逃げる

▲表6 国籍法にいう「帰化」の条件

- ① 引き続き5年以上の在住。
- ② 20歳以上で本国法の能力がある。
- ③ 素行善良。
- ④ 自己又は生計を一にする配偶者その他の親族の資産又は技能によって生計を営むことができる。
- ⑤ 国籍を有せず、又は日本の国籍の取得によってその国籍を失うべきこと。
- ⑥ 日本国憲法又はその下に成立した政府を暴力で破壊することを企て、もしくは主張する政党その他の団体を結成し、もしくはこれに加入したことがないこと。

のか」と思われるかもしれません。私がいつも仰つて、「郷に入つては郷に従え」と。日本に来て日本で生活している以上生活習慣も全て溶け込んだ中で生活しないとやっぱりうまくいかないんじやないかと思うのです。

だから帰化したからといって必ずしもその根性までが日本人になりきつてしまつとは言い切れないのでしょう。言つては悪い言葉かもしませんが、その時の「便宜」ということがあります。一度帰化しても将来元に戻るのは簡単にできるそうです。だから今、生活している上において帰化するといふことはやはり必要ではないかと私は特に考えているわけで、私自身が帰化申請できていないのは、帰化するしない」というよりも申請用紙に書かんならんのがあまりにも複雑でつづおつづで、特に私には差しつかえる」とも今はいし、まだ子どもたちは子どもたちで別にできるといふ事なんで、私は帰化していません。ただし子どもや孫が希望すれば帰化申請を出してやりたいと思っています。

四 戸籍法の差別法

仲尾 ありがどつございました。お話を中で日本の今の戸籍法の持つてゐる差別性が非常に浮き彫りになつたような気がします。帰化の問題については詳しく話していただきましたし、ご存じの方も多いと思いますが、今おつしやつたような条件を全て満たしても、なおかつこれは法務大臣の裁量に属する」とあります。つまり自動的に帰化するところものではないのですね。そういう点が手続きの煩雜さ、調査に次ぐ調査といふことでの非常な精神的負担、帰化というのも決して差別解消の方法というのではないのです。これも朴さんも言外におつしやつておられるのかと思ひます。(表6参照)

質問の中には「子どもねんが日本名を名乗ることについては、いかがお考えでしようか」それから「三世・四世、在日の子孫に何を希望するのか、期待するのか」という質問がござります。今までの

中でそういうことを少し触れられたかと思ひますが、そういう思いを「お聞かしたいのでその」と合わせてもう一つの質問「お一人の今までの経験の中で一番悲しく思つた」と、一番嬉しいと思つたことをそれぞれ一つづつ挙げていただけませんでしょうか」という質問がござります。お一人から一言ずついただけたらと思いしますので、まず王利鎬さんからお願ひいたします。

王 利鎬 一番嬉しい」ととか悲しい」とは、さうき申し上げたよつた」ことです。ちよつと思ひ出しだだけでも涙が出ますね。クッと喉が詰まるのです。それでも嬉しいことを申し上げますとね。戦後、金をちょこちょこと儲けまして車も乗れるようになりました。いい車に乗つてると「あんな車に乗る」と税金たくさん取られる」と人から言われることもありますけど、ただで乗つてると違つから人に文句言われる筋合いもないし、人の二倍も三倍も高い税金を払つとるのやからという気持ちもあります。

今まで苦労してきて、息子が私のために車を注文してくれたりしたことが嬉しいことの一つです。そして、仕事の関係で裁判沙汰になつた時には、新聞にも色々書かれたりしましたが、最終的には裁判にも勝つて無実が証明された時も非常に嬉しいかったです。

今は幸せです。昔の苦労は全部どこかへ飛んでしまいました。國へ行って先祖代々のでつかい墓を作つて、ちゃんと先祖様の供養もしている次第です。

仲尾 ありがとうございました。

では次に、朴さんに一番悲しかつたこと、嬉しいしたこと、一つづつお願ひします。

朴 玉鑑 悲しい」というのは個人的な問題ですから特にございません。嬉しいこと」というのは一つありました。これは十何年さかのぼりますけど、自分の努力が認められ、大変嬉しいつたといふことがあるんですね。いろんな面で自分から進んで人が嫌がることをやる仕事をして、色々奉仕活動を進んでやつてきたのが認められたということが大変嬉しいつた。今、少年補導委員会の学区の副支部

長をやっています。外国人「」ことが支部長さんに分かれば少年補導委員になれないのです、許可しないのですよ。

奉仕活動に尽力

ところが私を指名して、少年補導活動に一つ力を入れてくれと言つて、「られた支部長さんに、私が外国人は少年補導になれないのだろう」ということを話すと「そんな馬鹿な」とがあるが、地域のために一生懸命活動する者に対して誰が反対するんや」と、「全責任は俺が取るからお前やれ」と言われた時、「こんなに嬉しい」と思ったことはなかつたです。それから二十年近くやつりますが支部長になろうとは思いません。前回改選があり、私に支部長をやれというお話をあつたんですけど「それだけは勘弁してくれ」と言つてよう引き受けませんでした。他の組織でも同じようなお話しがあつたんですがやっぱり引き目を感じますね。私は韓国人だし、長は当然日本人がやるべきじゃないかということで受けながつたんです。ただ、皆さんが認めてくれたことに対しても大変ありがたいし、嬉しいんですけども、これからは日本の社会への奉仕活動にも積極的に参加していきたいと思っています。悲しいことはあります。

仲尾 ありがとうございます。

違つた文化を抱つていてるそれぞれが、地域で一緒に生きていけるのかといふとのモデルのよつなお話を聞いていただきました。

色々示唆た富む点がありました。大変時間が超過してしまつたのですが、最後に一言だけお一人から日本社会に「」これだけは言つておきたい」と「」これがございましたらお願ひいたします。

不公平な福祉制度

朴 壱鐘 恩を売るわけでもないし、自分がやった」とに対して別にどういう言つわけじゃないんだけど、我々こうして日本人と同じように生活をして税金を納めておるんですね。王さんのように事業を持つておられるお金持ちはいいですが、私たちのような小さい鉄工所をやっておって色々波があつて不渡り喰つちやつたりして、本当に乞食みたいな生活をやつたりいろんな荒波の中で過ごしてきただんですね。今も決して豊かじゃないんですよ。

ところが、在日韓国・朝鮮人は老齢年金を受けられないのですよ。税金やその他の義務は全て日本人と全く同じだけ果たしているんですよ、なのに年寄りになつたら「お前へばつちまえ」というふじで全く何もみてくれないんです。厚生年金じゃないんですよ、老齢年金くらいは適応して欲しいなあというのが希望です。

仲尾 今のお話は、国民年金の中の老齢年金が国籍がないために掛けられなかつた、掛けたくても掛けられなかつたために、結局二十五年を満たしていないためにもらえない。そういう方が韓国・朝鮮籍の方で非常にたくさんいらっしゃるというお話でござります。

王 利鏘 そうですね、私の言いたいことは全部申し上げました。あの頃のこと思い出したら今でも涙がこぼれるんですね。皆さん私を見て金持ちと云うけど、これは俺が一生懸命やつてきて得た物だという重みがあります。私がさつき申し上げたように、日本が国際化された社会になって、名前を本名で使っていても同じような取り扱い方で、そして選挙権が欲しいと思います。

私は社会保険を掛けていたから現在、年金ももらつててります。何でもかんでも一銭も払わんと金くれといふのは汚い話じゃないかと思うんだけど、日本人は何もせんで、昔から何も払わんでもくれるようになつてるんですか? そんなん」とはないでしよう。支給されない人は払つていなかつたといつ」と

です。

帰化の問題についても、私の家の場合も戸籍とは色々のりますが、親子二代我慢したら「れも消えてしましますからそういう長い気持ちでいないと、帰化したからといってすぐ日本人になるというのは無理な話です。

制度的な差別の撤廃を

仲尾 今のお話は王さんは政府管掌の健康保険と厚生年金を会社として掛けておられたので、現在支給対象となつて「くる」と「どう」と「いかがさまして、お二人のお仕事の立場の違いが出てきたのではないか」と思ひます。

それから最後におっしゃいましたように、帰化の問題は戸籍の問題とおっしゃいましたけれども、やはり私達がもう一つ考えておかなければいけないのは、お一人がおっしゃっていたことでもありますがないが名前や戸籍上のことはどうであろうとも、日本社会の中で平等に選挙権もありあらゆる社会保障がされること、そっちの方が大事じゃないかと、つまり制度的な差別をなくして欲しいというのがお二人の共通したお気持ちであるように思ひます。

そういう点で私達の日本社会が日本に住む外国籍の方々、あるいは仮に帰化された方であったとしても、制度上でも意識の上でも差別のない社会を作つて「くる」と「どう」と。それがこの在日の方々の今の思い、特に一世の方々の大変苦労に満ちた生涯を生きて「いかがれた」とに対して私達が自ら答えを出していかなければならぬことではないかと思ひます。

限られた時間ですので一問一答といふには必ずしもなりませんでしたがお二人の答えの中から回答を引き出していただきて、あるにはさらに新しい考え方のヒントをつかんでいただけたらと思います。

根の深い差別意識

それから私に一つ質問がきているのですが、「日本人の、朝鮮人に対する差別がなぜ明治から出でたのか」ということです。これは確かに明治以降、日本が植民地化する過程で朝鮮の人々を低く見ることをしましたから庶民もそうなったということですが、それ以前にも実は芽はございました。李氏王朝の文化の方が日本より高かつたのでいろんな交流がありました。その中で憧れを持っていた人もおりましたが知識人は交流をしながらも、彼等には朝鮮国は一段下という意識があつた。

これはどういうことかと申しますと、日本書記の中に神功皇后という架空の人物が新羅の國を征伐に行つたという話がありますが、こういう知識をまるまる事実として受けとめ古来日本は朝鮮より上の國であると思い、それが秀吉などになると日本は神國であるということになつてまいります。ですから室町時代でも江戸時代でもそういう中途半端な日本書記の記事を史実として信じ込んでしまつていたのです。それが征韓論の時に吹き出してきて、無礼な朝鮮を懲らしめるんだということが出てきたんですね。そういう点で、私は日本書記の罪悪は非常に大きいと思っております。今だけではなくて、江戸時代には既に胚胎していた、そういうことについてはまた別の機会に触れる」ともあるかと思いますが、答えさせていただきます。お一人には本当に忙しい中、忌憚のないご意見をありがとうございます。この機会に私達も益々日本が差別のない社会になつていいくように努力したいと思います。どうもありがとうございました。

……第二回 「文化（くわが家の韓国・朝鮮文化）」……

パネラー

張^{チャン}今珠氏（在日一世・団体顧問）

李^イ京觀氏（在日二世・元学校教員）

崔^{チエ}澄子氏（学校教員）

コーディネーター

仲尾宏氏（京都芸術短期大学教授）

（一九九二年十一月十九日実施）



第二回 「文化、わが家の韓国・朝鮮文化」

第一部

仲尾 指さんこくやにちは。アンニヨンハシムニカ。今日はフォーラムの第一回「在日韓国・朝鮮人はいま」です。第一回目は、一世のお二人の方々に大変痛切な思いと体験をお話していただきまして、たくさん教えられるところがございました。今日は女性ばかり三人に来ていただきました。自己紹介をしていただきますが、右から張今珠先生、李京叡先生、崔澄子先生です。

今日のテーマは「わが家の韓国・朝鮮文化」ということで、在日の方々の家庭の中で、あるいは生き方の中などでどのように祖国の文化や伝統が生かされているのか、あるいはこれから若い世代にどのように伝えられていくだろうか、あるいは伝えられないとすればその障害は何だろうかというようなことについてお話ししていただくことになつております。

進め方としまして、最初にそれぞれのプロフィールと申しますか、ご家庭やお仕事をことを含めてお話をいたします。その後、それぞれのご家庭で、民族文化はどのように受け継がれていくのか、あるいは受け継いでいくうえでどういう問題があるかということを、それでお立場が少しずつ違いますが、そのお立場のなかで感じておられる」とを率直にお話していただきたいと思っています。それでは最初に、自己紹介ということで、張今珠先生からよろしくお願ひいたします。

十八才で渡日

張今珠 アンニヨンハシムニカ、私は韓国人一世で張今珠といいます。私は数え年の十八歳で渡日

張今珠

し、五十四年目になりました。それで大体の年が分かると思います。

当時の韓国は植民地の時代でした。私は結婚して日本にきたのです。当時は朝鮮と言いましたが、当時、朝鮮人社会には「協和会」という組織がありました。一番上の役は日本人ですけど、その地域の方達の中にも補導員、指導員をされている方がいました。主人があの時二十幾つで指導員をしていた関係で私にも指導員の奥さんとして、ぜひにと出席を強要されて会合に出でていました。その時から色々な差別がありました。

第一、チマチョゴリを着ていたらその場で指摘されました。私も若かつたので反発したりしたこともあります。終戦当時は、「朝鮮総連」「朝鮮人連盟」という名前の私達同胞の組織がありました。その時、主人は発起人の一人だったこともあり、私も婦人会の役をおおせつかりました。そんな関係で色々と組織を踏んできましたが、本当は平凡な母親であり、おばあちゃんです。

組織では終戦から四十七年間、微力ながら私達同胞の社会に奉仕と云うたらおこがましいけども一人の韓国人のお母さんとして参加してきました。現在も色々な日本の方々との交流が続いております。現在、京都にも全国規模で日韓親善協会という大きい組織があります。そこにも一人の理事として発足の時から参加しています。今日、京都市が世界の文化都市として、また、学術の都市として、京都市国際交流協会の三周年記念にこんな素晴らしい、私達韓国の伝統文化を話す機会を得たことを感謝いたしました。

婦人会の活動に尽力

私は京都府大韓婦人会の発足の時、数えの二十六歳で参加しました。その時から何らかの役を歴任しながら現在まで四十七年間やつてきました。支部、本部、中央と色々皆さんのおかげで無事活動できた

ようなもんです。私も婦人会という所に長くおりましたから、何百人の前で組織の事を話す機会は多くあります。日本の方の前で、まして韓国文化、わが家の文化をタイトルとして話すのにとてもあがつてあります。

まず皆さんにお断わりするのは、言葉がとっても不十分です。昔は日本語が上手でしたが、長い間韓国婦人会の組織におりますのですぐに韓国語が入りますから聞きにくいと思います。孫にも誕生日のカードを書いてやつたら「おばあちゃん、点が間違ってるよ。」と指摘されるような」ともあり、とてもややこしく聞きにくいと思いますが、その点は七十歳の韓国の一世のおばあちゃんと思つてご理解してもらいたいと思います。

仲尾 ありがとうございます。

今、お話をのように一世として張今珠先生にお越しいただきました。それでは李京觀先生お願ひいたします。

李 京觀 こんにちは、李京觀と申します。私は在日一世で母國語は日本語です。一九七一年度に高校卒業後、ソウルの、ある大学に母國留学するという大変貴重な体験を得ました。韓国語も話せますし、読み書きもできます。日本に帰った後はしばらくは在日韓国人が設立した協会が持つていて学校、あるいは枚方の市教委が主催する市民向けの朝鮮語教室で日本人とか在日韓国人に朝鮮語を教えていました。その後結婚し、二人の子供を出産し、現在小学校六年の娘と四年の息子がおります。下の子を出産後、京都韓国学園という在日韓国人一世・二世の学校があるんですが、そこで七年間韓国語の教師をしました。今から三年前のことですが、私の夫は当時同僚で社会科の教師をしていましたけども、学校の帰りに交通事故に遭いまして今は家庭でリハビリ中なんです。それで私もその時に主人と一緒に休職し、今は夫の社会復帰のために一人でがんばっているところです。

仲尾 ありがとうございました。

ただ今は一世で母国留学を果たされました。李京徽先生でございました。では、崔澄子先生お願いいいたします。

複合文化の家庭

崔 澄子 一世の方と一世の方がお話になりましたので、私の出る幕はそんなにないだろうと思うのですが、私がここに座っているのは多分複合文化の家庭ではどのような子どもが育つのだろかという意味だらうと思います。

私は、崔という名前を使っておりますが元日本人として、つれあいと結婚した二十五年前に一応、崔という名前を名乗るようになりました。現在は韓国学園の理科の教師をしております。

韓国学園に勤めて今年で十八年目になります。学園に対する保護者や子どもたちに対するニーズもどんどん変わってくることを実感しながら、日本人として生きたのと韓国人の中にどっぷりと浸つて韓国人として生きてきたのがちょうど半々になる年をむかえます。その時にこういう形でパネラーになるとを勧められまして、私自身の生き方においても自分の生き方を集大成するいい時期であつたようだと思います。

異文化体験が自分をつくる

私はごく普通の日本の家庭に生まれました。父親は高等学校の教師で、教頭を経て校長になりました。母も小学校の教師という家庭で育ちましたので、共働き家庭の子として育ち、教師にはあまりなりたくないと思って教育大には行かずに府大を選んだのですが、そこで今のつれあいと知り合いました。京都

府立大の文家政学部で学びましたが、彼は福祉を専攻しており私は生活科学でした。学部が同じである」と運動部が同じであつたことからお互いを認めあうという形になりました。

彼は大学を卒業して同志社大学院の方に学びましたが、私はそのまま日本の公立中学校に勤めました。そして四年、彼が大学院を卒業する時に結婚という形になりました。結婚と同時に私自身がつれあいの文化の背景を知りたいというよりは自分の子どもをどのように育てるのか、また、自分自身を異文化の中で見つめたいという意味で本国に渡りました。そして約六ヶ月間ソウルで生活しました。その時に得た異文化体験、それが現在の私を作っているのだと思います。

仲尾 ありがとうございました。

今日は三人お越しただいておりますが、それぞれのお立場が、日本にこられた方、日本に生まれ育つた方、あるいは結婚を通じて複合民族家庭といったものを営んでおられる方、非常にはつきりと違います。これからそれぞれの「家庭、あるいは生き方の中での民族文化のありかた、民族文化の問題をどう考えていくか」というお話を聞いていただきますが、三人のお立場の違いによって非常にはつきりと違うところもあり、あるいは同じ問題があるということも出されるかも知れません。そういうことで三人のそれぞれのお立場を、我々聞く者がよく念頭においたうえでお話を聞かせていただきたいと思います。

それでは最初に、張今珠先生から「家庭での衣食住、日常生活を通じて民族文化というものがどのように受け継がれていくっているのか、あるいはどう受け継いでいくべきであるとお考えであるのかと、そのところを数十年の在日の「体験の中でも苦しかったこと、辛かったことを含めてお話しいただければありがたいと思います。よろしくお願ひいたします。

同化政策のなかで

張 今珠 私は幼少の時から韓国で育ちましたから、学校を出て日本に来るまでの生活は身にしみて、今でもみんな覚えています。私達が、韓国で学校へ行っている時は植民地時代でした。そんな時代でしたから学校の勉強、全ての日常生活も日本語一辺倒でした。朝鮮語は自分の国でも週に一時間しかなかったんです。会話も学校での勉強も全て日本語でした。学校の校長先生、役所の所長、皆日本の方でした。日本の政策として、同化するためにはそういうことが行われていたのです。

韓国は昔から白衣民族白衣民族でしたから女性も男性も全国民の九十五%は白い衣服でした。ところが白い服を着ていたら警察が水鉄砲で黒い色をポンポンとかけるんですよ。そうしたら、どうしても色に染めて着なければならなくなるでしょう。今考えたらナンセンスなことですけど、当時は人の集まる所ではいつもそうでした。その時代は天照大神を祭った神社が何処でもありました。そして学生は強制的に月に一回二回と参拝させられたのです。

そんな関係で、私も日本へ来る時は綺麗な標準語を結構しゃべれただんです。それが京都へ来て、関西弁と韓国語が混じって、韓国語も日本語も両方下手になりました。

私は韓国で支那事変も経験してきました。そんな過去の色々な歴史は高名な先生方の書物や講演で皆さんもよく存じておられると思います。私はただあの時代の庶民の生活と現在をお話したいと思います。

韓国も日本みたいに男性じやサントウというちよんまげみたいな髪形がありました。それを警察官とか役所の人間に鉄でちょん切られ大の男が泣いたりするのをこの目で見てきました。それは惨めで悲しく辛いことでした。韓国は昔は高麗、百濟、新羅、を経て一二九一年、李成桂という方が、大田という王様になつて始めて李朝が生まれたんです。国の名前を李朝朝鮮、これが五百数十年続きました。その後の徹底した儒教の教育は今も続いているですが、多くの古いものがなくなつてしましました。かえつて在

曰同胞は懐かしいふるむことを昔のまま何十年引き継いでいます。私の家でもそのままで引き継いでいます。

昔の韓国は武官よりも文官、学問を重んじる政策でした。日本では武芸の方を重んじ、武官が重んじられたと思います。韓国では文官が重く認められた時代でした。李朝時代の政策は徹底した儒家思想で、親を大事にする忠義よりも孝養を第一義にした思想が五百数十年も続いていたのです。それは厳しい植民地時代の三十六年の間も変わらずに私等の中に生き、私はその教えをずっと守つてきました。

生活のなかの儒教精神

韓国では普通、本家が法事を行います。本家の宗孫、と言つたら長男の直系の孫、そのまた孫。私の実家でも十三歳の孫が法事の日は主役を務めます。法事が年に十七もありました。主役の長男の孫は当時の朝から風呂に入り、服を着替えて、蛸で飾りを作り、栗をむいたりして法事の準備にかかります。料理は女性が作つても、供えるのは男性です。女性は汚れる言うて男性がしました。これも儒家精神でした。こうして法事の日は女性はみだりに入れなかつたんです。そんなのを見てきた今、張今珠の家庭はそこまではせんでも法事は昔のままです。

これから私の話を誤解のないようにお願ひしたいのは、地方によつて習慣が違うようにまた家庭の生活によつて法事も結婚式も生活も食生活も幾分異なつてきます。ですから私がこれから申し上げるのが全てそつどは限りません。日本でも例えれば北海道と沖縄が違うのと全く一緒です。本日は私達婦人会の役員たちが大勢みえますが「張今珠が言うのはちょっと違うと思つ」と思われる人がいるかもわからませんが、「これは皆家庭によつて地方によつて違つてきます。」これはどこの世界でも一緒で、日本でも韓国でも中国でも一緒です。ただわが家は私がたまたま韓国で育つたために、自分の目で見て、聞い

て、肌で感じたものを五十四年もの長い間続けています。

重視される法事

韓国は昔、法事は夜中の十一時半頃から始めるんですが、まず表の戸を開けるんです。昔の先祖が表戸から入れるよつた戸を開けるのです。法事には何回も何回もお酒をついで、食べ物、ご飯、水、お吸い物をくり返して一時間半はしつかりかかります。私は今、京都の西院大田町に住んでますけど、同じ方法でやります。息子等が三人東京におりますが、みんなそれは覚悟して家族連れで参加します。韓国では朴大統領の時代にセマウル運動のために皆なくなりました。生活の簡素化という法律ができて夜間通行禁止令が出て十一時までに家に帰らなければならず、早く法事を済ませるようにして八時か九時は終り、遠い人は帰りました。それが現在まで続き、現在は、韓国国内では昔のようにはしません。

今ここにいらつしやる皆さんの中にも、韓国の昔ながらの法事を覚えている姑さんがおばあちゃんがおられる方は現在もやつてていると思います。わが家では今もやつていて、法事はそれこそ誠心誠意、何回もおじぎをしたりしてやります。でも、私が知つてゐる範囲では法事の時、女性はいつも門の外で中まで入れてもらえんでした。私は新しいのをとりいれて女も皆おじぎをします。韓国では日本と違うのは、ご馳走をいっぱい用意して、亡くなつた方がお父さん一人だつたらご飯一つですが、奥さんも亡くなつて一人なら二つ。お母さんが先に亡くなつたら一つ、その後、お父さんが亡くなつたら二つ。例えば再婚を何回かしたらお父さんの法事にはご飯が三つにも四つにもなる場合もあります。嫁さんの数だけみんな一緒に亡き魂が来るからということです。

法事の済んだ後は水氣のものは塩と水に入れ、乾いたものは捨て、お父さんについてきた家来の靈も外に持つていつてほかすのです。今でも私は日本でそうしています。夜中ですから誰かが見ているかと

氣になる」ともあります。」の間NHKで韓國の風習を色々やつていましたが、あれは濟州道の風習でした。鶴橋に住む在口の九〇%は濟州道の出身ですからテレビでもよく放送しますが、やはり地域によって違います。

今は家によつては簡素になつていますけど、私達も大きいテーブルから落ちるくらいお供えをします。地方によつて供える料理も特徴があります。

教育のために伝統を守る

わが家の子どもたちには迷惑かもしけませんが、この母さんが生きている間は、強制はしませんが伝統は守つて現在も続けております。子どもたちにそれをさせるのは一つは教育のためです。十六人の孫も必ず法事には参加します。私はいつも子どもたちに言つて、「いいことは絶対真似せなあかん」今の若い人は何かといつたら「時代が違う」と言いますが、そうではありません。心はいつも一緒、どんなに時代が変わつてもひとつも変わらぬのですよ。私は古いお母さんやから言つんじゃないけど、どこの家でもお母さんがきつちりしたところは間違いがありません。家庭内暴力とかそういうことはお母さんに問題があると思います。極端がもしれませんが、私が今までの人生のなかで見てきたことからいつても、男はそつそつやんちやしてもお母さんがきつちりしていたら、その家庭は大丈夫です。でも、いくらやんとしててもお母さんがでたらめで、旦那を粗末にする家は、やはり教育にちょっと問題があると思います。若い人は「」のお母ちゃん何言つてるか」と思つかもしれません、私自身の経験から「これを語つんですよ。

私は、今日のテーマが「我が家の文化」ですから言いますけど、嫁が四人来たら、お母さんによくしないとは言わない。お母さんは子どもが多いから誰か一人か一人おつたらいいけど、自分の旦那を大

事にしなければならないのは、あんたと子どもと孫のためやと言います。旦那に丈夫で働いてもらおうと思つたら、大事にして食事もさかつとせよといふのがこの姑の持論です、ここにいる若い方にも分かって欲しい。これはお母さんのため、旦那さんのためではありますん、自分のためです。私も年をいつている割に人の見合ひに付き合つたり、色々お呼ばれがあるんですけど、今の若い人は自分は尽くさずにお求めるばっかりです。これだめです、すべては往復ですわ。尽くして苦しんで、与えてもらう。片一方ではありません、路線も一緒です。

国連で指紋押捺拒否を訴える

だから私は若い女性には、ものかくもつと申うんですよ。韓国へ行つたら躊躇はもつときついですよ。だから娘と韓国に行くと、「お母さん」とあんまり女性の悪口言わんといてよ」と言われます。

今、世界で韓国の女性が一番樂です。私等の生活はとても迫つていていけないくらい全てが贅沢になりました。わが祖國も良くなりました。現在、私等の同胞社会でも一世は全体の一割もいません。みんな一世・三世になりました。でもありがたし」とにはやっぱりうちらの組織がきつちりあって、それであります。私は国連まで指紋押捺拒否を訴えに行きました。日本が悪いといつてジユネーブの人権委員会にも行つてきました。例えば「おばあちゃんも日本に来て五十四年間税金払うて住んでいます。眞面目に暮らしてきて悪い」とは一回もしていません、もちろん子どもも一緒にです。だからせて地方参政権くらいは私たちくれるようになつたから私たちの運動に対してぜひとも協力し、賛成の拍手して下さい。お願ひします。

皆がおどつ一つぜひとも知つて欲しいのは、偉い先生方が書かれた書物を見ても一部分だけで全てを表す」とは難しいと思います。日本もそうですが韓国も四千万の国民、ピンからキリまで色々います。

でも儒教精神は韓国本土よりうちらの在日一世、その子孫二世・三世の中に濃く残っています。韓國の人は性格が開放的だと言われております。京都の婦人会では韓親善文化研修旅行としてバス三台で毎年韓国へ行きます。そんな時は日本人人が三十人から四十人、大学の教授達が十何人いつも参加してくれます。今日も京都外大の大石教授と学生さんが多数参加してくれています。大石教授もうちらの文化研修旅行にいつも一緒に行っていただいており、大学独自でも毎年大学生をバス二台で韓国へ行っているんですよ。

韓国に行ったことのある方も多いとは思いますが、韓国って素晴らしいところです。ハワイや香港へ行くより韓国に行ってみなさい、食べ物はおいしいし、言葉は通じるし、違和感が一つもありません。絶対ファンになります。食事は昔から発酵食品が多く健康には絶対いいし男性は逞しくパワーがあるし、韓国の女性は足はきれいし美人が多いです。だからまだ行つていらない人は、婦人会で毎年文化研修旅行をしていきますので、今後とも大いに参加して下さい。そうしたら、ええとこから悪いと全部わかります。一回行つたら絶対ファンになります。どうか韓国旅行も行き、また、私たちの活動にも大いに理解を示して下さい。私も何年生きられるか分かりませんが一生懸命やりますからぜひともよろしくお願ひいたします。

仲尾 ありがとうございました。一昔前に日本に肝つ玉母さんというのがありましたけど、張今珠さんは肝つ玉才モニですね。一世のお立場で率直にお話しいただきました。それでは続いて、李京叡さんに一世のお立場でお話しをお願いいたします。

李 京叡 張今珠才モニが色々お話をさつたことを大変勉強になるなと思いました。私の家庭は、典型的な在日韓国人一世の家庭だと思うのですが、私達の生活は日本人の私達くらいの世代の生活形態と何ら変わるものはありません。一世以降の世代はそれほど日本人に同化しているというこ

とです。それで一番最初に「わが家の韓国・朝鮮人文化」ということで話をして欲しいと言つよくなご依頼があつたときに、本当に話す内容がないということでお断わりしました。自分の生活を振り返つたときに、オモニがおっしゃつたような民族性をほとんど反映できないままに日々を暮らしているからです。それで今日は、「わが家の韓国・朝鮮文化」についてお話するよりは「在日韓国・朝鮮人はいま」という原題に戻つて今日はお話したいと思いますので、了承いただきたいと思います。

自國文化の否定から民族性を意識

今、オモニがおっしゃつたような民族性とか、生活習慣とかいうものは無意識のうちに自然のうちに自分の中に養われていくものだと私は思っています。ところが在日韓国人の場合はそうではありません。ほとんどの人が同じ体験を持つていると思うのですが、在日一世が自分の中に自國の文化というものを初めて意識した時、まずは否定するというところでしか自分の民族性を意識できなかつたような不幸な体験を持っていると思うのです。

具体的に申し上げますと例えれば朝鮮訛りのある両親をすぐ恥ずかしいと思いました。そして先ほどにんにくとか唐辛子発酵の食事だとおっしゃいましたが、日本人の友達の言うとおりそういう物がすごく臭くて嫌だと思いました。本来なら安らぎを得るための家庭がとても嫌で、そういう家庭に生まれた自分自身をも蔑み否定してきた不幸な時代がありました。当然友達に自分が朝鮮人だということが知られないように一生懸命努力しました。と同時にその頃の私は日本人も大嫌いでした。今、そういう時期の自分自身を思い返しても、少しも面白くなかったように思います。毎日を全然楽しくない気持ちで生きていたように思います。

私の母は私が本当に小さい頃に寡婦になりました。私は五人姉妹の末っ子なのですが、母は姉達が次

々と日本人と駆け落ち結婚をしていくことに非常に胸を痛めておりました。母は寡婦の自分が育てているのでちゃんとした家庭教育ができず、子どもたちを日本人に同化させていくのではないかと考えたようです。そこで末っ子の私を自分も一緒に暮らすという形で母国留学させてくれました。それは高校を卒業した年でした。

母国留学の日々

初めてソウルの金浦空港に降りたち、母国といつものまゝの田や見たわけですが、今でも忘れられない一つの光景があります。先ほど朝鮮人は白衣民族だとおっしゃいましたが、一九七一年のことですから人々は当時まだ日常的にチマ・チョゴリを着て生活していました。多分、三十代の婦人だと思つのですが、真っ白なチマ・チョゴリを着た若いお母さんが十才くらいの子どもの手を引いて、頭に大きな荷物を載せて周囲に何もない荒涼とした道を風に吹かれながら歩いていたのです。

私はその姿を見たときに本当に感無量で涙が止まりませんでした。その涙というのは、素直にその姿を美しいと感じた感動の涙でもありました。自分が今まであれほど嫌がっていた朝鮮の衣装を自分が本当に美しいと感じることができたことへの感動の涙でもありましたし、もうひとつは自分自身に対する驚きからかもしれないし、またそれまでの十八年間、これほど美しいものを素直に美しいと感じられなかつた自分自身に対する惜念の思いからかもしれません。それ以降の私は、留学生活の五年間は（最初の一年は韓国語を学び、後の四年間は大学生活）もうスポンジが水を吸うように自分の民族的に欠落した部分を取り戻していくと思います。

ただ、「」申しましても本国での生活が何もかも素晴らしいわけではなく、自分が在日であるといふことからくる色々辛い体験もありました。カルチャーショックはもちろんありましたし、それより

もまず本国の人たちが在日に対してほとんど知識を持つていない」ということが一番辛かつたようになります。私たちがまだ韓国籍でいる」とさえ知らない人がほとんどでした。一番最初に彼等がぶつけてくる言葉は「韓国人のくせになぜあなたは韓国語が話せないのか」ということで、十人が十人ともそういうことを聞いてくるのです。私はその時、本当に韓国語が話せなかつたので反論もできなかつたわけですが、在日朝鮮人の日本での歴史とか、あり方を本国の人たちが本当に関心を持って理解をしていたら、きっとそんな質問は出なかつたと思うのです。私達在日は本国にとつても無意味な存在だ、という情けなさをその時味わいました。私達一世の位置づけ、十八年間、本名さえ名乗れない恥ずかしい生き方しかできなかつた自分の痛みみたいなものを言葉が話せないばかりに母國の人達に訴えられなかつた」とを本当に悔しく思いました。

でもそつとうことも含めて祖国で今まで自分が失つていたものを取り返そう、民族性を全てとして手に入れて帰ろうという思いで一生懸命生活したので、友人もたくさんでき、大変豊かな留学生生活を体験し、日本に帰つてくることができました。自分の中に主体性ができるだ」と初めて分かつたのは、自分自身が解放されこそ他者を受け入れる前向きな姿勢ができるところでした。

本名で子どもを育てる

今度は私の子どもたちとの生活にちょっと触れでおいと感じます。現在、上の娘は小学六年生でクオン・スンギと言います。下の息子は四年生でクォン・サンマン、一人ともハングルの発音通りの名前で日本の地域の学校に通わせてています。私が子どもといつ存在をどのように考えているかと言いますと、子どもは親の背中を見て育つという言葉が昔からありますように、親が自分の生き方を一生懸命生きていくおそれあれば何か意図的にこれについて与えようと、子どもは必ずその中から選びとつて受け継いで

くれると思つてゐるわけです。

私が唯一、意図的に与えたものといえば本名だけです。日本人の方達にはちょっとピントない話かも知れませんが、私が自らの名前を李京觀^{イキョウクwan}と名乗れるようになるまでの十八年間、自分の中で大変な葛藤がありました。皆の前で本名を名乗れるまでは、いつ自分が韓国人であることがばれるのではないかと毎日をびくびくしながら生きており、差別に自らが屈服してしまうという血のにじむような辛い体験もありました。そういう思いの中でやつと本名を取り戻していくた経緯がありました。初めて日本人の友人の前で本名を名乗った時、「これは意外な」とでしたがすごい喜びを感じたものでした。本当に言葉では言い尽くせない喜びでした。

あるがままの自分を表現する「」などが「」などは全く思ひもしませんでした。「」いう喜びを、できる」とない在日一世・二世の人達と共有したいという思いがあります。主体性を持つて前向きに「在日を生きる」と共に生きたいと思うのです。そういう思いが、私の韓国学園勤務という生活につながってきました。

私が唯一意図的に与えた子どものことの本名の問題について話そつと思ひます。我が家の子どもは物心ついて以来、スンギ、サンムンなど本名以外の名前は持たないわけですが、この子どもたちにとつても在日二世としての明るい順風満帆な生活があるばかりでなく、学校などで友達から「変な名前やな」と言われたり、喧嘩をした時などには「韓国人は韓国へ帰れ」などとこう言葉をあびせかけられることもあります。そういう時はやはり親としてフォローしなくてはなりませんが、その時の説明がいつもとても難しくて困ります。変に日本人に対して敵対心や偏見を持つてもらいたくないという気持ちがあるからです。

それでそういう時には「やっぱり日本人の名前の感覚からいえばスンギとかサンムンなどのはおか

しく感じて当たり前かもしれない。確かに日本人にとって耳慣れない響きだからだ。でも日本社会は、韓国人や朝鮮人だけではなく色々な国の人々が一緒に住んでいて共に助けあって暮らしている。また日本人にとつても日本社会にとつてもそういう隣人が必要であるはずだ。だからお互い前向きな付き合いをしなくてはいけない。そのためにも在日一世・二世の役割はすごく大きいと思つ」と、「」のようないとを子どもたちに分かりやすい言葉で一生懸命話して聞かせます。

在日であることを楽しむ生き方

「」の「前向き」ということなのですが、私達一世は先にも述べたように自分の生を「く暗いものとして受けとめる出発があり、その次は自分自身へ課してきたような経過があるので、いわゆる「前向き」というのとは違うような気がします。例えば朝鮮語を勉強しなければならない。歴史を勉強しなければならない。結婚すると朝鮮料理を作らなければならない。あるいは法的地位の問題で鬱陶つていかねばならない。民族教育には貢献しなくてはならない。常に「ねばならない」というような義務のかけ方を自分自身にしてきたからです。

でも、これは不自然な」とで、人間として生まれた限りは自分の生を喜びたい。「私は在日韓国人であることが楽しい、在日で本当に得をした」というような生活を、二世である子どもたちには送つてもらいたいと思っています。在日は韓・日両国の人間関係、文化、言語などを共に備え持つことができるのですから大変得な」とです。

私は先ほども申しましたように朝鮮語が話せます。「」とがどれほど多くの貴重な体験を私に与えてくれたことか計り知れません。先月には精華大学で「アジア・アフリカ文学会議」という催しがありました。韓国、アフリカの両国から作家、詩人、俳優、あるいは反アパルトヘイトの指導者や学者が集

まで、「被抑圧文学」というテーマで話し合ひがもたれました。そこで私は韓国チームの通訳をさせたいだきました。この時、韓国人やアフリカ人との素晴らしい人達との出会いがあつたばかりではなく、その文学会議を準備、進行なさった日本の方々との出会いが素晴らしく大変インパクトの強いものでした。私はこの時も在日で良かった、朝鮮語が話せて得をしたと思いました。」という思いの延長上で子どもたちを育てていきたいと思っています。

韓国人だから韓国語を学ぶのは当たり前だといふことではなく、より可能性を広げるために勉強するとか、文化についても前向きに受けとめてもらいたいのです。私自身、民族衣装に対しても以前はギラギラした原色が嫌いでしたが、そのアンバランスな色の対比の美しさを知ることで、今は逆に日本の着物の曖昧な色合いの美しさも知るようになりました。二つの文化のどちらかに優劣をつけるのではなく、同じ価値として、しかも互いの特異性を認識して受けとめ評価できる、それが在日の特殊性だと思うのです。そんな前向きな生き方をしてもらいたいと思っています。

ぜひ選挙権を

最後に張オモニと同じく、皆さんにお願いしたいことがあります。在日韓国人が日本に渡ってきて半世紀以上が過ぎました。しかも居住するうえでの全ての義務は果たしています。私達にぜひ選挙権をあたえていただきたいと思います。こんな考え方を持つに至ったのは、指紋押捺問題などが運動によつてどんどん解決されていくなかで、できれば権利も与えていただきたい。」こういう思いを皆さんにも知つていただきたいと思います。ほとまりのない話しだしたが、これで私の話を終わります。

仲尾　ありがとうございました。一世のお立場から大変厳しい同化の壁をつき破って自己の民族性を発見された、大変感動的なお話をいただきました。

それでは今度はまたお立場を少し変えて、崔瀧子さんから一つの家族の中での複合文化の可能性についてのお話を聞かせていただけるんじやないかと思います。よろしくお願ひします。

自己を見いだせない在日二・三世

崔瀧子　今、張今珠先生が一世の立場から、李京觀先生が一世の立場から語られましたので、ほとんどそこに象徴的に語られてきたと思うのですが、李京觀先生のように非常に恵まれて本国に渡り自分を取り戻していかれたっていう方は本当に数少なく、大半の一・二・三世達は、まだ自分自身を見いだせないで、非常に悶々とした中で生活しています。結婚や就職、それからいろんな日常生活の基本的なところでもまだまだ不安定な形のまま、悶々としているところを忘れてはならないだろうと思います。司会者の方が先ほどおっしゃいました、複合文化の中で子供を育てたというおこがましいことではなくて、自然の生き方の中で子どもたちはどう育つていったかという」とと、もう一つは私が原体験のないまま、民族学校である韓国学園で今まで勤めていた中で、今になってやつとつかめてくる」と時間をあるだけお話していただきたいと思います。

先ほど自己紹介のなかで少し話しましたが、私は結婚して間もなく夫と一緒に韓国に渡りました。夫は韓国神学大学で学ぶことになりました。私はそのキャンバスの中の教授の家のオンドルバンを一つ借りまして、そこで生活を始めました。小さな四畳半くらいの部屋でしたが非常に暖かく迎えられまして、夜中には神学大学の学生達がよく私達の部屋を訪れてくれまして本当にいろんな話に花を咲かせました。

学生達は非常に話好きで話しだしますと、もうさりがないんですが、こと歴史の話になると様相が一転します。反日感情がもうでてくるのでもうそこには私がいるというのを忘れてしまいました、非常にすさまじい議論になります。私はそこで気がついたんですが、先ほど、本国の人は在日韓国人のことを探んど知らないとおっしゃいましたが、逆に日本人として、戦争責任を負っている加害者として、私自身が韓国の学生達との会話の中で、彼らの憤りを見て本当に非常に多くのことを学びました。

戦争責任を曖昧にしてきた日本人

すなわち日本人自身が自分達の師である韓国の歴史を全く知らないし、韓国を植民地化してしまったという現実から目を遠ざけ、見えなくしているという現状を感じました。それは日本人の悪いところで、やはり現在、問題になりかけている従軍慰安婦の問題など、いろんな」とを考えますと日本人といふのは本当に戦争責任を曖昧にしてきた、その曖昧な実態把握が現在の日本人の体質になってしまっているのではないかと。先ほど李京觀先生の話を聞きながら逆に胸の傷む思いをしたわけです。

そして私自身は韓国でいろんな体験をして、六ヶ月の生活を終えて日本に帰ってきましたし、夫の両親と九条の同胞の密集地域で同居生活をする」となりました。義父は強制連行で連れて来られて染工場で工員として働いていました。義母はその何年か後に夫である義父を頼つて日本に来たようです。結婚した当時は義父になかなか会えず、どうしたのかと思つていますと、いつも朝早く五時頃出かけまして夜遅く帰ってきます。義父は非常に長い間勤めていたんですが、ずっと工員として同僚はどんどん出世コースをたどつて行きますが、義父は万年工員であつたようです。ですから日本人と同じくらい給料をもらおうとするも、朝早くきて残業してという形になつたように思います。

義母もほとんど日本語がしゃべれず片言の日本語で、自分達が無知である」とほどかわいそつなりと

はないと、だから非常に貧しくとも子どもたちには大学までだしたい「とこう」とで、夫は三男ですが四人の子どもたちは皆大学までの教育は受けさせたようです。義父の晩年は、先日第一回目にお話をになりました日本の中でも成功なれつた方のようではなくて、平凡な「く貧しい家庭で本当に平均的な在日同胞の一生、すなわち故郷に思いをはせながらも帰れずに非常に寂しい一生を終えたように思います。

民族教育で自己をとりもどす

そんな一世の生き方の中から何を学んだらいいのかということや夫や子どもたちといろんな話をするのですが、一世の生き方の上に一世は余りにも安穏と座りあがでいるのではないかと思います。特に私が勤めている韓国学園の現状を見て、私は一世のオモニ達は本当に自分自身を肯定する機会をつかめず、現在に至ってしまっており、自分を隠してだしきれないままに今になってしまった。だから自分自身を肯定できないといふに明るい希望を持った生き方は出てこないわけで、現在、本校が抱えています民族学校の危機ということにもつながります。

私たちは今、十一月頃になりますと学生募集に出かけます。「どうじゅう」とかと書いますと、放つておいたらほとんどの在日子弟は日本の高等学校に進学してしまうのです。先生達が一戸一戸の門を叩き訪問し、学生募集をします。真っ暗な中、電池を持って表札を捜して歩くのですがほとんどが通名の表札です。やつと捜しあとだと思って「金さんのお宅ですか。」と聞くと「金本です」「韓国学園から来ました」と言うと「結構です」と断わられる。まるでセールスマンが断わられるように追い出されるのですが、それを見ていると非常に胸が痛むのです。どんな理由であれ本校を訪れた子どもたちは卒業するときには自分自身を取り戻しています。そして明るく「本校にきて良かつたなあ」という姿を私たちは見ています。おも李先生がおしゃっていたように、自分を取り戻していく過程が本国であればもち

ろんもうといいかも知れませんが、韓国学園の中で民族教育の中で生徒が変わつていくところが私達にとっては本当に大きな喜びの一つなのです。

韓國学園の歴史

私が韓國学園に勤めたのは一九七五年でした。本校の歴史は、一九四五年に解放と同時に設立され、その当時から現在までを大きく四つの時期に分けています。最初の時期を「混乱期」。解放の喜びをかみしめながらほとんどの人は帰つていったんです。現在では定住を前提とした民族教育に変わりつつあります。ですが、当時は別のニーズから「母國語をしゃべれるようになってから帰ろう」ということで、帰国を前提とした民族教育がいわれ始めました。その頃を「混乱期」と名づけています。その後「中興期」を迎えました。どんどん生徒が増えてきまして、中学校は「クラス」になり生徒数も増えてまいりました。その後、一九六三年、高校が併設されます頃から「苦惱期」に入ります。建物が老朽化してきた頃に本国から模範学校の建設の許可が下りまして、最初は銀閣寺の方で予定地が購入されたのですが、新しい用地を購入しようというときに住民の反対でだめになりました。次は桜原、それもだめになりました、結局現在の本多山入手までを「苦惱期」というふうに名づけています。それから本多山を入手、さあどうみな闘いはあつたにせよ現在に至るまでを「再生期」と名づけています。

私が勤めたのは「再生期」に入った頃で、学生会の役員を連れて本多山に取材に行つたこともありました。最初はさまざま反対があつて住民との間も本当に険悪なものでしたが、しかしそれを支える日本人の何人かのグループもできあがり、建設促進委員会が反対委員会と対抗して運動が組まれました。そして一九八一年には在日韓国人の教育のあり方を考える試案が出され、それから約十年間暖められ、今年それが方針となつてでた。そういう経過も私たちの学校の建設問題から発生した一つの出来事

ではないかと私たちには捉えています。

在日の存在が見えない

自分の家のことより学校の話になってしまったが、やはり日本は「国際化」という波のなかで、もう少し日本人自身の問題として考えるべきでしょう。飯沼先生の「見えない人々」という本の中でも人作家エリクソンが言っていますように、あれだけいるアメリカの黒人が見えない存在となっているのは目が見えないということではなく、精神的に見えなくしている。まして日本にいる七十万人近くの在日本韓国人が見えないのは私達日本人自身の問題です。見えない人が見えるようになるには、ただその隣人を自分と同じように喜び、悲しみ、悩み、苦しむ一個の人格として考えること、そのことのみによるものです。

私はどちらの文化にもまたがっていますので、その間に生きる子どもたち、複合文化に生きる子どもたちは一体どのような生き方をしていくのかということにやはり関心を持ちます。最近新しいデータが出ましたがそれはアメリカ人のラミレズという人がメキシコ系のアメリカ人の中から色々データを集めたのですが、複合文化の中で生きる子どもたちの中には二つのタイプがある。一つは非常にプラスのタイプで、自分自身の文化、自分が育ってきた文化を大切にする親から生まれた子どもは社会的にもリーダーシップをとり、変革の中でもリーダーシップをとり、揉めあってているグループの調停役もできる、カウンセラーの役目もできるという新しいデータです。マイナスのグループは自分を隠し、自分の文化を誇れない親から生まれた子ども、育てられた子どもは非常に歪んでくるというのです。最近までは複合文化のはざまで生まれた子どもというのは、いわゆるマージナルマン的な存在として仲間に入りこめなくて回りをうろついていたりしているということでしたが、そうではなくて積極的な親からは非常に新しいタ

イプの子どもたちが生まれているという現実が発表されました。

オモニは自分自身に自信をもて

日本の文化の中で本国の文化を携えながら生きていぐのは非常に大変なことですし、それだけ努力も必要だと思います。学園建設問題にあるような、日本人が知らねばならない非常に生々しい差別は過去のエピソードではなくて現実にあるのです。在日韓国人あるいは在日外国人は日本のなかで非常にしつこい思いをしながら生きていることをしっかりと知つて、それを支えてくださったグループのように、その痛みを自分のものとして捉える時に今、何をなすべきなのかが見えてくるはずです。人間というのは自分中心で自分自身のことがなかなか分からぬようになります。他人との関わりの中で、自分を投影し、どのように関わっていくか、すぐ隣の人とどのように関わっていくかという生き方の中で初めて自分を相対化できると思います。ですから日本の方はそういう現状を把握していただきたい。

今日ここに在日韓国人のオモニ達がたくさんいらっしゃいますが、これだけ優秀な文化をそなえた五千年の歴史を持った末裔であるということを、オモニ達にはもつと自分自身に自信を持つていただきたい。日本にも古代には日本に文化を伝えた優秀な民族であるこの子どもたちはハングルや韓国の古典文化を習う時に非常に喜びを持ちます。

オモニ達も日本で生活するのは大変ですが、自分を肯定しないと前には進めません。日本社会に逆にインパクトを与えていくという大事な存在であることも忘れないで欲しいと思います。世界は新しく動き始めました。民族問題の時代だといわれます今日、韓国学園のに勤めていく中で一人の小さな命が新しい自分自身を見つけ、希望をもって立ちつてしていくという営みに加わっていくことを非常に嬉しく思っていますし、本校が子どもたちに与える教育というのはやはり希望を学ばせるということ

であると思つています。ありがとうございました。

民族の文化、伝統と一人一人の生き方

仲尾 ありがとうございました。このように皆様のお話を聞いておりますと、今日のテーマは在日の「家庭での文化」ということになりましたがそれを含めまして、今の在日の社会の置かれていくる大変難しい問題、つまり同化の圧力が非常に強い中で、どうして子どもたちが誇りをもつて生きていけるだろうか、あるいは名前を本名のままに使えるような日本社会に変わらねばならないということについてどれほど日本人が思いを抱いているだろうか、いろんなことで根本的な問題が提起されたような気がいたします。そのことにつきましては、皆さんのが質問を出していただき中でおたずねの件を中心にして三の方にお話ををしていただきたいと思います。民族の文化、伝統と一人一人の生き方についての民族性と言いますが、そういうものについてのお話を中心に三人の方にしていただきたいと思っています。

今日は時間もありませんので省略して少しだけ紹介します。これは最初の張今珠さんのお話との関連で説明していただきたい方がよいですね。これは朝鮮半島全体の地図ですが、先ほど言われた済州島は、ひとくちに三千里といいますが大変長い半島です。韓国・朝鮮料理というと辛いというのが日本人の印象ですが、私の聞いております限りでは南の方ほど辛い、北の方ほどあまり辛くないということです。

張 今珠 私もあまり分かりませんけど、私達から見た場合は、日本も一緒で、都会と田舎ではちょっと違います。だいたい私は釜山より、こっちですから、やっぱり料理もそつちの方が口に合つし、所によつて材料も違いますね。さつき申しました慶尚北道は山菜の料理がおいしいですし、南の釜山からこち馬山では魚の料理がとても得意です。地方によつても違つてあります。

仲尾 それからなぜ南のほうが辛いのかという理由ですが、私の知っている限りでは、辛い材料である唐辛子が東南アジアや琉球王国から、そして日本の九州あたりの商人の手を通じて朝鮮へ入ったと。今から四百年から五百年くらい前のことですけれども、そういうことで比較的南のほうが唐辛子文化を早くから受け入れる機会があったと聞いています。

張 今珠 唐辛子というたら韓国独特的の食べ物と皆さんは思うでしょうが、先生がおっしゃったように、韓国でもあの辛い唐辛子は韓国から始まつたのではなく、日本から韓国へ伝わったというのが一般的の知識となっていきます。

韓国ではどんなに時代が変わっても、食事の時にはお父さんが絶対的な権力をもらします。「ご飯をよそう時もお父さんが先、いいものは全てお父さんが一番で次がお母さんです。」これは日本も一緒だと思います。私が日本に来て一つ矛盾を感じたのは、韓国は今でも親類縁者だけではなくても、食事時に人が来たら挨拶がわりに「ご飯を食べなさい」と言うのが独特の風習です。日本では親類縁者でもない人には「ご飯を食べなさい」とは言わないでしょう。私は五十四年前に日本に来て、兄弟で鐵湯へ行つてそれが自分のお金を払うのを見てなんと情がない」とかとびっくりしました。

仲尾 それから日本では食事をする時には茶碗を手に持ちますが、韓国・朝鮮では逆に手には持ちませんね。

張 今珠 手に持つたら品がないです。

仲尾 これは、日本の場合は量の生活が室町時代から始まり、低いお膳で食べるから手に持たざるを得ない。朝鮮・韓国ではテーブルで食事をするため、むしろ手に持たないで、西洋と同じような文化が発展したんじゃないかと思います。

今度は着物について少し説明いただけるでしょうか。

張 今珠 私達と一緒に文化研修で韓国に行つた時には、日本の方もチマチョゴリを必ず作つて最終パーティで着たりします。だいたい日本の着物と同じです。私が初めて日本に来て、朝鮮の服を着て協和会の役員会に出た時に「朝鮮の服は着たらいけない」と言われて、私も朝鮮民族の誇りを傷つけられた思いでした。二十歳やそこらで若かつたので「朝鮮人が朝鮮の服着て何が悪いか」と喧嘩したことを感じています。あの時は朝鮮の服しか着ませんでした。日本のちゃんとした所では門前払いみたいなこともありました。着物とチョゴリは、ほどいたら何かできるけど、チマチョゴリのスカートは他に再生素びます。が、チョゴリは布が小さく切れていますから他のものには絶対できません。そしてチマチョゴリにも流行があります。この間もテレビでやつていましたけど、大阪の鶴橋へ行つたらすごい大きい店がいっぱいあります。韓国で作つたチョゴリはモダンで洒落っていて、チマとチョゴリは短くなつたり長くなつたりと流行があるんです。だからそのたんびにこつちも追いかけて作らないといけません。

チエサと呼ばれる法事は、テレビで放送されたようなちやちなものではありません。お供えももつと豪華で、それこそ大きいテーブルに一杯です。日本と韓国が違うところは独特の儒教の精神のため普通は仏壇はありません。韓国人は結婚してないと亡くなつても仏壇とが法事とがはしてもらえません。結婚しないで亡くなつてしまつた仏はよい仏じやないというんです。親より先に若くして死んだのはためにならない例としてあんまりお呼びがないんです。年がいて亡くなつてこそ法事もしてあげ、大事にしてもらえるのです。

仲尾 それから、私が韓国人や在日の方々と会つて、いい習慣だと思ったのは、田上の人に対しても、田上と書いてあるけれどまあ誰でもいいんですが、飲み物を注ぐ時も両手で行うという例。これは見ていて非常に気持ちがいいです。日本でも茶道のなかでいろんな形のよい習慣が生まれていま

すが、先ほど紹介しましたものは日常生活の中で韓国・朝鮮の方が自然に身につけられた非常によい習慣で私も早速とり入れています。

張 今珠 自分が持つやかんでも瓶でも左手でこう支えてやる。みなさんが知っていると思いますけど、韓国では煙草は絶対目上の人前でスパスマ吸引ません、お酒も横向いて飲むんです。そういう儀数の流れのよい部分は残っています。日本のバスや電車ではお年寄りがいても若い人は平気で座つていいんですけど、韓国では今でもお年寄りには議つてあげるのをよく見ますね。

内戦融和政策の実態

仲尾 大阪府が、ちょうど戦争が厳しくなる一九三〇年代頃、一九三七年に大阪府が出した通知があります。その時に大阪府は内戦融和政策十ヵ年計画というのを出しました。日本にはすでにその頃百数十万人の在日の方がおられました。在日の方と日本人を融和するということで非常に朝鮮人に厳しい残酷な政策が出されております。一つは迷信に基づき、しかも他人に迷惑を及ぼすこととき行事をしてはならない。まあこれは別にしましても、いわゆる先ほどおっしゃった白衣着用の禁止といふようなことを行つております。それから室内的便器を使ってはならない。

張 今珠 今のマンションなんかそんなことはありませんが、昔の韓国の家屋は日本と違つてお便所は遠いところにあるんですよ。夜中でも起きたりするから、年寄りの部屋には「んな便器があります。今でも田舎へ行つたらありますけど、都會ではもうあんまりない」と思います。

仲尾 絶対獎勵すべき事項として、国旗の設備と掲揚、つまり日の丸を掲げよということですね。それから内地服、日本の服装をしろ。それから國語、日本語を使用しろ、朝鮮語を話してはいけない。先ほどからおっしゃつてあるようなことが実はそれぞれの役人や警察官が私事的にやつていたのではなく

でこのように行行政の政策として出されているんですね。おそらく内務省の方針で全国的に命令してやらせたのだと思います。

それから表札を出せ、ごみ箱を置け、室内外を整頓せよ、物干しを出せ、種痘を受ける、密住はいけない、暑いときには蠅をとれ、とか言っていますが、これは実はこの頃の在日の方々の生活の条件、居住条件がたいへん厳しかったということの証明であります。つまりこういうことが十分できないような生活環境で仕事をし、生活をしておられたということだと思います。

張 今珠 旧暦廃止についてですが、韓国では今も旧暦が一応残つてゐるんです。韓国は何千年の間、文化として旧暦だったのですが、日本が同化させるために新暦にしたら何かバランスがあわないと。警察が強制的に管理し、日本と同じ新暦にしたためとても苦勞がありました。長い間、新暦でしたがが、今はまた旧暦で行事を行つています。今年の九月十五日が旧のチュソク（秋夕）のお盆でした。ソウルの人口が今一千五百万人くらいです。全国四千万人の中で、秋夕に一千万人が移動するんですよ。旧暦は絶対に墓参りに行くし、また親が健在な場合には親に会いに行きます。だから官公庁もその二日間は公休しております。

だから韓国では普通の業務とか役所の行事は新暦でも、家庭の行事はみんな旧暦で行つています。在日本同胞の中でも新暦でするところやら旧暦のところもあります。一世が生きている間は旧暦でしているところが多いですが、わが家は子どもの仕事にあわせて新暦でしました。それでも在日社会には古い習慣が依然として残つています。

仲尾 それから逐次奨励すべき事項として、先ほどの日の丸と同じように国歌斎唱「君が代」を歌えと言ふんですね。君が代、日の丸は日本人にすればなんともないという思いの人が多いとも思いますが、このように在日の方々、あるいは外国の人々にとつては、日の丸、君が代がどういう意味あいで見られ

るのか、あるいはどういう思いで、日の丸、君が代の強制を受けてきたのか、という」とをもう一度私たちは振り返る必要があるのではないかと私は思います。それから矯風事業奉仕、つまり風俗を改めようということですが、例えば朝鮮式冠婚葬祭の禁止、それから生活改善に関する事項で獸肉の食用禁止という、こういうことも出てくるんですね。我々はキムチ、にんにくは普通に食べるようになりましたけど、このように内務省の方針に基づいて行政がこういった生活習慣まで干渉して民族文化を否定し同化する、融和するという政策が国を挙げてとられていました。これが現実なんですね。このことの重みを私たちには感じなければいけないのではないかと思います。

一九四五年八月十五日は日本の敗戦の日ですが、同時にそれは日本の植民地支配を受けていた人と在日本の人々にとっては解放の日であつたわけです。その八月十五日のことを覚えていらっしゃつたら、一言どうぞ。

世界に例をみない同化政策

張 今珠 あの時には、私も日本が負けるとはせんせん思つていませんでした。みんな貴金属なんかを供出させられました。冠婚葬祭も色々規制されました。現在もマスクヨミは韓国人の間はいつも日本に反日感情をもつてているとか、しつこいなどと書きますが、そんなことが全てではないと思います。他の国が侵略したりしても日本のよくな同化政策は世界でも例をみないそうです。今まで申しましたように、もちろん表札も日本名で通名を書けという」とでした。たとえば「金」だつたら「金本」にして書けとか徹底していました。

私たちなんかも五十四年間も日本に住んで永住権もありますが、一応韓国へ行く度に再入国許可が必要となります。私達婦人会民団が運動して、有効期間が一年になり、そして四年になりました。これはや

つぱり私たちが運動したおかげです。

日本で戦争中に旧正月の一日の朝、法事をしている最中に警官が十足で上がってきて法事のお膳をひっくり返すのを見ました。閉鎖的というよりやり方があまりにも厳しかったのです。悪く言うたら日本は島国やから心が狭いのか私は思いました。でもその一方で國が狭くて国民も多いから他国民はなにかにつけて邪魔やと思って、こんな政策をして、私らにながなが參政権もくれないと違うか、と私はいじょうに解釈しています。マスコミはよく他国はそういうじゃないのに韓国だけは、特に若い人がいつもでも反日感情をもっているといいますが、当時の政策そのものが余りにも強硬的で、韓国という五百何十年という昔からの朝鮮というものを行っているから、だから終戦後教育を受けた若い人にとつては、他の國はちょっと違うのだといふことを理解してください。

夜間中学で文字を習う

仲尾 最近の京都新聞に夜間中学、都文中学校で学んでいる方々の記事がありました。」」」では十六歳から七十七歳まで、平均年令五十九歳。そして八十五%が在日の方々でほとんどがオモニですね。一九三〇年代にやつてこられた方々は、ほとんど学校に行かないままに厳しい生活に追われておられたため日本の文字が全然読めない。ところが銀行に行くにしても、地下鉄に乗るにしても、駅員も銀行員さんもいらないという所では、どうしても字が読めなくてはいけない。そういうことで識字が大事な問題になつているのが現実なのです。

つまり教育の機会が事実上奪われていたわけです。それで「」」一部学級で勉強されています。そしてみんなでろうけつ染めのチョコリの大作を完成されたといふことです。私も一度見学したことがありますが大変感動いたしました。」」うこうことが今、京都市内でも一つの現実としてある」とも合わせて知

つておいでいただきたいと思ひます。

第三回 一端

仲尾 某質問をいただきました。中には「うつこつものをも」とP.T.Aの会合や子供たちに対してもうございという声がありました。いい企画だとお誉めをいただきました。ありがとうございました。

三人の方々への某質問を見ていたときまして、某指名のものについて、某意見をまとめる形でそれぞれお話をいただきたいと思います。その前に一つ私あてに、「複合民族」という言葉を使つたが、どういうことか」という某質問があるので、ちょっとそれは私の舌足らずだったと思うのです。私は崔先生の「家庭が、二つの民族の文化を持つた」家庭だという意味で使つたので、理解いただきたいと思います。

まず張今珠先生の某質問です。「日本のやくざ社会に韓国・朝鮮人の方が散見され、彼らに対する教育なり対策なりは現実にどうしておられるのか。就職の問題、やくざ社会からの脱却の問題、家庭の問題、そういうことについてどう考えておられるのか」という某質問です。これは在日として五十年生きてこられた張今珠先生にお答えいただきたいと思います。「儒教の精神のなかで男女不平等のところは変えていかねばならないのではないか」というか。それから「一世、二世、三世の民族離れば一世の責任でもあるのではないでしょうか」。これは在日三世の方からの質問です。そのあたりの所を中心に、張今珠先生にお答えいただきたいと思います。

心配な二・三世の民族離れ

張 今珠 十分な説明ができないかもしれませんのが理解して下さい。第一番に儒教の精神で親を大切にするという話をしましたが、私の言い方が下手なのでちょっと理解しにくかったと思います。もちろん昔から韓国の女性は強いです。平等どころか韓国も日本も在日同胞も女性が強いです。決してじょせいいが男性より不公平な扱いを受けるということはありません。女性が強いのかえって困っているような状態です。

一世、二世の民族離れば、私達は一番心配しています。同化政策のおかげで私達も孫に対してもつい日本語を使ってしまうんです。本国の空港の税関で「イゴンムオシムニカ」（これは何ですか？）と聞かれても、私たちの子どものハングルは流暢ではありません。私の子どもは皆、民族学校にやりましたが日常生活は全て日本語で行われるため、聞くのは聞けても、普段ハングルを使う機会が少ないのが現実です。本国で「ハンクサラミハングルモラヨ」（韓国人が韓国語知らないの？）と言われた経験を十人が十人もっています。そんな時、恥ずかしいという以前に悲しいです。

もちろん誰も好んで日本にも来ていないだろうし、まして長い歴史の中の同化時代があつたから、うなつたのであり、日本人社会で生きていくからうなつたのにもうちょっと理解してくれんかと。オリコンピックの時にも、婦人会としても公衆トイレを各地の観光地にどれだけ設置したか。世界のどこにいる在外韓国人より在日韓国人の方が愛国心も強いと言つて私は反発しました。先に申しましたように、結婚問題と一世、二世、三世の組織離れや民族精神離れはどうする」ともできません。これはアメリカにいる日本人の方にもそういうことを聞きました。自分の生活に必要だつたら毎日、韓国語をしゃべるでしょう、字も読むでしょう。今は勉強させても日常生活に必要ないし、使う機会がないんですよ。だからその点を分かつてもらえたならありがたいと思います。

次は人権擁護の問題です。これはもちろん本国政府もバックアップしてくれていますし、私たちが指紋拒否の問題で国連本部へ行つて私を含めた婦人会の中央幹部三人がテレビに出て訴えました。米国居住の同胞には「何で本国政府がせないかん」とあんたらがやるのか」と言われたけど「これは私たちのことや」と言いました。もちろん母国が立派にあるからバックアップもしてくれる。でも実際はやっぱり私たちのことやから私たちが運動したのです。だいぶ緩和されたのもそれらの運動の結果です。

国籍条項の壁

それと今、先生がおっしゃいましたやくざの問題、これはどこの世界にも悪い人といい人がいます。在日韓国人の子どもがやくざになるのも日本人との人数から比較したらやっぱり少ないです。これは何かあった時にはテレビでも韓国人の場合は絶対本名を出すから、李という名前だったら私たちも同胞の子弟かなと胸を痛めています。私は日本政府を恨んだり批判したりするのではありません。閉鎖的な政策からきていることだと思います。子どもたちも学校へ行つていっぱいいじめに遭いました。朝鮮人といふことで辛い目にあつてることも多いのです。

皆さんも「存じのように、どこに就職する場合も国籍条項には「日本国籍を有する者」と絶対入つていいます。だからどれだけ優秀でもいい就職ができませんでした。それでも親に財産があると、その子が継いでお金持ちで、立派な地位の人もおります。でも、普通は親も金がなく、銀行へ行つても金を貰してくれないので、「稀に指摘されるような人がいると思います。私の周囲には一人もおりません。人間悪い人、ええ人は世界どこの国でもおると思います。

現在まで在日同胞が日本の社会で就職ができるなかつたのも事実でした。この頃新聞にも学校と法曹会に就職したことが載っていますが、本当に微々たるものです。わざきの李朝時代の話のようだ韓国の

民族は文官の流れやからものす」と勉強熱心です。でも就職を含めていろんな面でハンディがあつたのは事実ですから、せめて京都が先頭に立つてこれから国籍条項をなくすようにお願いします。

仲尾 今、話されたように、京都府も京都市も公務員の一般事務職には国籍条項があります。小さな市町村ほどのないんですね、そういう点では国籍条項を都道府県や政令指定都市が撤廃するといふことが非常に大きな課題ではないかと思います。それから一般事務職じゃない、現業職、看護婦さん、保母さん、養護教員に応募される在日の方がまだ非常に少ないというのも事実なんです。

それは今おっしゃいましたような非常に小さい頃からの教育環境 それから差別のありかたなどにかかわっているからだと思いますが、近い将来に市役所へ行つても数百人の在日の方が役人として働いていらっしゃようやかな役所になることを私も期待したいと思います。一万人の中に五百人くらいいても人口比から言えば当たり前なんですね。また、そういうふうに日本社会をえていかなければならないのではないかと私も思います。

閉鎖的な京都

張 今珠 「加害者と被害者の立場からみた在日の問題」という質問がありますけど、日本人の人とも個人同士ではとても仲いいし、差別にも個人差があります。ただ一つ不思議なのは、五十四年間住んでいて、とてもしつかりしていくても町会長はなかなかおせてしまえません、特に京都は閉鎖的です。私も副会長や相談役はさせてもらいました。個人的には何の心配もありませんが、やっぱり商売上とか団体とか行政になつたらまだ差別が残っています。

」の間、教育問題のシンポジウムで「今でもアリランを歌つたら、『朝鮮人は朝鮮へ行つてアリラン歌え』と言われた」という話しがありました。差別については町内の違いも個人差もありますので一概に

はいえませんが、韓国人も個人ではみんな立派にやっています。ただ、行政問題、参政権問題の壁は大きいのも事実です。これからも絶対がんばります。よろしくお願ひします。

仲尾 ありがとうございました。

では、李京叡さんに移ります。「日本のことを前向きに受け止められるようになったのは具体的にどういうことか」という質問。それから「子どもの頃日本文化が嫌いだつたのはなぜか」ということ。それから天皇問題について「天皇というものを日本文化と考えまして、そういう中で日本の文化というものをどのように考えて」「られたのか」ということをちょっと具体的な例を挙げてお話をいただきたいと思います。

朝鮮人としての自分自身を受け入れる

李 京叡 日本の文化というよりは日本の社会が嫌でした。日本の社会を構成している日本人の気質も嫌だと思いました。一番大きな理由はやっぱり排他性にあつたと思うんです。子ども心にも日本人に対するイメージは率直な人達ではない、しかも異質なものを受け入れない頑固さをもつてているというものでした。でもそれは差別という体験から生まれた感情でした。

子どもの頃に私は自分が朝鮮人であるというのが嫌だったので「私は朝鮮人でなくなりうる」と思っていたわけですが、その時でさえ日本人に帰化するのは嫌だと思いました。日本以外のどこの国へ行ってそれ以外の国の人になりたいと漠然と思っていた時代がありました。日本のこと前向きに受け止められるのはやはり朝鮮人である自分自身を受け入れられるようになつてからです。

文化の問題もそうですが、実際に生活権の問題で差別はありました。例えば二十四年間にわたって韓国学園に対する地域住民の建設反対運動という、目の前に立ちはだかる大きな壁もありました。しかし

同時に学校建設推進の側で共に闘つてくれる心ある多くの日本人の存在を知り、彼らの支えと連帯を体験しました。人間として平等に生きていくのはどういうことかということを学んだこともたくさんありました。その人達を通してどんどん私の日本人に対するイメージが変わつていったように思います。

本当に人間として平等に生きてゆくはどういうことかを日本人を通して学んだこともたくさんありました。先ほど日本人は閉鎖的と申しましたが、見方を変えると慎重で地道と言えるのかもしません。韓国人がすぐに直情的に結論を出すのに対して日本人は努力の積み重ねの中から答えを導きだすという地道さをもつた民族です。

今は心から日本人に対する尊敬の念を持つようになりました。こういう見方ができるようになったのも、自分の主体性を積み上げていく中で偏見を持たずにまっすぐに物が見られるようになつたからだと思います。以前は日本が嫌いだったというのはやはり自分の中に屈折した部分があると、ものが正しく見えなくなつてしまつという意味で申し上げたのです。

仲尾 ありがとうございました。

それでは三番目に崔澄子先生にご質問です。先ほどの「自身の体験のお話があつたんですが、質問された方は純粹な日本人家庭の方で、「息子が韓国の『高麗大学』に留学し卒業後、韓国人の女性と婚約して日本に帰つてきました。崔さんとは全く逆のケースなんんですけど、そういう」とについていかがでしょうか」という質問。それから「これは個人的な」とて大変わざえにくいかと思います。大まかで結構ですが「崔澄子先生の結婚については問題はありませんでしたか。あるいはなぜ、崔という姓を名乗らうと思われたのか」という質問がございます。おさしつかえのない範囲でお答え下さい。

結婚には猛烈反対

崔 澄子　あまり時間もございませんので、簡単にお答えさせていただきたいと思います。今は日本人と韓国人が結婚するケースは非常に多いんですが、私の結婚しました当時はほとんどありませんでした。もちろん猛烈に反対を受けました。父親は高校の教師をしていましたが自分の学校の生徒に対しては非常にいい教師で、いい調子で、人物さえしっかりしていれば別に国籍はいとわない、とか何とか言って、いつも学生の相談相手になって非常にいい教師だったんです。こと私に関してはもう頭から「だめだ」の一言でした。何回も話し合いましたで「なんであかんのか」と聞いてみましたら、父が酔っぱらった時に吐きましした言葉が「韓国人は非常に乱暴で、性格が激しい。賭事が好きで自分の生活をあまり顧みない。いくつかの家庭を見たが離婚していくたケースが非常に多い。自分の娘が不幸になるのはたまらない」という非常に日本人の代表的な意見のようでした。

私はその話を聞いて少し当たっている所もあるんですけど、（笑）つれあいはマージャンも好きですし、自分のこれからやらなければならない」とも放つたらかして遊び回るというようなところもあります。日本人と結婚したことでの自分の民族の主体性をうんぬんといわれることが嫌なのか、特に九条の地域問題、それから本国の民主化の問題には必要以上に時間と労力をかけているようです。それはまた逆にいい面ではあるのかも知れません。そのような関係の中で父を説得しましたが結局ダメで、結婚式には親は同席しないという形で結婚しました。長男が生まれまして里に行き来するようになり、以後はいい関係に戻れました。それは私たちの生活そのものを見てくっているということがあると思います。

自分の生き方を自分で選択

最近、長男が結婚しまして可愛い在日同胞のお嫁さんをもらいました。さつきの質問をいただいた

方と全く反対のケースなんですが、とっても可愛らしい私の教え子で、韓国学園の卒業生なんですが、その時に坊主が「オモニ、結婚式には韓国の伝統衣装を着たい」と言いましたら夫は自分のことのようになります。お嫁さんが可愛いチヨゴリ姿で家にいますと、まあ自分のことのようになんで「あんたのお嫁さんとちがうで」というくらいに喜びまして、恥ずかしかったんですが、私も喜んで韓国までチマチョブリを買いに行きました。

まあそういうことを見ましても、子どもたちは自分達の生き方を自分達の中できやんと選択していくているようです。小さい時もさうでしたが、私の方の里に行きましたらおじいちゃん、おばあちゃんには「おめでとうございます」と言いますし、私の嫁ぎ先へ行きますと「セーヘー、アンニョンハシムニカ」と、ちゃんと韓国語で挨拶ができるという、非常に上手に使い分けをしていたようです。子どもたちはただ何となく育ち、生きているのではなく、自分の生きていぐ目的をきっちりと把握でき、問題意識には敏感に育つのではないかというふうに感じました。

私がなぜ崔という名前を名乗ったかということにつきましてですが、最近、韓国学園では日本語の授業時間や日本語の教師は多くなっていますが、私が勤めだした当時は日本の教師はほとんどおりませんでした。私は二重国籍をとつて、あまり問題意識もないままに崔になりましたが、最近では「民族教育の基本は、本名を名乗る」とや」と言えば、今度は私自身の姿勢を問われるという、逆の立場になつてきましたが、そのような形で現在に至つております。

人間としてどうつきあうか

仲尾 ありがとうございました。それ以外にも「意見」という形で質問ではないのですが、私なりに大事な問題で触れておきたいことがありますので、答えを含めてまとめて教えていただきたいと思い

ます。

一つは先ほど、張先生が答えられました」とと重なりますが「加害者と被害者、差別と抑圧」というとでのみ語るのではなくて、人間存在の問題として考えるべきではないか」という意見があります。それからある意味では重なると思うんですが「日本と韓国・朝鮮との友好親善は結局の所、個人と個人の友好を大切にすることだと思います」という意見があります。

私はこのご意見は、ある一面では非常に正しいと思います。私たちがいくら在日の方々、あるいは韓国・朝鮮の方々と仲よくすると言つても、抽象的な目に見えない形でつきあうのではなくて、やはり具体的にそれこそ血もあり涙もあり生きている人間としてお付き合いをしていくという関係にあります。これは、韓国・朝鮮の方だけではなくて、他の全ての異民族の方々との付き合いでもそうですが、そういう点では個人的な、あるいは人間としてのお付き合いをしていくことやふれあいの機会が増える」とが非常に大切だと思います。

二十世紀の後半の一九九〇年代の日本の社会という一つの現実の中で日本人も生き、在日韓国・朝鮮人も生き、他の外国籍の方々も生きているわけです。そういう今の日本社会の現実と、それから日本の社会が今まで古い昔のことは別にしましても、近代以降百二十年の間に、韓国・朝鮮人の方々とどういう関わりを持ってきたのか、日本人社会がどういうふうに関わってきたのか、そういう歴史性と社会性は忘れてはならない視点だと思うんですね。

そういう中で、一人一人の人間と在日の方々とのお付き合いの関係をどこから始めるべきかということを、歴史は私達に問うてはいるのではないかと思います。そういう意味で個人としてのお付き合い、あるいは在日の方々と日本人の方々とがもつとお互いの文化の独自性、素晴らしいことをお互いに認識しあえるような場をつくることと同時に、やはり日本の社会、日本の歴史というものを正確

に知り、もちろんそれは同時に韓国・朝鮮の歴史をも「と私達が知る」とありますけれども、その認識の共通性を広めていく」ともまた大事な」とではないかと思います。

そういう意味ではこの協会が今年企画していただいたフォーラムは素晴らしい企画だと私は思って、今回この役をお引き受けしたのですが、このような機会を通じて具体的なお付き合い、それから社会と歴史への認識がお互いに深まる」とを益々期待したいと思います。

……第三回 「教育（在日の心を育てる）」……

パネラー 松下佳弘氏（学校教員）

皇甫任氏（在日一世・運輸会社勤務）

金必善氏（在日二世・民族学級講師）

仲尾宏氏（京都芸術短期大学教授）

コーディネーター

（一九九二年十二月十日実施）

第三回 「教育へ在日の心を育てるへ」

第一 部

仲尾 最初に簡単に一人ずつ自己紹介をしていただきます。まず皇甫任さんお願ひいたします。

皇甫 任 ご紹介いただきました皇甫任です。

仲尾 それではその次、金必善さん、よろしくお願ひします。

金 必 善 養正小学校民族学級講師の金必善です、在日一世です。

松下 京都市南区の九条塔南小学校で教員をしております松下佳弘です。

仲尾 今、それぞれ自己紹介がありましたように、今日、お話していただく方は、それぞれ立場が異なります。皇甫任さんには一世の立場から、自身のどういった教育経験がおりになつたか、あるいは子どもさん、お孫さんの教育についてどう思ひ、どういった経験があつたかなどを主にお話していただきます。

一番目にお話していただきます金必善さんは、いわゆる民族学校と言われております学校の出身で、京都市の養正小学校で民族教育を担当しておられます。今、在日の子どもたちの教育というものは民族学校へ行っておられます子どもさんや、日本の学校で勉強されている方がいます。

二番目は、日本人として在日の子どもを教えておられる松下先生に、日本人の教師の立場からお話しいただくことになります。色々な側面から在日の方々の子どもさんの教育の側面に触れていただけののではないかと思います。

あと、皇甫任さんから「体験じむといおがしたお話をお聞きしたいと思ひます。実は、皇甫任さんは、

昨年、「十一月の鳳仙花」という在日オモニの手記を出版されまして、今日はその中のエッセンス、特に教育についての問題をお話しいただこうかと思います。

皇甫任さんにおうかがいしたいのは、皇甫任さんが、なぜ郁文の夜間学校へ行かれたのか。郁文の夜間中学校について一言申し上げますと、京都市の郁文中学校は下京区の四条大宮にあります。正式には二部学級があり、そこには数十名の方が学んでおられます。大部分の方は在日韓国朝鮮人のお母さん方、オモニの皆様です。皇甫さんが二部学級に行かれるようになつたきっかけ、それからどんな勉強をなさつたか、どんなことが大変難しかつたか、思いつくまで結構ですか少しお話いただけますですか。

読み書きで泣かされる

皇甫 任 私はこれまでの自分の生活の中では別に差別を受けた記憶はないんですけど、読み書きでは大分泣かされました。勉強しようという気を一番起こしたのは、市役所へ一人で行った時、書けないので役所の人に頼むと、「書けない者が、何しにきたか」と言って、あの顔はいまだに忘れられません。それこそ穴があつたら入りたいくらい悔しい思いをしました。それと、子どもたちが風邪をひいて医者へ連れて行つた時も、私は保険証がなかつたので、いちいち名前と住所を書かかんならんのに、自分で書けないのでお願いすると「夏山一雄はどんな字ですか」と言われても、どんな字と説明したらよいのか分からず悔しい思いをしました。

そしてまあ何とか生きている間に学校というものをのぞいてみたいなと思いまして、五人の子どもを育てあげ、五十六になりましてようやくちょっと暇もできたので学校へ行く決心をしたんです。小学校も行つたことないし、ひらがなも書いたこともない者が中学校へ行つてもどうなるかとも思いましたが、

学校の門の前までいつて入ろうかどうしようかとも思いましたが、よつやく学校へ行って面接が終わって帰つてきてむすゞと心配で「ほんとに行けるのやうか、行つても若い人についていけるのやうか」と眼れない夜が続きました。

それでもやつぱり諦められないと思子に言つたら、「お母さん、今まで自分のしたい事した」とないんだから、僕たちの心配せんでもいいんだから行つて下さい」と思子に言われて決心しました。行つて一年間は何が何だか分からなくて、また家庭の方では主人が入退院を繰り返していたので世話をせんないかんし、勉強する時間が全然なくてやめとかと思つたこともありました。それでも思子は、「やめないでがんばって」と何度も言ってくれたし、家で勉強も教えてくれたりしたので、二年目、三年目にになるとようやく聞き取れるようになつてひらがなを間違いながらも書くようになった時にもう卒業でした。よつやく分かりかけた時に卒業して」のままだつたら先生が一生懸命教えてくださったのにみんな忘れてしまふし」と思つたときにオモニ学級がある」とを聞きました。

優しいお母ニ学級

オモニ学級では本当に優しい先生やらに支えられて、何とか自分の思つた」とを少しあつ書くようになりました。そして自分の孫や娘のために、まあ、いつか見てくれる時があるやうつと思って自分の体験を書いたんですね。私は文字も間違うし、発音通り書くから句読点も間違つてしまふから、先生に見てもらつて、先生方が一生懸命努力してくれて本ができるのです。恥ずかしい」とです、人様に見てもらつてしまつて書いたのではなく、ありのまま書いたので本当に恥ずかしくて、家庭の悪口並べたみたいで辛かつたんですけど世間のみなさんに理解していただいてありがとうございます。

仲尾 今、一番辛かつたこと、つまり役所で字が分からずに、担当の方に非常にけげんな顔をされ、

それが悔しいということがバネになつたというお話をですが、勉強されて逆に一番嬉しく思われたのはどんなこととぞしようか。

皇甫 任 一番嬉しかったのはね、道を歩いて今まで全然気がつかなかつたことが読めるようになつた時本当に嬉しく思いました。学校帰りに仲間同士で、「ああ、これはこういうことか。通つてはいけない禁止のこども、今まで知らずに通つていたんやな」と、それが一番嬉しかつたです。

仲尾 ありがとうございました。

それでは引き続き、今度は子どもたちの教育についてお聞きしたいんですが。

皇甫 任 長男と長女は、青森県に住んでましたので、長男はそこで高校を卒業したんです。長女はちょうど高校に上がる間際に京都に帰つてきました。主人の病氣がきつくて、京都へ帰つたらいい医者でもあるかと思って、急に家をただ同然で売つて帰つて来たんです。長女は高校へもやらず、帰つて来てすぐどうしようもないから就職して、きつい仕事をさせたのをいまだにかわいそうに思つています。そして、次女と次男と三男をこつちの民族学校に入れましたんです。

その時は、みんな帰国するつもりで、何とか言葉を覚えて帰らんならんという噂でいっぱいでした。それで民族学校へやつていていたんですが、これだけ漢字で苦労してるのに、子どもたちにも同じ苦労をさせたくないと思いまして、日本の学校に入れたり、民族学校から引っ張られたり、本当にどつちにもつかない子どもに育ちまして、まあおかげさまで、子どもたちが五人とも眞面目で人様に迷惑をかけずにみんな自分の家を持つて家族を守つてるので何より親孝行やと思っています。

仲尾 子どもさん方が学校出られた後の就職はそれぞれどのようになさいましたでしょうか。

就職差別に直面

皇甫 任 長男の時は、お父さんがいつも無職なので学校に書類を出す時に辛い思いをしましたので息子だけでもちゃんととした所へ就職させたいと思いました、本当に必死で高校へやつたんですよ。それで、卒業して町工場へ就職が決まって、四月に履歴書を持っていたら手のひらがえしたように「うちでは朝鮮人は使つていらない」とあっさり断わられました。

息子の親友が近所におりましたが、その子の両親は韓国で生まれた引き上げ者でした。この子は日本で生まれて日本の学校を出たんですけど、一人一緒に同じとこを受験し、友達は採用されて息子は断わられた時には息子は「田の前が真っ暗だ」と言って帰ってきて「僕どうしたらいいんだ」と泣いていました。その時はとても辛い思いをしたんですが、捨てる神あれば拾う神があるといいますから、三沢飛行場へ就職できまして、本当に町工場よりも収入も良かっただしあの子も晴れ晴れして通っていましたので京都へ帰つて来る時に「あんた好きにお」、「」にいてもいいし、私がお父さん連れて京都へ行って、またいい医者に診てもらつてようなるようにするから」と息子を置いて帰つてきましたよ。

やむをえず自営業へ

京都へ帰つてきて一ヵ月ほどすると息子も京都へ帰つて来まして「まだ学校へ行つている弟や妹と病人のお父さん抱えてどないするかと思つた。いても立てもいられなかつたから帰つて來た」と言いました、叔父さんのダンプに乗りました。いまだにダンプに乗つてます。そして次男と次女と三男は民族学校へ行つたんだけど、民族学校出身ではもう就職はできませんからもう最初から就職は諦めて次男は重機の免許をとりました。十八才で免許を取つて、段々と大型免許を取つて、頑張つて仕事して、結婚して家も買いました。そして今は「ローンも終わつたし、今度は楽な仕事するわ。お母さん心配せんでも

いいよ」と言つて、今は電気の仕事をしています。三男は、知つてゐる友達の所で使ってもらつて、鉄骨の仕事でした。いまだにそれを続けています。

仲尾 三男の方も民族学校ご出身ですか。

皇甫 任 そうです。

仲尾 お孫さん方はいかがでしよう。

皇甫 任 長男の孫は女三人と男一人、民族学校に行っています。一人は知り合いのところに勤めています。長女と次女は、教師と紀陽銀行へ勤めています。次男のといふの子どもはまだ小さいし、娘のといふはみんな日本の学校へ通っています。

仲尾 お孫さんでも民族学校へ行かれた方、日本の学校へ行かれた方、それはおそらく両親のお気持ちなりで、そうなつたんですけれど、皇任甫さんとしては先ほどお孫さん達が中途半端になつたと申し上げられましたけど、在日の方として、これから一、三世の方々が生きていかれる時に、どの様に、どういうふうにして教育を受けさせたいか、どういうふうに子どもたちにどんな学校で勉強させたいと思つてらつしゃいますでしようか。

皇甫 任 そうですね、もう孫までも思つようないかないと思いますので、みんな本人に任せあります。

仲尾 おばあさんとしてお孫さんを見ておられて、例えば日本学校へ行つたお孫さんは、恐らく朝鮮語を話せないことになつてしまつんじゃないとか、あるいは習慣の問題で忘れてしまうのではないかと、そんなことの思いなど、もしありましたら。

民族教育か日本の教育か

皇甫 任 そうですね、やっぱり民族学校を出た者は、おばあちゃんとは呼ばないでハルモニ、と言ひうて帰つてきます。日本の学校を出たものは、おばあちゃん、て言ひて来るんです。それでちょっと寂しい思いもしますけど、この日本で生きて行くのには自分たちが良い方にいたほうが、就職も「れから頑張つたらであるがも分からぬし、そういう望みで仕方ないなと思つています。

仲尾 そつしますと、できたら民族学校へ行かせたいけれども仕方のない面が強くなつてきていると、そつじづく」とですか。

皇甫 任 そうですね。日本の学校と違つて民族学校いうたら本当に働く範囲がもつと狭いんです。日本の学校を卒業したら自分の実力で、運が良かつたらいいことに就職である子もいますので、まあそういうことです」で良いかなと。

仲尾 ありがとうございます。皇甫さんには、皆様方からの質問等を受けてお話をいたぐり」としたいと思います。今のお話からも民族教育は大変難しい局面に立たされて居ることの一端をうかがつたと思います。そういうお話を受けて、金必善さんから「体験」といふことを語つていただきたいと思います。

民族の自覚を育てる

金 必善 今日は民族学級の設置についての経過はお話ししませんので、「」と承をお願いいたします。

一九四五年の八月十五日わが国は解放を迎えました。それと同時に、自分の國を奪われ日本にいる私たち在日が自分の國の言葉を、文字を取り戻すとあちらこちらでクゴ、朝鮮語で言ひますと國語のこととをクゴと言ひます。朝鮮語の講習会や教室を開いたりして、自分達の國の言葉を取り戻すとする運

動が高まりました。

民族学級の設置は一九四九年の朝鮮人学校の閉鎖に由来します。そういう同胞達の氣運の高まりの中、一九四九年十月十九日に強制的朝鮮人学校閉鎖令といつもの日本政府が出ました。市当局が民族学級を作るのに積極的に協力したのではなく、愛国的な同胞達の熱心な要求運動の高まりによって勝ち得た取得権なのです。

全国の朝鮮学校としては、初級学校が八十三校、中級部が五十六校、高級部が十二校、大学が一つ設置されています。一方、京都には三つの民族学級があります。私が勤めている左京区の養正小学校、南区の陶化小学校、山王小学校、この三つが設置されています。

民族学級の目的は、日本の学校で学んでいるけれども、自分たちの祖国を知ることによって朝鮮民族の一員としてのしつかりした民族的自覚をもち、自分の国の未来に責任を持つような子どもを育てる」と」とであると同時に、他の民族を認める」とも田的にしています。対象は三年から六年ですが、あくまでも希望制です。一学年、週に一時間行います。学年別に行いますので授業時間は三校時あるいは四校時、この時は現学級では授業は行われています。その現学級の授業を抜けて民族学級に勉強に来ます。

民族学級では、母国語を中心に授業をしています。子どもたちも一日も早く朝鮮民族の一員になるために民族学級で自分との葛藤をしていきます。民族学級に来ている子どもたちは、日本の学校で日本人向けの教育を受けているのでおのずと日本人的思考になじんだ、半ば日本人化されたところがあります。私は「同化される」と言います。例えば、子どもたちに母国語、クゴを教えるのですが、黒板に「国語」と書くんです。「国語」とは何であるかと子どもたちは、その漢字を見て「国の言葉」と言います。「そしたら、あなた達の国の言葉は何ですか」と質問すれば漢字の書き取り、作文、物語りを読む」と、必ず言います。国語とは「国の言葉」だということまで

までは答えるんです。

子どもには日本語が自分たちの国の言葉だというのが概念化されています。だから、国の言葉が「朝鮮語だ」って即座に答える子はありません。説明をしていきますと「ああ、そうか、自らの国語は自分」との国の言葉、朝鮮語なんだ」って、子どもたちはそこで初めて気がつくんです。

日本人的思考からの脱却

私達が考えれば何氣ないことなんですけれども、先ほども言いました「日本人的思考方式」になつてゐるのですね。子どもたちの頭の中には日本語文化が占めていて、発想はおのずと日本語文化の日本人的発想から出発するということなんですね。思考方式がそうなるから朝鮮人としての立場で考えられない、日本人としての立場から出発なんですね。だから子どもたちが民族学級に来た時に「あなたは何人であるか」、そのことからを教えなくてはならないのです。

もちろん家庭で、日本人じゃないことを言われている子もたくさんいます。だから何氣なく分かつているんですけど質問をしていきますと、出発点は自分は何人なのかというところからなのです、そこから始まりなんです。高学年になればなるほど民族心が薄れてくるんです。おかしいとお思いでしょう、民族学級で三年から勉強しているからもっと民族心がつくはずじゃないかという疑問が生まれると思うんですね。ところが民族学級では週に二時間教えています。自分たちが何人であるかはそこから出発しているんですけどなぜ民族心が高学年になればなるほど薄れていくのか、それは日本の教育もそれだけたくさん受けるからなのです。比例してみたら同じじゃないかとお思いになると思いますけども、そういうじゃないんですね。現実は教育を受ければ受けるほど薄らいでくるというのが、現実問題として子どもたちの実態の中には出てくるんです。私自身もどうしてなのかという」とを常々考えています。

なぜ本名を使うのか

子どもたちは、民族学級に来たと「からが出発なんですね。例えば、本名を使っている子、通名を使っている子がいます。子どもたちはなぜ本名を使わなければならないのかを分かつてないのです。なぜ通名を使っているのか、名前と言うのは一つです。一つであるのにも関わらず、この子達は通名を当たり前のようと思っています。本名を使っている子も中にはいるんですが「なぜ本名を使っているのか」と言うと、「小さな時から親がそうやって呼んでいるから」っていう感覺なんですね。日本の子どもたちを見ますと「あの子らは民族学級に行くから、日本人じゃない」とは思っているんですけど、彼らがまだ教室に帰つてみると、日本人じゃないけども日本人であるというような感覺でいます。

皮膚の色が違つたり、毛の色が違つたり、目の色が違つたりすれば外国人として認める傾向です。だから朝鮮人を外国人として認めないんですね。外見上違うというだけの判断です。私は在日ですから日本で生まれ育ち、育つた環境も日本ですので似てくるのは当たり前なんですね。外見上が一緒だったり一緒にないか、そういう感覚で捉えられている朝鮮の子ども、捉えている日本の子どもがたくさんいます。

子どもたちだけじゃなくて日本の先生方もそうなんです。本当に私達を外国人として認めてるのが、民族学級に来ている子どももそうです。民族学級の中では自分たちは朝鮮人であるから学ばなければならぬという立場になります。しかし一步教室から外に出ますと一緒なんですね。

私も日本のクラスの授業を見に行くんんですけども、彼らは完全に日本人としての立場で受けています。だから日本の学校で日本の教育を受けている子どもたちに、民族の自覚と誇りを持たせるには民族学級では限界があるのです。

時間的な限界だけの問題じゃなく、毎日一時間あつたとしても解決できる問題じゃないんです。先ほ

ども言ひましたけど、「あなたは何びとであるか、何人であるか」という所から出発しなければならないのです。時間的な問題じやないと思つんのです。でも現に朝鮮の学校で学んでる子どもたちより、日本の学校で学んでる子どもたちの数が多いんです。そういう点から見まわし民族学級を無視する」といふであがせん。

民族心を田覧ます

でも、民族学級では一〇〇%解決でもないのです。あくまでも民族学級は子どもたちの民族心を田覧ますあっかけの場なんです。朝鮮の学校へ行つて、いる子どもは朝鮮語文化が頭を占めています。だから発想もそりから出発できるのです。「あなた達は何人であるか」ということを別にやらなくていいのです。例えば、授業で動物の鳴き声を朝鮮語で教えますね、子どもたちはいくら考えても、豚はブーブーとか鳴かない、朝鮮語ではクルクルです、考えられないんですよ。だから子どもたちは言つうんです、「朝鮮語つておかしい、いくら聞いても、ブーブーしか聞こえない」例えば朝鮮にいる豚を日本へ連れて来て鳴かせてみたら子どもたちにはフルフルで聞くこえますか? 反対にその子たちが朝鮮へ行つて、朝鮮の豚とか犬の鳴き声を聞いて、豚はフルフル、犬はモンモン、猫はヤウンと聞こえるとも思いですか。私自身考えました、やはり日本で生まれ育つて日本の文化に馴染み、そういう中で育つてあるからこそ私は民族的な自覚をもつと強く持たなければならぬのではないかなつて思つんです。

先月、京都市教育委員会主催の「民族の文化に触れるつどい」で朝鮮の第一初級学校、第二初中学校、第三初級学校、そして銀閣寺にある中高級学校の子どもたちが出演しました。民族学級の子どもたちも出演しました。また、民族学級の子どもたちは、朝鮮学校に行つて、いる子どもたちの公演を見てすく感動しました。「自分たちも本当の朝鮮人になるためには日本の学校ではだめだ。朝鮮の学校に行かな

かつたら自分達は本当の朝鮮人になれない」と言って、六年生の一人の子どもたちは来年から朝鮮の学校へ行くことを決心したのです。そのうちの一人は早速来年の四月から朝鮮の学校に行くように願書を出しました。

お互いに同じ朝鮮人でありながら、カルチャーショックというのですが、自主学校で習っている子どもたちの公演を見て、すぐ感動を覚えたという事もありました。週に一時間という制限が民族学級にはありますが、民族学級で少しでも民族の誇りを持つきっかけを与えると同時に他の民族を互いに認めて尊重できるような子どもに育てたいと思っています。

朝鮮人としての誇りをもつ

一世が日本に来られてから本当に言い表せない苦労をしました。私だって日本の学校に行ってたらそういう苦労だって分からないと私は思います。やはり民族教育を受けて、父母が歩んできた道や歴史などを勉強する過程で分かる」とだと思います。自分自身が日本に生まれ育つていう日本の環境ですけれども、だからこそ私達一世・二世・三世がもつともっと民族心を持ちながら一世の意志を受け継いで、日本で朝鮮人として誇りを持ち得なければならないのじゃないかと思っています。私は日本の学校へ入って日本の方と接觸しながらいろんなお話ししますけれども、本当の対等とはどうじうものだらうかといふことを、私自身常常々思う今日この頃でござります。

仲尾 ありがとうございました。民族学級の現状、それから限界と言いますか、そういうことと民族教育の大切さを教えていただきたいような気がいたします。それでは今度は日本人で在日の子どもたちを教えておられる松下先生からお話をうかがいます。

外国人としての在日韓国・朝鮮人

松下佳弘　日本の学校、日本の教員は、外国人として在日韓国・朝鮮人を認めているのか、という非常に厳しい指摘があつたんですけど、私は日本の学校の中でこうした在日の問題を何年か考えてきました。そんな中で私の考えていることをいくつか申し述べたいと思います。

現在、「存知のよう」にわが国には約七十万人の在日韓国・朝鮮人が住んでおります。京都市には三万七千人、京都市の人口が百四十五万人ほどだと思うんですけど、約一・六%が、在日韓国・朝鮮人だと聞いております。市内の公立の小中学校には、九一年の五月現在で、三千七百七十一人の在日韓国・朝鮮人児童が在籍しております。これも全児童生徒数の一・七%，つまり、百人に三人程は在日韓国・朝鮮人だということです。もちろん学校によつては一人もいない学校もありますし、先ほど名前の上がつていた、例えば南区の東九条の陶化小学校では、在籍の三分の一が在日韓国・朝鮮人であるという、そういう学校もござります。

本名使用は三%

先ほどの金先生の中にもあつたんですけど、在日の子どもたちのほとんどが、日本の学校に来ていいと言われています。正確な統計を私は知らないんですが、現在、子どもの八割以上が日本の学校に在学していると言われています。京都には先ほどの話にもありましたように、第一初級、第二初中級、第三初級、それに銀閣寺にあります中高級学校、それから東山区今熊野に韓国中高等学校があります。そこに行つてる子どもが一割から二割と聞いております。

日本の学校にいる在日の子どもたちの現状はどうかと言いますと、先ほど先生が言られたようにやっぱり日本人の教師が本当に彼らを外国人として認めて関わっているのかといった点を考えてみますと、

同じ仕事をしている者としましてはそういう意識は希薄ではないかと言わざるを得ないのが現状です。大多数の日本の学校に来ている子どもが日本式の名前、通名を持っています。例えば本名が、キム・チヨンへという子どもがいるとします。その子は例えば金山正恵とかそういう通名をもつてゐるのです。ある一九九〇年の調査によりますと、本名を使っている子どもの中で、日本の音読みで本名を呼ばれている子ども、例えば漢字はそのままなんですが日本音読みで呼ばれている、そういう子どもが六・八%。それから母国音読み、キム・チヨンへと呼ばれている子が二・八%、合わせても九・六%、つまり本名を使っている子どもが一割にも満たないのが現状です。ちなみに今から十四、五年前、一九七八年に初めて京都市全域で調査を行つたわけなんですが、その時には本名を使つてゐる子どもは、日本音読みと母国音読み合わせても一・七%しかなかつたのです。ここ十何年の間に少しあはれてきているのが現状です。私の小学校なんかでもそうなんですが、本名を使つておりますので、在日韓国・朝鮮人であるということをまわりの子どもたちが知らない場合がかなり多い。あるいは知られないようにしていることが多い。」このことが在日韓国・朝鮮人の子どもたちの日本の学校における状況を一番端的に表していると思います。

在日の八割が日本の学校で学ぶ

どうして八割を越える子どもたちが日本の学校に学んでいるかということを、よく簡単に歴史的な経過から見てみたいと思います。一九四五年の、いわゆる日本の敗戦、朝鮮が解放された当時、日本には二百四十万人の人人が住んでいたといわれています。ほとんどの人が帰国して祖国で暮らすことを望んでいました。そのために敗戦の八月、九月時点で言葉を習つための学校を作つたんです。「国語講習所」という名前で一年間に京都市内にも二十六ヶ所ほどできただと聞いています。そういう学校が、先ほど金

先生がおっしゃったようにいわゆる朝鮮人学校として、在日の方々の強い努力によつてできたわけです。例えば南区では四六年の四月に陶化小学校という日本の小学校の校舎の中を借りて朝鮮学校ができました。その他いくつかの在日の人の多住地域でそうした自主学校、朝鮮人学校が一、二年の間にたくさんできており、ある統計によりますと一九四八年、昭和二十二年、戦争が終わつてから三年ほどの間に約六万人くらいが就学していたのではないかと言われおり、当時の在日の子どもたちの半分くらいは、そうした民族学校に行つていたのではないかと考えられます。

先ほどのソンセムニ（先生）の話にもあつたんですけど、四八年から四九年にかけて日本の文部省なり当時のG.H.Q.がこうした民族学校を認めない、更には日本に残つてゐる在日朝鮮人については日本の学校への就学義務を理由に民族学校をつぶしたり、民族学校にいる子どもたちを無理やり日本の学校に連れてきたというよつなことがあり、たくさんのが在日の朝鮮人学校がつぶされています。例えば四九年には陶化小学校の中に初級学校があつたんですけど、それを当時の京都市教育委員会と武装警官と新聞には書いてあるのですけど、そういう人達が来て無理やり学校を閉鎖して日本の学校に編入させるとうございました。

もちろん中には在日の方が闘つて学校を守つていくケースも多々あるのですけど、そうしたあたりで半数以上を超えていた子どもたちがかなりの率で日本の学校に引き戻されたという現実があるのじやないかなと思っています。また地域によつては例えば先ほどの民族学級や東京なんかでは都立の朝鮮人学校を作つたり、兵庫県とか神奈川県では普通の日本の学校の分校として在日の子どもたちだけを入れる学校を作つたというように聞いております。

一九六五年の、いわゆる日韓条約で当時の韓国政府と日本政府との間で協定のよつなものができるました。日本の学校に来ている子どもたちは日本人と同様に扱う、そして先ほど言いましたような民族学級

のよくなきものを日本の学校ではすべきではない、あるいは朝鮮人だけを対象とする学校を作つたらいいけない」といふことで日本の学校では民族教育を認めないとほつきりとさせます。」という経過のなかで六五年以降二割程度が民族学校に、八割程度が日本の学校に来ているというパターンが続いているといふ」とを、こうした問題を考える上で頭においておかなければならぬのではないかと思います。

日本人教員の役割

そうした経過の中で多くの在日韓国・朝鮮人が日本の公立学校に学んだわけなんですけど、私達日本の学校の教員は在日の子どもたちに対し、あるいはそれを取り巻く子どもたちに対して一体何をしてきたのかを簡単にお話したいと思います。簡単に話をしますと、要するに何もしてこなかつたというのが正直な姿ではないかと思います。四八年に民族学校が閉鎖されいろんな激しい闘いがあつた頃なんですが、その頃は日本の教員の反対運動とかそういうこともほとんどなかつたよう聞いております。

また、初めて日本の教員達が民族教育の問題に觸れてくるのは、都立の朝鮮人学校が一九五五年頃に当時の東京都の教育委員会がその学校の廃止をだしたことに対する反対として、当時、日本教職員組合に結集している教員達が「民族学校を守れ」とか「民族教育の灯を消すな」という運動をしました。これがどうやら初めてのことではないかといふふうに聞いております。

日本の学校に在日の子どもたちがたくさん来ていたんですけど、当時の日本人教師は「同じ民族でなかつたら民族教育はできない」つまり日本人には在日の子どもたちの民族教育はできないというのを共通の考え方としていたようです。それでは日本人の教員にできる」とは何かといつたら、民族学校の前までその子どもたちが入れるように連れていくことだ、というのが原則として、あるいは常識として言わ

れていたことなのに、実際に日本の学校の中にいる子どもたちに対して具体的にほとんど行われてこなかつた。

一九六〇年の後半、七〇年近くになりまして当時の関西で、兵庫県とか大阪のいわゆる同和教育ですね、部落解放の教育を進めている日本の公立学校の教員の間から「やっぱりそれではいけないんじゃないか」、つまり目の前に在日の子どもがいろいろな形で差別を受けている、名前を隠して生きている、そういう苦しんでいる姿を当然、日本の教員は曰にするわけなんですけれども、そうした時に、日本の教師にであることは朝鮮学校の門まで連れて行くという原則だけですましておけるのかという反省の中で、やっぱり差別の現実に学んで、一人一人の在日の子どもらに具体的に関わっていくような教育が始まつた。それが一九七〇年の始め頃だつたと聞いております。

当時、大阪では一九七〇年に「公立学校に在籍する在日朝鮮人児童生徒の教育を考える会」という教員を中心とした集まりができます。また京都でも、一九七六年に同様な形で「考える会」というのが発足します。こうした教員達が全国的につながつて、一九七九年には「全国在日朝鮮人教育研究協議会」ができ、日本の学校にいる在日の子どもたちに関わる実践を交流するような機会が生まれてきます。わずか二十年ほど前からそうした日本の学校でのとりくみが始まつたと理解しています。

京都市では、一九八一年に「外国人教育基本方針試案」というものを、教育委員会の中の外国人教育推進委員会というところが出示しました。これは京都の学校にいる在日の子どもたちがやっぱり色々な形で民族差別を受けているという認識を持ち、民族差別をなくしていくとりくみを「外国人教育」という名前で呼び、そういうとりくみを京都の学校でもしていかなくてはいけないのじゃないかということを最初に示したものだと思います。

そして京都市の小中学校では、具体的に現場でどう進めていくかということで「小学校外国人教育研

究会」「中学校外国人研究会」を組織し、その研究会で少しづつ実践を進めていきます。例えば教職員が、「こうした在日の問題についてほとんど知らない」という現状がござります。どうして日本にこれだけ多くの在日の人がいるのかといふ」とも含めて知らないこともありますから、まず教員が研修を深めていくといふことで学校とか色々な単位で研修会を組織したりしております。

韓国・朝鮮人を見る子どもの目

一つ目としては日本の子どもたちが韓国・朝鮮、あるいは韓国人・朝鮮人というものをどう見ているかといふことが非常に大きな問題としてあります。現在でも例えば日本の学校で在日の子どもと日本の子どもが喧嘩をした時に、「朝鮮帰れ」という言葉がまだ平氣ででてきます。在日朝鮮人に対する知らないが故に間違った見方を持っています。「」にいる日本の方々も考えてもらつたら分かると思うのですけど、ここにいるみなさんは子どもの頃にどんな形で韓国なり朝鮮なりと出会いましたか。

私は長野県の伊那谷というところで生まれたんですけど、まわりにたくさんのがいました。天竜川という川のダム工事にたくさん的人が来てたと思うんですけど、そういう人達に対し石を投げたり、白い服を着たハラボジが片言の日本語で追いかけてくるのをはやしたて遊んでいたという経験があります。

多くの日本人は朝鮮に対し決していいイメージで出会っていない。子どもたちも結局同じだと思います。そういう親たちの影響を受けていますので、やっぱり日本の子どもたちに、朝鮮、あるいは在日朝鮮人に対してどういうふうに出会わせていくかというあたりのところを大切に考えていかなくてはならないかと思います。

例えば国語の勉強の中に色々な国の民話が出でます。そうした時にお隣りの国の民話を読んでみよ

う、そういう事も考えられると思います。今年から三年生の国語の教科書に「さんねん時」という朝鮮民話がのっています。この同じの方もあると思うんですけど、さんねん時で転んだら三年しか生きられないという言い伝えがあり、そのさんねん時で転んだおじいさんは病気になってしまいます。そこへ少年が、おじいちゃんに一回転べば三年、二回転べば六年、何年も生きられるという」ことを教えた。这样一个楽しい民話が文部省検定の教科書に登場しました。

こうした朝鮮の民話が日本の国語の教科書に登場したというのは、恐らく戦後初めてじゃないかなと思います。民話を例にとりますと、こうしたお話を三年生の子どもが読んで、お隣りの国って何か親しみのある国だなあとか、日本と似ている国だなあとか、あるいは服装についても様々なイメージを持つと思うのです。こうした時にマイナスでないイメージをもつて韓国・朝鮮と出会った子どもと、そうではない形で出会った子どもとはずいぶん違うと思うんです。

私達は何とか日本の学校の中で日本人の子どもが、韓国・朝鮮と明るく、あるいは正しく出会うということを、今の教育の大きな枠の中でできたらと考えて色々な試みをしています。音楽の教科書には載っていないんですけど、音楽の時間に韓国の歌を歌つてみようとか、あるいは社会科の勉強の中でお隣りの国の地理とか歴史とかについて少し触れてみようとか、まず日本の子どもが間違った見方をしないようにというところをしています。

一方、在日の子どもたちがたくさんいるなか、何とか本名が使えるように、本名が名乗れるような学校なり学級作りをしていかなければいけないということをさまざまな試みをしております。こうした中で、今年、九一年三月に教育委員会が「京都市立学校外国人教育方針」策定し、発表しました。これは八一年に出した「試案」は教育委員会という名前はついておりません。今年からは、教育委員会がやつていくといふことを明らかにしていくという点が、こうした教育を進めていく上で大きな力、推進になる

と考えております。

子どもたちが明るい形で韓国・朝鮮の文化と出会えないかということで、私達は去年から「民族の文化にふれる集い」を開いてきました。昨年は、約六百名程の小学生、先生、保護者の皆さんに来ていただきて民族学校の歌とか踊りや日本の学校で多少なりとも取り組んでいるクラブ活動の実践なんかをお互いに見あうことによつて、少しでもそういう文化に触れられればということをやってみました。今年はそれが教育委員会の主催で、少し規模も大きく、七百名を超える参加で私達は成功したと思っています。

子ども同士が対等につきあう

先ほど民族学級の子が民族学校に行こうという決心をしたという金先生の話を聞きまして大変嬉しく思つた次第です。もちろん現実は同化の状況にあると思うんですけど、日本の学校の中で、少しでも日本の子どもたちが周りにいる在日朝鮮人の事を理解し、あるいは学校の中での子どもたちと日本の子どもたちが対等につながれるような関係を作つていこうという努力はしております。広がつておりますが、現実はまだ一部の学校で熱心な先生がやつてているという域を出ないという現状です。

先ほど私が申しましたような文化にふれるということ、あるいは歴史を教えていくというとりくみは徐々に京都市内の学校に広がつてきているとは思います。しかし、在日の子がまわりの日本人の子どもたちに自分の本名を明かし、「僕は韓国人・朝鮮人として生きていくんだ」というようなことを学校の中でやっていくのはなかなか実現していないのが実状です。私の学校には現在三十一名の在日の子どもがおります。そのうち本名で来ている子はわずか一名です。私は四年生のクラスを担任しているのですけど三人の在日韓国・朝鮮人の子どもがおります。それからお父さんが韓国人でお母さんが日本人、新

しい国籍法の下では日本国籍が取得できますのでいわゆるダブルの子が一人程います。

色々なところを歩いていく中で、韓国・朝鮮の話が学級の中で出てくるようになり、ある在日の女の子が休み時間に「あんた何人?」と他の子に聞いているんです。そしたらその子がぱつと自分で「私は韓国人よ」と非常にきつい調子で言うんです。横にいた子はポカーンとして、どう言うてやろうかな、という顔してるんですけど、私はその話を早速お母さんにしましたところ、「へー、あの子がそんなことをいつたんですね」と驚かれました。その後「でもね、それを聞いた子どもが家に帰って話した時にその子の両親はどう言うんでしようね」と聞かれました。「本当にどう言うのだろうか」と、私も思つたんですけど、そのあたりのところが私達が抱えている大きな課題ではないかと思います。在日の子どもが自分で生きられるようにと頑つてとりくんでいます。以上です。

民族学校を弾圧

仲尾 ありがとうございました。

三人の方から鋭い問題の提起がありまして、私が改めて皆様にお話する」といいましたが、この在日の方々への教育についてどんな問題があるかということを、今お話になつていないと中心に少し資料提供をさせていただきたいと思います。

これは先ほど金先生がおっしゃいました、一九四八年から九年にかけての民族学校の弾圧事件を報じた神戸新聞です。この時は、米軍のMPや日本の武装警察が出動して、解放後、納屋を改造したり、倉庫を改造したりして作られた民族学校を物理的につぶしてしまって、中心の先生方や父母を全員逮捕するという非常に猛烈な弾圧があつたのですね。

どういう教育を子どもたちにするかということは、支配者、権力者にとっては、それほど大きな関心

があつた。そして民族教育をやろうという民族学校を武装警官でつぶす、「こういうことからそもそも戦後の方々の民族教育の問題が出発した」ということを認識したいと思い、持つてきました。これは京都でも同じで、京都でもたくさんあつた民族学校がほとんどつぶされる、そして今あります八校といふのはその中で再建されたり少しづつ皆さん努力でようやく持ちこたえられたというのが実状でござります。

これは比較的近年の統計ですが、本音として在日のご両親方が、子どもや孫にどんな教育を受けさせたいか、民族教育を受けさせたいかということについては「是非受けさせたい」が三十一・九%、「できるなら受けさせたい」が十七%というところで、やはり半数が民族教育を受けさせたいと思つていらっしゃる。

差別的な扱いを受ける民族教育

しかし現実には松下先生の言われた通り、八割くらいが日本の学校に在学している。これは七一年の数字で少し古いのですが、日本全体で小学校四万八千人、中学校二万二千人、義務教育段階で約七万名の子どもたちが日本の学校に行つてしまつという実状であります。

なぜこのようになるかと言いますと、原因は他にも色々ありますが、財政基盤が非常に弱いということですね。一條校ではないので文部省は日本学校と同じカリキュラムがあつても補助金を原則出さないので、いきおいご父兄の負担になつてくるということです。在日の団体から財政措置を求める運動が高まつておりますが現実には「一部の自治体で、一部の側面についてだけ財政措置がとられているにすぎません。

もう一つの問題は、財政的な問題と共に進学の問題であります。これは日本の大学、短大が民族学校

出身者をそのまま受け入れていいかということですが、少しずつ増えてはいますが、まだまだ朝鮮学校卒業生に受験資格を認める公私立大学は非常に少ない。従って民族学校に行っている高校生は同時に日本での定時制高校へ行つてそして大検を受ける、日本の高校の生徒の場合は大検を受けられるということで、両方受けて大検資格を取つて高校へ行つてる高校生もおります。

先ほどの補助金、財政のほうですが、京都市の場合は私立専修各種学校教育補助金として七九年からよくわざかですが出でております。これは要するに、文部省による一條校じゃなくて各種学校扱いといふことで自治体が少しは出しているということです。

それから今度は生徒達の活動について言いますと、これはよくテレビなどでも報道されていると思いますが、ようやく日本の学校に在学している在日韓国・朝鮮人の学生につきまして、部分的に団体の出場資格を得て、出られるようになってきた。ところが外国人学校、つまり民族学校は団体に参加できないうことになっていますね。かつては巨人軍の王監督や静岡商業の新浦投手が名選手でありながら出られなかつたということがあり、基本的にはこの問題はまだ解決されていない。特に外国人学校、民族学校が全然出られないというのが大きな問題です。

今年になってから、これは差別ではないかということで、日本弁護士会連合会が文部省に解消を勧告しております。しかしこれはまだ厚い壁があるのが現状のようです。

奨学金の問題については、京都の場合、九十年から母子家庭への奨学金を部分的に支給することがようやく決まつたばかりです。

兵庫県の芦屋市と滋賀県が学校の基本的な部分である校舎の建設等について補助金を計上したり、お隣りの滋賀県の場合は民族学校が日本における学校教育に準ずる教育を行つてゐる。国際化時代にあって民族・国籍を越えて教育の機会均等を確保していく必要があるということで、全国的に見て珍しい例

ですが、校舎建設の補助金を出しました。

芦屋市の場合は市の奨学金の給付を認めました。実はまだそれほど多くはありませんが、公私立大学が民族学校卒業生に受験資格を認めている。それから同じ在日朝鮮人生徒で、私立芦屋高校に通えば受給資格があり、民族学校に通つたのでは受給資格がないのでは矛盾するということで一般の奨学金を支給がようやく始まつたというのが現状です。

先ほど松下先生が言われた数字の更に具体的なものを言いますと、京都市の場合、小中学校で今年の五月一日、外国籍児童の総数は小学校で一千四百七十七名、その内韓国・朝鮮籍の方が一千三百三十人、中学校では千二百五十九人、このうち韓国・朝鮮の人気が千二百十九人でした。

従つて外国人教育とは言いますが、やはり在日の方の教育が基本問題であることがこの数字からもうかがえるのではないかと思います。ちなみに他の国のの子どもたちがどれくらいいるかというと、中国、百三十三人、これはかなりの数が中国からの最近の帰国者ですね。それからアメリカ二十一人、イギリス六人というふうになっています。

最近の傾向としては、単身で来られた後に、家族を呼び寄せられる。イラン、ブラジルといったアジアや中南米諸国の子どもたちも通学しているといふこともあります。

それからもう一つは、外国人の先生方の採用の問題ですが、今までは教諭として採用だったのが、今年から大阪府は常勤講師という形で採用する、常勤講師という形で格下げになりました。それは格下げではないと大阪府の教育長さんは言っておりますが、事実は格下げなんですね。教諭は管理職、教頭、校長先生になる道があるわけですが、常勤講師はそれがないということになります。従つてこういう格下げがあると、これから都道府県でまだ採用していない所でも格下げで一列に並ぶ場合が出てきます。従つて在日の方々には絶望感しかない、という感想も表明されています。

これは国際化の時代に逆行ではないかという意見がある。根本的には日本社会の中が外国人としての存在を認めていないのではないかということですね。それが反映されているのではないかということです。それから一番最初にお話いただいた、皇甫任さんの通つておられた郁文中学校の二部学級ですが、六八年から始まり九一年まで、初めは十一名だったんですが、今では九十七名の生徒の方が三年間にわたり勉強されています。

苦しい条件の中で自分たちで言葉をとにかく学ばなくてはならなかつた、そういう身を持つてのご体験をされている方がそれだけおられますのであわせてご紹介いたします。

第一一部

仲尾　まず金必善さんへの質問です。「金先生自身の教育環境について分からぬ点もあるので」説明下さい。それから娘が小学校一年の時、クラスの友達が金と名乗り出した時に、娘に『金さんて日本人?』と聞かれた時にとうさに『日本語を話すから同じ人間だろう』と言い、本人はそれで納得してくれたことがあります。本当はどのように教えたらよかつたんでしようか」という具体的な質問があります。

それから「民族学級ではどの程度まで朝鮮語の学習をするのでしょうか」日常会話程度なのか、読み書きはどの程度なのか、これも金先生にお答えいただきます。それから同じく金先生に「民族教育は在日本の権益擁護としてはもちろん、日本社会の国際化、他民族の尊重という観点からも当然保障しなければならないが、日本政府にもそのことを要求しなければならないと思います。現在、私を含めて在日の子どもたちが民族心が弱いのは、日本の同化政策と民族教育への保障がなかったのも一因だが、親を含めた在日社会が生活のため、金儲けのため、家庭での最低限の民族教育をおろそかにしてきたという一

面に自戒を込めるのもあるのではないしょうか」、家庭教育にも関連してお答えいただきたいと思います。

更にもう一つは「お話を中に出てきた本当の朝鮮人とは何でしょうか。自分自身が日本で生まれ、日本で教育を受けてきたことと思考のベースが日本語となるのはいけないことなのでしょうか。おっしゃる本当の朝鮮人になるには朝鮮学校へ行かないとなれないのでしょうか。もちろん民族にとって言語は重要要素には違いありません、しかしそれよりもっと大切なのは民族を愛する心、そして他民族を愛する心だと思います。劣等意識を持つのは間違いですが同時に優越感を抱くのも間違いのです」「どういう意見を含んだのもあります。部分的に省略させていただいたのですが、以上の五点が金必善さんへの質問ですので、要約してお答えいただきたいと思います。

朝鮮人で何が悪い

金 必善 回答になるかならないか分からぬけれどお答えします。私自身小学校の六年間、日本の小学校で教育を受けてきました。中学校から高校の間は民族学校で教育を受けることになりました。私自身の生活環境と申しますと、父母が在日一世です。ですからおのずと生活の中での言葉は朝鮮語という生活環境に置かれていました。でも私が小学校時代には朝鮮の学校とかあまりなかつたのと、父母達は日々の生活の糧のために働くのに必死だったので、民族学校、朝鮮学校にやろうとするとき費用もかかるなどの、諸々の事情で私自身は一年から六年まで今自分が勤めている養正小学校で学びました。

その時にも朝鮮学級、民族学級はありましたが、私自身入らなかつたんですね。朝鮮人が嫌とかそんなじやなくて、もちろん親は朝鮮人だから自分自身もそうだというのは持っていました。そして名前も漢字読みで本名で通つてました。でもなぜか民族学級には行きなかつたんです。今から思えば私

自身日本の教育を六年間受けながらそのベースとしては何があつても日本の歴史が占めていたのではないかと思います。自分の国の言葉は分からないので、父母も敢えて教えるという事はしませんので、ただ自分は一世から生まれた二世であり、朝鮮人だということは持っていましたけど、ただそれだけのものだったと思うんですね。だから六年間受けてきた教育の中で豊臣秀吉なりを習いますけど「すごいな、やっぱりそうなんだ」と自分自身そういう具合なニュアンスが多かったです。だからといって朝鮮人が嫌だとかそういうことも別になかったんですけど、私たちの時代はもろに「お前、朝鮮人か」とか、平気で言う時代でしたので、まあそれに対しても「朝鮮人が何が悪いの」ってやつたほうです。心の中ではただ一世から生まれた二世であるという感覚だったのです。だから自分自身進んで朝鮮の学校へ中学から行くことになりました。民族学級も行かなかつたので、ある一面では劣等感を感じていたと思うんですね。

学校内で球技大会がある時にいつも残るのは、私のクラスと民族学級なんです。その時は朝鮮人学級と言いまして、朝鮮の子ばかり集まつていて、一日中一時間目から六時間目まで学校生活学級があつたんですよ。日本人の担任と朝鮮人の担任とその中で常に残るのが、決勝戦は私のクラスと朝学だつたんです。その時私考えました「なぜ私は日本人の中で、同じ朝鮮人の相手せなあかんのか」その時初めて自分自身の矛盾を六年生の時に感じました。

相手は朝鮮の子ばかりで、自分は日本人の中に入つて対戦をしなあかん。「自分はそしたら何人であるのが」ということを自問自答しました。そういうわけで私は中学から民族教育を受けることになりました。

子どもたちは何も分からないと思うんですね。朝鮮人とか日本人とかそういう感覚がないと思うんですね、日本の子達は中国と朝鮮を「ちや混ぜにして勘違いしてる子も多いんです。「私の名前は金必善キンビルン

「どう」と書うと「中国人だ」とか、そういう具合な言葉が返って来るんですけど、やはり子どもたちは分からぬ中で大人たちにいろんな色に染められていくと思います。だから子どもが質問された時に、自分が本当に分からなかつたら分からぬで済ませて結構なんですけれども、自分が確かに答えられることについては、ちゃんと書いてあげて欲しいと思います。子どもたちにあやふやな回答をしますと、外国人として認めないという現象が起ること思いますね。要は大人がどういう具合に子どもに聞かれてあげるかという」となんですね。

民族学級では朝鮮語を「」まで教えられるかと申しますと、三年から六年まで週に二時間、非常に限られます。だから本当なら読み書き、みんな習つて欲しいんですけど、絶対的に無理です。クゴだけやるんじやなくてやはり歴史、そして歌もやりますので絶対的に時間が足りないので。私たちは自分の名前をちゃんと発音して書けるようになればいいなあという思いはあります。

言葉っていうのはその民族の特徴をつけるものだと思うんです。その民族の気持ち、感情は原語でいう場合と日本語に直訳する場合とでは感情がなかなか一〇〇%伝わらないのが現状だと思うんです。自分の国の言葉を学ぶ中で、歴史なりそういう具合な」と理解できてもゆくのじゃないかと思うのです。もちろん日本語でも学べますが、やはり日本語のベースがある中では一〇〇%その民族の心に触れるのは無理じやないかなと思います。だから子どもたちが日本の教育を受けながら、先ほども限界を感じていると言いましたけども、本当に子どもたちが日々そういう具合に覚えていく中でも完全に自分自身がなりきれないっていう意味でもあると思うんですね。

だから原語が分からなかつたら日本語でやればいいんじゃないかと申しますけれども、本当にその民族の気持ちなりを掴むんだつたら本国語が必要だと思います。日本語で直す場合もありますし、日本語で考ふる」ともありますけれども、そういう時、自分自身非常に情けなく思います。そのまゝの気持ち

を受け取れない自分自身に非常にジレンマを感じる」ともあるのです。だから要は、朝鮮の学校へ行く行かないという問題もありますけど、やはり学校で体系的な教育を受ける中でこの日本において、この日本語のベースの中で考えていくける問題じゃないかなと私は思います。だから民族学級の子どもたちにいくら次から次へと教えても言葉というのは使わなかつたら忘れると思うんです。だからその意味においても本当にこの子達が、自分の国の言葉なり歴史なりをマスターするためにはどうあるべきかということも言えると思うんです。

そして在日同胞は生活に追われて子どもたちの教育をやりたい気持ちはあるけど、なかなか経済的な問題なんかでやれない場合もあると思うんですけども、もちろん日本の社会は民族教育と、私達に対して本当に任務だけは要求しますけども、権利は保障しないというのが事実なんです。私達自身が日本の社会に原因を求めるものもありますけど、そればかりじゃなくて私達自身がどういう具合にしなければならないのか、という主体的な立場で考えなければならぬと思うのです。

一方的に要求するのじゃなくて、私達自身もどうして行かなければならないのかという問題もありますし、日本社会がどういう具合に変わつていかなければならないのか、という問題もあると思うんです。だからそういう面では、私達自身も任務だけじゃなくて権利も主張して、日本の皆様方と本当の意味で友好的なつながりを持つていただきたいなあと私は常々思っています。以上です。

仲尾 ありがとうございます。大変総括的なお話を聞いていただきましたので、ご質問に具体的な回答でなくとも金先生のお気持ちをお分かりいただけたと思います。

それでは次に松下先生に、「一、三質問が来ております。「日本の学校で教師集団としての取り組みがなされているのですか。それともいわゆる熱心な先生だけが取り組んでいるのですか。そしてどんな」とが教師あるいは個人としてであるのだろうか」というお尋ねが一つ。それからもう一つ「民族学校に

「関わられた理由」についてご質問がありました。松下先生は民族学校の先生ではなく、京都市立塔南小学校の先生です。そういう点で松下先生には、民族教育に關わられた理由、在日の子どもたちの教育に積極的に取り組もうと思われた動機、そいつた点を中心にお答えいただいだらいいとります。

それからこれは、ちょっと公の場で個人的にお尋ねになるのはどうかと思いますが、実は君が代、日の丸の問題と在日朝鮮人教育の問題についての関連のご質問なのです。やはり現場の問題でもありますので、これを含めて松下先生にお答え願いたいと思います。

松下 十分なお答えができるかどうか分かりませんが、幾つかの点でお答えさせていただきたいと思います。私は京都の学校と解釈させていただきますが、教師集団としての取り組みがなされているかというご質問ですが、大変難しいことなんです。どこまでが教師集団の取り組みなのか難しいことなんですが、一つ最近の統計がありますのでそれを紹介したいと思います。

小学校でも中学校でも一緒だと思うのですが、こうした在日の子どもたちの教育を進めていくとなりますと、小学校では担任の教師がいます。そしてそれぞれの子どもに関わっているのですけど、全体的な問題についてはそれぞれ学校の中で役割を決めているのです。例えば国語の先生は誰であるとか、生徒指導の担当は誰かとか、そういう中で京都市では外国人教育の校務分掌という役割を作つているのです。

八一年に基本方針の試案が出ました段階では「くわづかの学校にしか外国人教育という担当は置かれていなかつたんです。まあそれが教育委員会等の強い指導もあって、現在、九〇年では小学校百九十九校あるんですけど、全部の学校にそうした外国人教育の担当があります。ですから在日の方が日本の学校に行く時に名前をどうするかということも含めて相談にのつてもらえる所は必ずあるはずです。

学校の中での具体的な外国人教育のとりくみについての調査なんですが、全校の子どもたちに対しても

教科とかいわゆる特別活動の分野で何らかの形で取り組みましたかという質問に対して八七年の調査では、小学校の七十三カ校で取り組んだという報告があります。八九年の最近の調査では百四十五カ校七八%の学校で何らかの形で外国人教育に対する内容を取り組んでいるという報告があります。

進む在日問題へのとりくみ

具体的にいくつか申し上げますと、全校集会で校長先生とか担任の先生がいろんなお話をしたとか、あるいは図書室に韓国、朝鮮の図書を特別に集めたコーナーを作っているとか、それから朝鮮の民話の読み聞かせを持ったとか、民族学校との交流をしたとか、掲示板に写真などで隣の国の紹介をするとか、学芸会で朝鮮の劇や歌をやったとか様々な形で行われています。

例えばある学校ではサラムタイムという時間を設けて、一回田はビデオでお隣りの国や在日の人についてのものを見てそれについてクラスで話し合うなどの取組みもあります。それから教職員に対する研修会、それぞれの学校で独自に教職員が在日の問題について勉強するといった機会を持つた学校が百八十八ヶ校ございます。ほとんどの学校で何らかの活動を持っているというふうに考えられると思います。そうした面で少なくとも京都市の小中学校においてはこの十数年のとりくみがありますので、教師の集団というか学校体制として差はありますけれども問題にとりくんでいるというのが現在の状態だと思います。しかし、それが在日の保護者の方に全然見えないというか、伝わっていない、そういう問題をよく指摘されます。

私たちがやっていると思っても、そのことが子どもや担任の先生や色々な方を通じて保護者に全然伝わっていない」とが課題として考えられます。

在日の子どもの学校での位置づけ

「在日の」「質問ですが、私が」「うう」事に関わった理由について一つだけ申しますと、一九七〇年に二十何年も前なんですけど、私は京都市の教員に採用されました。南区の陶化小学校という東九条の学校で在日の子が三分の一を越える、当時、京都市では在日の子が一番多い学校に就職しました。

その時、私は障害を持つ子どもたちの教育の担当を七年間したのです。その時にやっぱり一番感じたのが、色々な形で普通学級の子どもたちも荒れているんですね。喧嘩になると、「朝鮮の根性を見せたらか」と言って、子どもたちが喧嘩をするわけです。本当に大勢いましたので隠すなんてことはなかつたんです。しかし、学校の中で三分の一も占める在日の子どもたちのことについて話し合う機会というのが一回もなかつたわけです。それはやっぱりおかしいのじやないか、在日の子どもの教育のことでもう少し考えていかなければいけないのではないかと「うう」と新米教師の私が言つたわけです。今でもよく覚えているのですが、その時のいみじくも年配のある先生が、「それは義務教育と違うじやないか、彼らは義務教育と違うのやから、やらんでもええやんか」と、そういう言い方をしたんですね。

当時、私はそれに対する何もよう反論しませんでした。おかしなとは思つたんですけどね。義務教育とは違うことだけではなかつたのですが、七十年当時、京都の学校では何もしておりませんでした。私達はそこで何人かの志のある教師と毎週土曜日、昼、「飯を食べに行く時に東九条の松の木町四十番地に行きました。

僕らはその当時、差別的な言葉で「堤防」「って呼んでました。「堤防」の子どもはたくさんいるわけですけどその近くにある好み焼き屋にとにかく飯食いに行」「うう」と、何人かの教員で土曜日毎に昼、「飯を食べに行くわけです。保護者の方も含めて子どもたちが最初私達を見て「先生何しに来たんや。誰かが悪いことしたんか」と聞くわけです。

在日の子ども・親とのかかわり

「おひつ日本の教員がそこへ行くのは子どもが悪い」とをした時だけだったんですよ。僕らそこへ「とにかく行こう」と何人かで出掛けていきました。そのうちにそのお好み焼き屋のおばちゃんに「先生来たら子どもがきよらへん」とまで言われたんですけど、当時に今のような京都市の方針なるものがあつたら、私達はもう少し本名の問題とか学校の中で具体的に何をするかというのが見えていたのですが、少なくとも私には全く何も見えませんでしたし、どうしていいことが大切なかが全くわかりませんでした。ただ「在日の子どもたちは問題を持っているなあ。そして荒れている子どもがいるなあ、なんとかせないかなあ」ということで親と話したりあるいは子どもと話す機会をできるだけ持つことしかできませんでした。私が今なぜこうこうと関わっているかとあえて言えば、そんな体験みたいなものが私の中にあるという」とかおっしゃれません。

仲尾先生の話の中になかったので、私も考えたいと思うのですが、「娘さんの友達が本名を名乗り出した時、娘さんに『金さんは日本人?』と聞かれてとつさに『日本語を話すから同じ人間だろう』と言い、本人はそれで納得してくれたんですねが、どのように教えたら良かつたでしょうか」という質問なんですが、私達もやっぱりよく「うう」と出会います。

私は四年生の担任をしているのですが、子どもたちに「日本の中には外国人がたくさんいる。その外国人の大多数は韓国・朝鮮人だ」とそういう話をします。そうすると子どもたちは南区に住んでいますので、「じいじいの人、韓国人や」とか、「近くに民族学校に行っている子がいる」とか、いろんな話を持つてきます。そして三、四年生くらいの子どもたちが疑問に思うのは、「先生、どうして韓国人が日本にいるの?」ということ、「なぜ日本語をしゃべらせるの?」ということですね。

六年生くらいになれば歴史的経過を社会の勉強の中で縦密にやれるのですが、小学校の三、四年生で

は理解は非常に難しいので、「その子のおじいさんやおばあさんの時代に、日本がお隣りの国、韓国を支配していて、色々な物を取つたりして、向こうの人達が来ざるをえなかつたんだということ、そしてその人達が戦争が終わつて國へ帰つた人もたくさんいるんだけど、向こうで戦争が始まつたりして帰れなくなつた人もたくさんできただんだ。そういう人達の子どもさんやお孫さんが日本の学校に來てるしまわりにいるんだよ」という話をします。

それくらいの話で三、四年生は理解し、後はごく普通に付き合うという事で、だから何かそんな形で一年生なりに分かる方法で話をしてやればよいと思います。でも、子どもはやっぱりどつかで何か納得できないものを持つてゐるんですね。そういうものをずっと心の中で暖めていて、また何かに会つたときに、「あの時のことは、こうだつたんだなあ」と分かると思います。できるだけそうした在日の子どもたちの話を私は具体的に話すようにしています。そうしますと子どもたちの中からこちらの知らないことが出てくるわけですよ。

自然な形で問題に触れさせる

先日も、校内で研修会というのをやりました。韓国・朝鮮の遊びの一環で「ウンノリ」というのがあります。それをする前に「韓国や朝鮮のことについていることありませんか?」と、子どもに色々出させて黒板に書いてみたんですが、やっぱり知っているんです。挨拶がどうやとか、隣に誰がいるとかね、どんどん話を聞いていくと「六年何組の誰々さんはこういう名前なんだけど、あの人は韓国人だ」とかいっぱい出てきて、こつちはこんな事まで授業に出ていいのかなどちょっと身構えてしまつたりするんですけど、南区という地域の関係もあると思うのですが、子どもたちは私達の予想以上にそういう問題を知つております。

日本人の子どもは日本人なりに疑問を持つてゐるし、何か知りたいという欲求があります。それに対しても「そんな」と言つたらあかんよ。あの人、韓国人やて言つたらあかんのよ」とか、そういう形で切つてしまふ方が非常に大きな問題だと思います。できるだけ自然な形で子どもたちにそうした問題を触れさせたいと考えております。

それから二つ目の君が代、日の丸のしんどい話しなんですけど、私は私なりの考えがありますが、本題ではありませんので一つだけ言います。

日本の学校で話がされていない問題の一つだとと思うんです、というのは日本人の子どもたちに日の丸・君が代を教えていくことについて、それを進めていく人達は熱心におっしゃるし、それなりの理論はあると思うのですが、日本の学校は日本人だけではない、京都市で三千何人もの在日の子どもが日本の学校にいる。その子どもたちにとつて卒業式で君が代を歌わせ、日の丸を掲げていくことにどういう意味があるのか。私の知る限りでは、そういうあたりの説明が、京都の学校では全くないというのは大きな問題だなあとthoughtしています。在日の子どもたちへのとりくみと外国人教育に矛盾しないのかなと思います。

外国人と一緒に暮らす意味

仲尾 ありがとうございました。

お一人から大変重大な、しかも生々しい指摘がございました。今日出された課題は日本人、それから在日の方も含めまして、「これから考えねばならない」とが多すぎるのではないか。今、京都市の外国人教育に対する指針が出まして、その中で民族差別をなくすためにこれからきちんととした外国人教育をやるのだという目標がはつきりうたわれています。

「これはまだ全国的にも出でている府県は少なくて、これが一つの現場の先生方、在日の方々への励みにもなると思うのですが、まだ問題は解決のために動きだした第一歩ではないかと思います。ですからそういう点で、我々の日常生活の中で外国人と一緒に暮らすということはどういうことなのか、民族差別とは一体どういうことなのかということを絶えず問い合わせ返しながら、将来の世代の子どもたちの未来というものを一人一人が考えていくべきだと思います。

……第四回 「仕事・生活」……

パネラード

林 仁喆氏（在日二世・会社経営）
金 有作氏（在日二世・会社経営）
仲尾 宏氏（京都芸術短期大学教授）
コードィネーター

（一九九三年一月十四日実施）

第四回 「仕事・生活」

第一部

仲尾 本田は、このフォーラムの第四回田です。今日のテーマは「仕事・生活」です。在日韓国・朝鮮の方々の京都での生活のあり方、あるいは生活の歩み、いろんな意味でのお仕事の「苦労話、そういうものをお話していただきことになります。

今日お越しいただきましたのは、林仁輔さん、金有作さん、お一人とも在日一世の方です。まず最初に自己紹介をしていただき、その後、お一人のお話を聞かせていただきます。その後、例により在日の方々の就労につきまして私が少し説明させていただくというふうに進めたいと思います。

金有作 私、在日一世の金有作と申します。本日「仕事と生活」というテーマで、在日韓国人一世として、私のプライベートな人生体験について、貴重な時間をいただきましたので後でお話し申し上げようと思っています。

現在、仕事は私の専門が機械なものですから、工作機械やオートメーションの設計、エンジニアリングの仕事をしております。その傍ら、私たち在日同胞の組織であります、京都韓国民団の上京支部の支團長をやっています。

また、京都韓国人納税組合の副理事長をしておりまして、自分の仕事をしながら、在日同胞の諸問題を多くの在日同胞の方々と共に考え、少しでもベターな生活になるよう未熟ながら努力している次第です。今日はよろしくお願ひします。

仲尾 それじゃ林さんよろしくお願ひします。

林仁咲
（ハヤシ・チヨル）

現在、土木の仕事をしています。土木といつても主に下水道工事、家庭のトイレとか、台所やお風呂などの雑排を流してそれを処理場に持つていく間の管を付設する工事をしています。今日はよろしくお願ひします。

仲尾 ありがとうございます。お一人に共通しているのは、お一人とも一世の方です。日本でお生まれになつて、また今、お話しになりましたようにお一人とも「自身で事業を営んでいらっしゃる、自営業である」ということでござります。なぜそういう自営という道を選ばれたのかといふことも含めて、あるいは選ばざるを得なかつたのかといふことを含めまして、お一人からお話しをうかがいたいと思います。それでは金有作さんからお願ひします。

在日として人生をまつとうする

金有作 「仕事と生活」というテーマをいただきました。このテーマ自体が非常に大きなテーマですので何をお話し申し上げてよいのかとまどいますが、私自身の歩んできた人生の中でも、在日の抱えている問題を、私の体験も含めて皆さんにお話し申し上げたいと思います。

私は昭和二十年戦後に京都で生まれました。私の父は一世で、母は一世です。私は京都の西陣の織物産地のど真ん中で生まれ育ちました。小さい時から父の織物製造の機械の音の聞こえる中で生活していました。すでに皆さんは昨年から続いているこの講座を通じまして在日韓国・朝鮮人の様々な問題について、ご理解なさっていると思いますが、少なからず私も在日の多くの同胞と同じように小さい時からやはり様々な差別、特に小学校や中学校の時には、韓国人どうの、うのと言つていじめられた思い出があります。

その当時、私は本名で学校へ通つていませんでしたし、そんなに民族心のある子どもではありません

でした。むしろ自分が韓国人であるということを隠し、あるいはそれを卑屈に思つて生活してきたように思います。一番私が小さい頃から受けた影響はやはり私の父の歩んできた生活体験ではないかと思います。

一世の多くの人がそうであるように戦時中、幼い頃に日本に渡つてきて、裸一貫で今日まで築きあげてきた社会的地位や財について、どれだけ多大な苦労をなしておきたかということを小さい時から色々聞きました。

このような生活環境の中で、私自身が学んだことは、やはり在日韓国人として今後、自分の人生を全うしなければいけないということを痛切に感じました。そのことがこれから述べます、高校、大学、社会に出てからの大きな支えになつていると思います。

特に、今日に至るまで日本の韓国・朝鮮人政策として、同化政策、追放政策、管理政策、この三つが基本にあるのではないかと思います。特に同化政策につきましては国籍法の問題、追放政策につきましては、ご承知のように入管法の問題があります。管理の問題、これは指紋押捺問題等で見られますように外登法の適用の問題があります。このような日本政府のとつてきた韓国・朝鮮人に對する政策のなかで、私たち並びに今の学生や子どもたちが、現に日本の社会のなかで生き、生活しているわけです。

日本社会のなかでの教育・就職・結婚問題

我々、在日同胞にとって重要な子どもの頃の民族教育の問題、学校を出ますと就職差別の問題、そして社会人になりますと結婚相手の問題、こういった教育、就職、結婚といった問題、これらは非常に重要な問題であります。

私は一九六八年立命館大学機械工学科を卒業しました。卒業した当時、もう夏休み前には私の友達は

ほとんど就職を決定していました。しかし、ちょうど私の学年に三名同じ同胞の友人がいましたけど、皆就職はできませんでした。一人はやむなく自分の家が鉄工所をしているので、家を継ぎました。私ともう一人の友人は就職できませんでした、というよりも当時、入社試験すらも受けさせてもらえたかったのを痛切に思い出します。

それでも私は自分の専門の道を歩みたいという希望を捨て去る」とはできませんでした。そして大阪大学の大学院に進みました。二年間さらに専門の勉強をいたしました。そして昭和四十五年に大阪大学大学院院の精密工学科を卒業したのですが、やはり同じように現実の壁は厳しくて就職することはできませんでした。大学院のマスターを出て、どのように自分の人生を歩むかと色々悩みました。

卒業して約一ヶ月間、韓国にも行きました。韓国の研究所や大学や自分のつてをたどって色々所を回りました。それでもその当時、今から二十数年前になりますが、研究所といつても設備がない、大学といつてもまともに研究できる設備がない、そういう現実にぶち当たつて本当に失望して韓国から帰ってきたのを昨日のことのように覚えていいます。

父はちょうどその当時、織物業兼喫茶店等、他の事業をやっておりました。私自身に長男として跡を継ぐように説得がありました。しかし私はそれでも何とか自分の機械の専門の道を歩みたいということであ就職を得るために毎日動きました。朝起きればまず新聞の求人欄を見るという生活が一、二ヶ月続いたと思います。その中で小さな設計事務所に入りました、設計の勉強をしました。そうこうしているうちには自分の希望でありました工作機械のメーカーから依頼がありまして、そこへ来てほしいということでおうど私が二十六の時、その会社がスイスと合弁会社を作るというので機会を得ましてスイスのメーカーに研修ということで、約一年間勉強に行きました。そこで機械の設計を勉強して、そして帰つて来て、約四十歳になるまで約十五年間ほど、日本の合弁会社で工作機械の設計、特に自動車の自動化

生産ラインの設計に従事してまいりました。

「」のように今まで自分の信念を貫いてきたわけですが、いかに我々在日にとって、日本の会社に就職するということが困難か、あるいは自分が大学で学んだことをその延長線上に自分の人生を歩む、かつ自分のやりたい仕事をする、ことがいかに難しいかという現実が私たちの前にあるということを、「理解願いたい」と思いました。

現実に私はちょうど四十歳の時に、理由がありまして独立して今のP&Pという会社を作ったのですが、一番大きな理由はやはり自分の持っているもの、学んできたものを何とか韓国の生産技術の発展に寄与したいという気持ちで自分の会社を作りました。そして今まで韓国の機械メーカーや、自動車メーカーといろんな仕事をやってきました。その中で学んだことは、日本の社会の中で特に私みたいな小さな、自分で切り盛りしている会社が日本の企業と付き合い、ビジネスを開拓する、これがいかに難しいかということでした。例えば日本の都市銀行、私たちは韓国とが外國との取り引きがありますので当然外為関係になりますので、都市銀行と付き合わなければなりません。その時でもやはり実際に会社の信用調査の問題とか資金力の問題とか様々な問題で、日本の大手の銀行と付き合う、というのは非常に厳しいという現実もあります。そして特に上場されているというような大手の会社と付き合う時は、これもまた難しい、そして信用を得なければ付き合っていただけないという側面もあります。

私は仕事の関係上、年に六回から八回、韓国へ行ったり来たりしていますが、我々在日の立場は韓国へ行けば日本人扱いされる。私自身が在日一世なのに韓国のパスポートを持っていること自体が、韓国にいる人にとっては本当に奇異であるというふうに私に接してまいります。日本にいれば、韓国人として、朝鮮人として差別される状況にある。非常に中途半端な状況にある事も事実です。

本名と通名の使い分け

特に就職差別問題につきましては、現在、国籍条項が問題になつております。後で仲尾先生のほうから「説明があると思いますが、公務員の問題や教員採用の問題が日本の新聞紙上で云々されている国籍条項という問題があります。京都市の場合は実質的には在日韓国・朝鮮人の一般事務職への採用については、まだ認可されておりません、非常に残念なことがあります。

日本社会において会社を営んで行く中で、私が大きく突き当たった問題があります。「本名、通名」の問題であります。私は通名を「金本」と言いますが、十五年間のサラリーマン生活の中で、どうしても日本の社会で日本の企業とつきあうなかで、会社の方から「金では都合が悪いので通名を名乗つてほしい」と言されました。その当時、就職して、自分の専門の道を歩むということで私は拒否しませんでした。ですから日本の豐田や日産にエンジニアとして行く時は、私は通名の名刺を持って行きました。仕事の関係上、本社がスイスだったのヨーロッパとか東南アジアにもよく行きました。その時は「金」の名刺を持って行きました。現実に生きて行く中で通名と本名を使い分けるような生活、それは私だけではなく、やはり在日の多くの方が直面している問題ではないかと思います。私自身、熱烈な民族主義者でもありません。本当にどのようにして在日として生きていくべきなのか、そして今、抱えている在日としての多くの問題を我々の手で解決できるのか、また、我々の子ども、次の世代にどういう形で民族文化を残していくべきなのか、そういうことを考えていました。

自然の流れの中で、なぜ本名を使用しないのか、通名を使うのかという問題に対し、悩みながら試行錯誤しながら生活しているのが現状であります。私は海外生活一年の経験があるのでですが、若い時にそういう体験をしまして、私にとっては本当に大きな財産であると思います。

特に抑圧された、差別された、子ども時代の生活、学生時代を送つていた私にとって、社会へ出て

「金」^(き)という名前で大韓民国のパスポートを持つて外国で生活するといふことの意義。本当にその時に「パスポート」という物の持つてある意味、「国籍」とはどういうものなのか、「在日である」というのはどういう事であるのか」ということを考えさせられました。

当時、イスラエルは非常に面白い国でした、言葉もドイツ語、英語、フランス語、イタリア語と四ヶ国の言語を使います。その言語の如く、私が当時いた設計室にもイタリア人、ロシア人も働いていて、チエコの人、ドイツ人、イスラエル人、スペイン人、いろんな国のヨーロッパ人が同じオフィスで働き一緒にデザインして機械を作りあげていく、それが私にとっては素晴らしいことであり、なぜそれが我々々に住んでいる日本社会でもできないのかといふことを痛切に感じました。

本名で生活し、共生する

本名で生活して様々な人が一緒に共生する、そういう社会、私がイスラエルで学んだ生活体験、そういうものを少しでも現実に近づけていくことが、我々在日の抱えている諸問題を解決していくことになるのではないかと思います。

次に「生活」という問題では子どもの教育が私の抱えている一番大きな問題です。特に我々在日が抱えている大きな問題の一つに「なぜ帰化しないのか、なぜ韓国籍を持ちながら日本社会の中で定住外国人として生きていかなくてはならないのか」という問題があります。

私自身の問題として考えるのなら、小さい時から一世である父親から苦労した色々な話しが聞かされ、そしてその中で私自身が学んだ、父によつて植えつけられた民族の魂とでもいふんでしょうか、意志、アイデンティティーそういうものを捨て去るということは、人間として生きる人格、人生に対する価値観、そういうものを見失すのではないかと思うわけです。帰化というのはそういうことを意味している

のではなにかと照らす。

今、日本社会の中での「内なる国際化」と言われています。多くのマスメディアを通じて連日いろんなプログラムが計画され、今の学校教育もそれに基づいてなされています。私自身の子どもにも機会あるごとに在日として生きる意味をいろんな機会を捉えて話しておりますけど、私も子どもが三人おりますが、残念ながら通名で通っています。それは子どもに選択の余地を与えていたのですが、つい最近も」んな事がありました。

「一番田の子どもが小学校を卒業する時に、六年間の一番の思い出を作文にしなさい」というテーマのもとに作文を書きまして、その中身が、六年間の中で一番辛かつたのは韓国人・朝鮮人として差別されたことだ。なぜ国籍が違うことだけで差別されなければならないのか、日本も過去に戦争でいろんな悪いことをしてきたではないか、なぜ在日の我々がここにいるのか、そういう理由で我々がいるにもかかわらず、我々が差別されなくてはならないのか、ということが書いてありました。しかし自分は凜として誇りを持って生きていきたい。

形態、環境は変わつても、やはり私の子ども時代と同じように、今の子どもも同じような体験をしているのだなあと、私はその作文を読んだ時に愕然としました。しかしその中にも我々の世代と違つて前向きに生きたい、生きよう、そして自分が在日であるところ」とことを真剣に受け止めて生きようという前向きの姿勢があります、明るさがあります。色々悩みながら生きしていくところが、今後の子どもたちが成長していく上で一番大きな力になるんだと思います。

また、今の生活の中で我々の一番大きな問題の一つに、戦後補償問題があります。これは日本の対韓国・朝鮮人に対する姿勢、我々在日が日本において今まで差別されてきた生活を考える上で再度、どうしても我々在日だけでなく、日本の多くの方が真剣に考えていかなければならぬ問題ではないかと

思います。

特に戦後、ドイツがユダヤ人犠牲者に対して行つた補償の問題とか、アメリカが第一回大戦中に強制収容された日系アメリカ人に對して補償してきたという問題があります。やはり、日本が戦争中、我々韓国・朝鮮人対して行つてきた様々な戦争行為を心の問題として反省し、そして本当の意味で在日韓国・朝鮮人あるいは韓国と日本の問題を平等の立場で共に生きていくという観点で再度考え方で最も、この戦後補償問題は重要な問題ではないかと思います。

また、私たち在日とりましても、我々は国民として、京都市民として府民として、全ての税金を納めています。それにもかかわらず我々には基本的人権が認められていません。それは例えば地方公務員の問題であり、教職員採用の問題であり、そして学校での民族教育の問題であります。

参政権の保障

こういった問題を解決するためには、我々も日本人と同じような権利を得なければいけないのでないか。言い換えれば今、在日同胞の重要な課題として地方参政権の問題があります。これは日本の地方自治体への、地域社会への積極的参加を我々在日同胞が行つてゆくのであれば、やはり地方自治体への参政権は保障されしかるべきではないか、と私は考えています。

きたるべき二十一世紀をどう生きるのかという民族的課題について、我々在日は未来に生きる指針を明確にし、生活拡充のための差別撤廃運動と人権闘争を開拓し、我々在日同胞の文化や教育や福祉の向上のために努力していくことが、我々の問題を解決していく一番重要なことであると考えます。

日本人社会の中で差別されることなく、我々韓国人・朝鮮人としての民族的な誇りを持つて、そして我々の住んでいる地域社会に貢献して次の二十一世紀に世代を生きる、国際人として生きることが我々

在日同胞の重要な役割ではないかと考えます。

とりとめのない意見ではございましたが、これで終わらせていただきます。

仲尾 大変限られた時間で、ご体験の中から総括的な今の問題を提起していただきたいと思います。それじゃもう一人林仁喆さんからお願いします。

民族性をどう取り戻すか

林仁喆

林と申します。最初に僕の生い立ちから話したいと思います。僕は昭和二十一年、一九四七年に広島で生まれました。親父は韓国人で、お袋は日本人、ちょうど中途半端な形で両方の文化が混じり僕の中で衝突するような中で幼年時代を過ごしました。当然、学校へも日本人のような顔をしていましたし、どちらかというと、そういう部分は触れてもらいたくない部分として隠して持っていました。

大学進学で京都の方へ来るようになつて、初めて同胞の学生達がいるということで、そういう集まりに参加する中で、自分が韓国人であるという事実を直視しなければいけないということを少しづつ考え るようになつたわけです。そうしているうちに何となく、自分自身が民族の持つている課題というか、当時でいえば、我々在日韓国人が置かれていたいろんな社会的差別や法的差別、社会的な偏見に対しても打ち勝つていく、また我々の置かれていた社会的な状況が悪いとするなら、本国と日本との関係にあるのだから、そういうものに対しても闘つていくというのが自分自身の民族性、ひいては人間性を取り戻していくのではないかと考えるようになりました。

そして民族の学生運動というのですか、「在日韓国学生同盟」という組織で積極的に活動をして、その辺りでなんとかして自分自身の生きしていく道と、我々在日同胞が生きていく道を見つけられるのじゃないかと思って、頑張ってやってきました。

しかし理想というのは破れるのが当たり前で、我々の時代は大学闘争なんかあって一時的には非常に混乱して、ひょっとしたら世の中変わるんじゃないかなと思つた時代もあつたんです。徐々に世の中治まってきた、僕らの夢が生かせる場所を見つける可能性がなくなってきて、そのうち自分自身の身も追い詰められていくような感じで、どうどうどうにもいられないような状態になって、しばらく姿を消していた時代があつたのです。

どうせ夢も破れたのだから、どうして生きていこうかと随分悩んでいたわけなんんですけど、とりあえず飯は食つていかなくではならないのですが、仕事がないんですね。韓国人だからといふことと、こういう民族運動みたいなことをやつていたからという一重の意味で、どこの会社も受け入れてくれなかつたわけです。やむを得ず、履歴書もいらない身体一つでいける仕事はないかなということで、土方やつたら何とかいけるのと違うかということで、京都の方で土方をしながら何とか生活をしていた時代がありました。

そうしているうちに少しは仕事に慣れてきて、図面も読めて、測量もできるし、まあ仕事を覚えてくれば他の人間よりも少し上に立つようなこともできだし、そこそこ責任がある立場になつたわけです。土建屋の世界には韓国人がわりと多いですね。まあ仕事をするのに何人か使って、土方やりながら土建屋をやつているという業者が結構多いんですが、そこに拾われまして、その仕事をやるようになります。土木自体がきつい仕事ですが、その仕事はその中でも特に、きつい、汚い、危険と思われる下水工事でした。下水工事はトイレなんかの水が流れている仕事をやるものですから、土を掘っている時に山崩れの危険があるのです。だから下手したら埋まってしまう。今は機械が結構してくれますから、そういうつてもいいんですけど、以前はほとんどはしとスコップで作業してましたので非常にきついわけですね。そこで仕事をしている在日韓国人の人が多くつた」とから、僕もそこで仕事をやるようにな

つたのです。なぜ土木関係に在日韓国人が多いかといふと、きつい、汚い、危険だから多いということだと思います。

日本社会というのは目に見えるような形では差別はしていないのですが、いわゆる誰も人がやりたがらない、きつい、汚い、危険な仕事を韓国人がせざるを得ないという状況を作っている所に、日本の社会の根本的な問題があると僕は思います。土木のなかで在日韓国人労働者や親方の占める割合は高いのですが、特に下水の場合は圧倒的に多くて、労働者なり我々のような三人、四人の職人なり人夫を使っている業者の大体七〇%から八〇%が在日韓国人なんです。残りは部落の人たちが少しど、地方から出てきてこちらの会社に勤めただれど会社が潰れたり、何か事情があつて仕事をやっていることが多いです。

こういう仕事を僕自身やるようになつて何回か危ない目に遭つてきたのですが、何とか一生懸命頑張つて、そこそこの仕事をこなし、仕事を任せられたりするようになつてきました。そういう所で、うちに日本の経済がオイルショック以降が非常に悪くなつてきました。勤めてる所がつぶれると給料ももらえませんし、その時はもう結婚してましたからやむを得ずというか、他に道がなくて独立してやつていく道を選んだのですが、それがちょうど三十六歳の時でした。今からちょうど九年くらい前でした。

最初は全然仕事がなかつたので、もちろん人を使うこともできませんでしたから、あつちの手間仕事、あつちの手間仕事をして、また夜は帰つて図面を書いたりしてました。土方と現場監督、それから経営の方の仕事から何でもしました。そういう生活が三年ほど続き、少しづつ得意先ができるようになつて常時職人も雇えるようになりました。そして雇っている職人もほとんどが韓国人という具合でした。非常に危険な仕事なものですから、職人の怪我とか、仕事 자체がギャンブル的な要素があつて、一回失敗すると今まで何年もかかつて少しづつ蓄えてきたお金も吐き出すようにしなきゃいかんようなことなん

ですけど、まあこのようにして仕事をやってきています。

正直な話を言いますと、土建屋を含めて第一次産業の仕事というのはよくないと思うんです。それはバブルがはじけてということもあるでしょうが、日本の社会が我々を安全弁にして成長してきたという面があると思います。景気の良い時には結局、僕達を精一杯利用して日本人のやりたがらない仕事をやらして、追い立ててその景気を増進していく、そしてどんどん儲けていく。悪くなったら、我々のような者を真っ先に切って自分達はとかげの尻尾を切って生き延びていく。僕は土木の世界しか知りませんけど、製造業にしても建設関係でも同じようなもので、そういう現状があると思います。

そのような現状の中で仕事を続けていくと、かえって僕自身の首を締めることになるのではないかということです。現在、非常に悩んでいるわけです。仕事を続けることによってかえって借金を増やすことになつたり、自分自身の将来を閉ざしてしまったのではないかという複雑な気持ちを持っているのです。生活のためにいわゆる、きつい、汚い、危険の頭文字のつく第二次産業に従事して一生懸命働いていた人がほとんどだったと思うのですが、そういった人が生活の現場で悩んでいるということがあると思うのです。

そしてその中でも「この生活しかできない人と、少し余裕のある人、第三次産業・サービス関係の方に移っていく」という現状があると思います。そういった生活とか仕事が徐々に変わる中で我々在日韓国人の意識も非常に変わってきていくと思います。今まででしたら第二次産業、土建屋とか建築とか製造関係の下請け、そうするとわりと地域的にも固まつてくるし、その中で意識、考え方、物の見方に、ある程度共通のものがあつたんですけど、これが第三次産業のサービス関係に流れしていく中で意識がどんどん多様化していくと、今までお互いに助け合ってきたことが皆どんどん仕事が違つてくると、助け合いや共通の話題もなくなっていく中で、やはり同胞社会自体がばらばらになつてきていると思う

です。

三世にどう民族性を伝えるか

それと同時に一世・二世・三世の問題があつて、先ほども金有作さんからお話をありましたように我々在日一世は、実際に一世の親からいろいろんな物を受けているわけです。親から一つの人間の歴史なり具体的な生活なりを見ているから、民族というものについてはある意味で隠してきたにしろ、実際に間接的であれ体験したものとしてあつたわけです。だから民族性を取り戻すという言葉は私自身の中ではまだ生きているというか、まだ意味を持つていたのですが、三世というと結局、僕達の子どもの世代ですから具体的な生活なり歴史の中で民族性を吸収していくという場がほとんどないものですから、そういう意味で「民族的に生きる」という観念が頭の中を考えることを除いて持ちえなくなっている。

その中における理性と感性との意識の差、これは同時に家庭の中の問題もあると思いますが、我々在日韓国人の社会では儒教的な伝統、変な言葉で言えば男尊女卑、男は偉く女は男に仕えるものだという考え方があるんですけども、在日韓国人の男の場合には非常にそれが強いのです。

ところが女性の場合にはそういう親達を見て育つてきているものですから、それに反発する意識が普通の日本人以上に強い場合があるのですね。そこで家庭の中のギャップが出てくるんです。そうすると家庭の内部では親と子の問題、夫婦の問題、老人問題もありますけど、一世と一世の老人との関係でも、家庭の中でも非常に複雑な問題が起つてきています。

そのような問題の中で我々がどのように生きていつたら良いのかが課題なんですが、皆さんよぐり存じの人もあると思うんですけど、本名を名乗つていこうという運動があります。それから「在日韓国人」として生きていかなければならぬと主張する人達もいます。僕自身は本名を名乗つて生きていく

べきだと思いますし、「在日韓国人」として生きていらばべきだと思いませんけれども、「ではなぜそういうのか」と問われた時に、自分の胸の中に問い返してみて果たして答えが出せるのかどうか、それを子どもたちに対してもうなんだときちんと言えるのか、また日本人の人に対しても本国の人たちに対しても、「こういうふうに生きるんだ」と言えるのだろうか、と言つと言つと切れない部分が生じるわけです。だからこういう場所をきつかけにして、もう一回そういう問題を基本に帰つて僕自身考えてみたいし、我々在日韓国人社会の悪い所は直視して考えていきたいと思ってます。そういう意味で私は今回参加したのです。問題提起になるかも知れませんけど一応終わりにしたいと思います。

最後に、僕自身の夢について語らせてもらいたいと思います。抽象的なることになると思いますが、これは動物の社会でも人間の社会でも歴史的に見てもそうなんですけど、その一つのまとまりというかコミュニケーションというか、その中で異質なものがなくなったら、その群れやコミュニティー、社会が亡びてしまうのですね。

つまり、この日本の社会の中で日本人が全部同質化したらその時点では日本は終わつてしまつ、死んでしまつと思つています。ということは、この日本の社会で我々が在日韓国人として異質でありながらも同じものとして生きることは、日本の社会の中で日本人の人達が一つの可能性を日本社会の中で作つていくという重要な意味をこれから持ち得るんぢやないかと、我々の存在はそういうふうな意義を持つているし、これからそうありたいと思うのです。それでは可能性、具体的な方法は何なのかということと一緒に考えていきたい、一緒に作つていきたいなというのが現在の僕の考え方です。

就職差別の壁

仲尾 ありがとうございました。お一人の最後のほうの結論、言われる言葉は違いましたが、「体験の中からこれから日本社会の生き方とあるべき方向を教えていたいたよな気がします。それではお一人が語られました中にありましたように、お一人とも京都の大学を出られて文科系ではない、従つて日本人であれば比較的就職が保証されているような卒業をされたわけですが、しかしながらお一人とも就職については大変苦労された、今もお仕事の面で同じ差別の壁が依然としてあるということをおっしゃいました。そこで私は就職、仕事についてどれほどの差別があるのかということを、統計などを利用しながら、そして歴史的に振り返ってみたいと思います。今日、ここに昨年の秋に出たばかりの本を持ちてまいりました。「在日朝鮮人の就業実態調査、在日高麗労働者連盟編」という書かれた統計です。これなども少し借用しながらご説明させていただきたいと思います。

まず就職差別の問題ですが、今お一人が就職差別を体験された、「卒業をされたのが一九七〇年前後ですね。これは九一年の統計ですから少し様変わりしていると思うのですが、その頃はもっと厳しかったと思います。まず過去の就職差別体験があつたという方が四〇%、ないという人が六〇%、これの対象は主として大阪なんですがそういうことが出ております。

それから神奈川県の八四年の調査では似たような数字ですが、差別があつたというのが三八%、なかつたというのが五九・五%であります。年令別に在日の方を分けて、就職差別体験があつたかなかつたか、それで見ますとやはり三十四才以下で、あると答えた方は二七%、三十五才以上六〇歳未満の方が、五八%、六十才以上の方が八五%ですから、やはり一世の方、一世で今四十年代・五十年代の方ほど差別がひどかつたということが表れています。(表1・2参照)

通名使用の強要

この差別の体験の内容を見ますと、門前払い、それと公務員の国籍条項の場合を含めた対応拒否、やはり三十四歳未満では四十名ということになつており合計七十三名。それから通名を強要された、つまり日本名を強要されたという形での就職差別が十一名ということになります。さらに具体的な事例を見ますと、就職内定後に帰化する意志がないかと確認された。大学生課の就職相談で「やっぱり君ら無理だよ」と言われた。実際に外国人を除くというのがあった。一年前、面接で就職が決まつていた会社で履歴書を渡したところ「会社の都合で採用できなくなつた」と通知が来た。高校の先生に「この会社は韓国人は採らない」と言われた。十四年前、高校三年の時入社試験を門前払いされた。ある運送会社で「うちの会社は韓国人は雇わない」と言われた。新聞広告を見て郵送したが、定員を満たしたと直接も受けられなかつた。ところが次の日には、また求人広告が出されていた。一九六〇年代に学校を卒業して就職時に、当時は「金の卵」と言っていたのに私だけが就職できなくてアルバイトを探した。こういう具体的な例が出ています。これは九一年、去年の調査ですがなおかつこういう差別が現存しているということです。

現在、在日の方々がどういう仕事についておられるのか、これは日本人と比較した調査です。韓国・朝鮮の方については入管の統計、日本人については国勢調査ですが、まず医療科学専門職に在日の方が多い。約一倍になつていますが、これについては在日の方が経営されている病院それから学校、民族学校を含めた数字でありますので、専門職についておられるということがそれだけ恵まれた職場を確保されているということを必ずしも意味しないと思います。それから技術者については非常に少ない、これはお一人のように技術を持ちながら生かされない。非常に頑張つて意志を通された方もありますが、やっぱり就職の機会としては技術者であつても乏しく、九分の一と日本人との大きな差がでております。

▲表1 過去の就職差別体験

—— 91年 大阪調査 ——

	男		女		全 体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
あ る	78	39.0	62	41.3	140	40.0
な い	122	61.0	88	58.7	210	60.0
計	200	100.0	150	100.0	350	100.0

—— 84年 神奈川調査 ——

差別がある—38.6% ない—59.5%

▲表2 過去の就職差別体験

体験 年齢	あ る		な い		全 体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
34歳以下	60	27.4	159	72.6	219	100.0
35~59歳	68	58.1	49	41.9	117	100.0
60歳以上	12	85.7	2	14.3	14	100.0

—— 差別体験記述例より ——

主な分類	34歳未満	34~59歳	60歳以上	計
門前払い・巧妙な採用拒否等 (公務員の国籍条項による場合も含む)	40名	29名	4名	73名
通名強要	8名	3名	0名	11名

■ “門前払い” 及び “巧妙な採用拒否” の例

男「就職内定後、帰化する意志がないかと確認された。1983年頃。」

女「大学学生課の就職相談で、「やっぱり君らは不利やよ」と言われた。実際『外国人除』というのがあった。」

女「2年前、面接で就職が決まっていた会社に履歴書を渡したところ、会社の都合で採用できなくなったと通知がきた。」

女「高校の先生に、この会社は韓国人はとらないと言われた。」

女「14年前高校3年のとき、入社試験を門前払いされた。」

男「ある運送会社で、うちの会社は韓国人は雇わないと言われた。」

男「新聞広告を見て履歴書を郵送。定員を満たしたと面接も受けられなかった。ところが、次の日また、求人広告が出されていた。」

男「1960年代、学校を卒業して就職時に、当時金の卵といわれていたのに私だけ就職できなかつた」

女「アルバイトを捜すとき」

教員や宗教家が少ないので日本の学校で原則採用しないところがまだ非常に多いからであります。それから事務職は三一・五%，これは多くなっています。これは他のところとの比較の差でそこに偏っているのじやないかと思います。それから販売、販売というのはこれはもういろんな物を売るところでして、何から何まであります。飲食店を含んでいます。そうすると販売従事者が日本人の一倍といふことになる。農林漁業が少ないので農地を持たない。持てるような状況でなかつたですね、だから多いのは採石運輸労務作業者であります。先ほど言われたいわゆる土方という言葉もこの中に含まれます。それから技術工、生産工程従事者はやはり少ない。有職率、仕事を持つての方は、二二五・二%で日本人の半分になっています。従つて無職率も多いということが統計上出ております。在日の方をめぐる職業の自由という問題は実際問題、依然として非常に厳しいといふことがこの統計で表れていると思います。（表3参照）

偏った就業実態

さらに遊興店は三十四歳までの方で九・三%。遊興店というのはいわゆるパチンコ屋さんなどだと思いますが、そういう所は三十四歳未満の、いわば若手の働き盛りの方が十人中一人の方が働いておられるというのが非常に大きい特徴で、パチンコ屋さんはご存じのように在日同胞の経営が多いわけですから、そういう所で働く、あるいは働かざるを得ないという形がよく出ていると思います。それから多いところを見ますと製造業、そして教育・保育ですが、教育保育は先ほど言いましたように民族学校で教育に従事されている方も含めます。それから医療が少ない。金融が比較的多いですが、これもやはり在日本の方の金融機関を含んでいます。それから被雇用者、つまり雇われている人ですが、サラリーマンの人が就業者に占める割合は五六%，これは日本人と比べて非常に少ない。それから家族従業者が十一%，

「これは非常に多い。雇い人がある業種が十一%、つまり非常に小さな零細自営の方が多い」とが言えるのではないかと思います。（表4参照）

こういった在日の方々への国籍条項と言いますか、就職差別の問題がどうであったのか、七〇年以前は出でていませんが、これはもう問題にならなかつたことであります。七〇年になりまして、日立製作所が在日である」とを理由に内定を取り消したパク・チヨンソクさんの事件がありました。これはパクさんが頑張つて裁判に持ち込んだ。それは日立という日本を代表する大企業の就職差別であり民族差別であるということで、初めて在日の方々の就職問題が公の場で争われ、問題はここにあるということが指摘された非常に注目すべき事件であります。

市町村で国籍条項撤廃の動き

七三年になりますと兵庫県阪神間の小さな市町村で国籍条項が撤廃されました。川西、尼崎、西宮などが一般事務職に在日韓国・朝鮮人を採用した。そしてそれから二十数年たつた昨年には、川西市で初めて係長、管理職の方が在日の方でござました。同じ七三年には在日中国人も立ち上がり大阪市の保母職に採用される。七九年には八尾市でも採用される。このようにして阪神間とか大阪府下とか比較的在日の方が多く、小さい市町村でまず国籍条項の撤廃が広がります。八〇年では大阪府下全体に広がつた。今、このことについて申し上げますと、都道府県や政令指定都市、つまり大阪、京都、神戸の様な政令指定都市には国籍条項があつて一般事務職にまだ採用されていません。ところが今言いましたような小さな市町村は、一般事務職にも採用されるなど小さい自治体ほど民族差別の壁を乗り越えようということになっています。（「京都市の国籍要件」表5参照）

それから八三年には在日三世の方が郵便外務員の受験を表明して粘り強い交渉が始まつて、そして翌

▲表3 在日韓国・朝鮮人の職業構成

日本人との比較

職業	韓国・朝鮮人 (%)	日本人 (%)	日本人との比較
医療・科学・専門職	2.4	1.1	約2倍多い
技術者	0.5	4.7	約1/9と少ない
教員・宗教家	1.1	3.5	約1/3と少ない
管理職(会社役員・商店主・工場主)	8.6	9.2	
事務職	23.5	18.7	
販売従事者	21.2	11.2	
農林漁業	1.1	9.2	約1/9と少ない
採石・運輸及び労務作業者	11.0	7.2	2倍近く多い
技能工・生産工程従事者	23.8	27.4	
サービス業	6.1	6.7	
有職率	25.2	47.7	約1/2と少ない
無職率	74.8	52.3	約1.5倍多い

「在日朝鮮人の人権キャンペーン」実行委セミナー
第3回報告集(1989年11月)より

↑ 総務省統計調査部国勢統計課
「昭60年国勢調査抽出速報集計」
1985年10月1日現在

法務省入管局「昭62版在留外国人統計」
1986年12月末現在

▲表4 年令別職種に関する統計

(注) 基計上その他は除いている

年齢 仕事	34歳以下		35~59歳		60歳以上	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
飲食店	8	4.7	6	6.4	2	12.5
遊興店	16	9.3	9	9.6	0	0.0
小売・商店	18	10.5	12	12.8	0	0.0
建設	16	9.3	7	7.5	0	0.0
運輸	8	4.7	6	6.4	0	0.0
製造業	27	15.7	27	28.7	6	37.5
教育・保育	24	14.0	11	11.7	6	37.5
医療	19	11.1	4	4.3	1	6.3
金融	25	14.5	7	7.5	1	6.3
不動産	5	2.9	4	4.3	0	0.0
公務員（上記以外）	6	3.5	1	1.1	0	0.0
計	172	100.0	94	100.0	16	100.0

全体では「製造業」が21.7%と一番多いが、年齢別にみると特徴がでている。「35~59歳」では「製造業」28.7%とやはり一番多く、次いで「小売・商店」12.8%、「教育・保育」11.7%の順となっている。「34歳以下」では、「製造業」15.7%、「金融」14.5%、「教育・保育」14.0%、「医療」11.1%、「小売・商店」10.5%の順になっていて、比較的ばらついておりあまり大きな差はない。

被雇用者	54.1%
家族従業者	11.8%
役員	8.5%
雇人のある業種	12.1%
雇人のない業種	13.6%

※参考資料 [1985年「国勢調査」、15歳以上外国人就業者数(全国)の国籍(韓国・朝鮮)、職業別分類より算出]

▲表5

■1. 職種別国籍要件

—京都市—

職種	国籍要件の有無
事務職員	有
技術職員	有
司書	無
精神衛生相談員	無
歴史調査員	無
学芸員	無
文化財保護技師	無
技能職員	無
電話交換手	無
調理師	無
業務職員	無
大学教員	無
研究員	無
医師	無
歯科医師	無

職種	国籍要件の有無
薬剤師	無
獣医師	無
診療放射線技師	無
歯科衛生士	無
保健婦	無
看護婦	無
理学療法士	無
作業療法士	無
臨床検査技師	無
栄養士	無
保母	無
心理職員	無
聴能言語訓練士	無
補装具製作技師	無

(1993.1現在)

■2. 職種別職員数と採用実績

職種	職員数 (人)	国籍内訳 (人)
技能職員	3	韓国2 北朝鮮1
業務職員	3	韓国2 北朝鮮1
大学職員	2	米国1 英国1
医師	2	韓国2
看護婦	4	韓国4
保母	1	中国1
小学校養護教諭	1	韓国1
バス運転手	1	韓国1
計	17	韓国12 北朝鮮2 中国1 米国1 英国1

92年度 採用実績1名(バス運転手) 91年度における採用者はなし。

◎参考：京都府 看護婦6名(89~92年度)
医師3名(89~92年度)

年には外務員、郵便配達員に採用されるようになりました。しかし国家公務員である郵便局の内務員にはまだ採用されていません。これは国籍条項がはつきりあります。

八六年には政令指定都市の神戸で国籍条項の違憲裁判が始まりました。同年、自治省が看護婦さんなどの三職、つまり看護婦さん、保健婦さん、助産婦さんの三職について国籍条項の撤廃をしました。それから、八九年には東京の杉並区、キム・チファンさんは給食係だった人ですが、給食係から一般事務職への転職試験を受験しようとされたんですが、国籍条項のためにいまだ阻まれていますので一般事務職への転職が実現しておりません。同じ区ですが、東京の場合、大きな区には京都の場合地方都市くらいの人口があります、つまり大きいところではまだなんですね。

一九九〇年、これは皆さん覚えていらっしゃいますと思うのですが、大阪市立大学のムン君という方が大阪市の一般職に応募しました。しかし門前払いを食わされました。そして裁判闘争の結果、大阪市は九一年に国際業務、経営管理業務というところだけは国籍条項はなくすることになったのです。ムン君は受験したのですけど残念ながら採用にならなかつた。なぜかと言うと経営管理とか国際業務いうのはかつこいいですよね、だから日本人がたくさん受けたわけです。だから結果的には彼にとつては門戸は形式的には開けたけど、まだそこだけという特定した事務ですからそこで採用されることにはならなかつた。

日韓覚書と在日問題

東京でも九〇年に武蔵野市が国籍条項を撤廃したという」とぞ、やつと市が足並みを揃えたが、肝心の東京の二十二区ではまだ残っています。九一年には日韓覚書というのがあり「在日の方々の就職、公務員の採用について日本政府が合理的な差異を踏まえた日本政府の法的見解を前提としつつ採用機会の

拡大を計る」とこう書かれた。ところがこれにより、この合理的な差異を踏まえた法的見解とは何だと
いうことをめぐって逆に締めつけがきつくなってしまった。この直前に大阪府は、一般事務職の採用をする
という方針を出したのです。「これがあつてから逆にその方針を撤回してしまった。それから教員採用に
ついては、今まで大阪市は正式教員として採用してたんですね。ところが今後は正式教員としてではなく
く常勤の講師である、つまり管理職になれない、教頭や校長になれないという、そういう枠付きの格下
げになってしまった、これは日韓覚書の合理的な差異を踏まえた日本政府の法的見解というのを日本の
政府に都合よく解釈し逆に在日の方の教員採用の枠を絞るというよなことになってしまふ。」のよう
に自治省の自治体への締めつけは逆にきつくなっているというのが現状です。

次にキムさんがおっしゃいました本名・通名の問題です。これは先ほどの九一年のこの調査の表です
けども、全体として見ますと本名のみ使用されている方が、五〇%、仕事上は通名、日常は本名と使い
分けている方は二十一%，通名のみ使用されている方が一九%である。そうすると一人に一人が本名で
ということになりますけど、実際にこの解説にありますように、この回答をした人が日常的に何らかの
民族的活動に関わりを持つ方が多かったのではないかと思われる。つまりこの調査はアトランダムな調
査ではなく、人づてに調査協力を求められたと思うので、そういう点ではかなり偏りがあるのであろう
と思われます。実際お一人の話を聞いたり、私が知る限りでも一人に一人が本名のみ使用というのはお
よそ考えられません。それから仕事上は通名で、日常は本名を使用と回答したものを持みると七一・五
%，比較的本名使用の定着度が高くなっている。これもそこまで言えるかどうかちょっと私は疑問に思
っています。その反面通名しか使用していない者も一九・九%もあります。(表6参照)

神奈川県の八四年の調査では、本名のみ使用、本名を使用というのは一一%しかいない。おそらくこの
あたりが私は実態ではないかと思います。それから通名の使用の理由ですが、「創氏改名以来仕方がな

▲表6 本名・通名の使用度

	男		女		全体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
本名のみ使用	72	47.7	61	53.0	133	50.0
仕事通名、日常本名	33	21.9	27	23.5	60	22.6
通名のみ使用	31	20.5	22	19.1	53	19.9
その他	15	9.9	5	4.3	20	7.5
計	151	100.0	115	100.0	266	100.0

今回の設問以外に、本名、通名とも仕事に関係なく使いわけているケースがあり、その頻度別に設問する方がよかったかとも思われる。

- ①本名のみと回答した者が50%もあり、回答者が日常的になんらかの民族的活動ないしは、関わりを持つ者が多かったのではないかと思われる。
- ②仕事上は通名で、日常生活は本名を使用と回答した者も含めると72.5%に上がり、比較的本名使用の定着率が高くなっている。
- ③その反面通名しか使用していない者も19.9%おり、まだまだ社会の厚い差別の壁と、それを反映した本人の意識を伺わせる。

※神奈川の調査：本名のみ使用+本名多く使用=12.0% 通名のみ使用=37.0%

い」というのが「四・三%」、「日本に住んでいるから」が「〇・六%」、「会社から強制された」就職差別に当たるわけですがこれが「四%」、「差別からの回避、本名を名乗ると差別されるので通名でいく」というのが「五・一%」この調査によりましても四人に一人がそういう回答になつております。通名を名乗つてゐる理由の中には「仕事上のトラブルがない」、「仕事に慣れてから本名にしようと思つてゐる」「まだまだ差別がある、差別がなければ堂々と生きたい」、自分の意志とは裏腹に困難な状況がある」ということを指摘しておりますが、こういう状況がますあるといふことです。（表7参照）

次に、会社または同僚が日本人でないことを知つてゐるか。これは就職されている場合で通名でいかれでいる場合です。そうすると「皆知つてゐる」が八五%、「会社のみが知つてゐる」が一〇%、これは履歴書を出していますね、「誰も知らない」一・一%、「会社のみ知つてゐる」と「誰も知らない」を合わせると一一%になる。ひた隠しに本名を隠すなどはどんなことであれ、自分の個人的などとを隠しているというのは辛いことです。これは無論、私自身も含めて、人に隠しておきたい、非常にそのことを人に触れられると辛い、そういうことを一番自分のアイデンティティの元である名前についてそういう意識を持たれるべきでない。そういう思いを持つておられるというのは、実際に隠すというとの辛さ、隠すものの身になつて、そわかると思うのですが、そういう問題が非常に強くあるといふことです。（表8参照）

住居差別の実態

それから最後に、在日外国人に対する入居差別の実態があります。最近、私のところに来ていた留学生ですが、その留学生が下宿した際に、在日の方に保証人をお願いされたのですが、それはだめだと断

われられた。日本に知り合いがないということでおれが保証人になりましたけれども、そのように保証人ですら在日の方はだめだということになる、それが今の現実であります。本人の学生は在日の学生でなく留学生なんですね、韓国から来た学生なんですがだめなんです。本人の場合の入居差別は非常に多くあります。これは不動産屋さんの統計ですが、ここにありますように家主から在日外国人を断わるようにおされた経験は全体として一〇%から三〇%がそういうことになっている。それから売買業務業者、不動産屋さんを通じてとなると、それが一〇ポイントくらい上がりまして三〇%から四〇%になる。これは不動産屋さんが意識しようとしたよまいと、家主の意識にかかわらず入居拒否を増幅させている例なんですね。そういうことが未だにあります。それもやはり仕事の差別と並んで人間の基本的な生活権である居住が制限されるということがあります。更にひどいのは京都の在日の方に聞いたのですが、在日本の方が住んでいた家だとアパートになると売る時でも値段が下がる、在日の方が住んでおられた家やアパートは売りにくいということすら現にあります。こういう厳しい差別的環境が、仕事と並んでもう一つあるというのが一つの問題です。

内なる国際化が言われる中で、定住外国人の方々の就職問題を根本から考え直さなくてはいけない。そしてそのためには在日の方々がまず自分達自身も皆で頑張らうじゃないかということ、「コリア就職情報」という雑誌が出されております。いろんな公務員の国籍条項の撤廃と並んで、民間企業への就職運動を積極的にやるうじゃないかという運動が高まりつつあります。こうこうひととも合わせて紹介したいと思います。

▲表7 通名使用理由

(%)は回答者に占める割合

	男		女		全体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
創氏改名以来仕方がない	16	24.6	10	23.8	26	24.3
日本に住んでいるから	14	21.5	8	19.1	22	20.6
会社から強制	9	13.9	6	14.3	15	14.0
差別からの回避	17	26.2	10	23.8	27	25.2
その他	17	26.2	16	38.1	33	30.8

会社の強制と差別の回避を合わせると39%に上がり、依然として生活実感の中で陰に陽に日本社会から通名を強要されている実態がわかる。

また、通名を使っている理由の中には「仕事上のトラブルがない」「仕事に慣れてから本名にしようと思っている」「まだまだ差別がある。差別がなければ堂々といきたい」等があり、自分の意思とは裏腹に本名を名のるには困難な状況もあることがわかる。

▲表8 会社又は同僚が日本人でないことを知っているか

	男		女		全体	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
みんな知っている	128	85.4	94	84.7	222	85.1
会社のみ知っている	15	10.0	13	11.7	28	10.7
誰も知らない	2	1.3	1	0.9	3	1.2
わからない	5	3.3	3	2.7	8	3.1
計	150	100.0	111	100.0	261	100.0

「会社のみ知っている」と「誰も知らない」を合わせると12%あり、韓国・朝鮮人であることを職場でひた隠しにしている実態が分かる。職場の同僚に対しても真の人間関係を作ろうとする意思がなく、職場は単に生活の糧にとのわりきりがあるのでないか。さらにいつも自分が朝鮮人であることがわかったらどうしようとおびえている光景さえ目に浮かぶ。

在田にとつての「民族」

仲尾 今回も前回と同じように、たくさんの方の質問、お意見、お感想をいただきました。感想についてはのちほどまとめて、大要を読み上げさせていただくことにします。

まずご質問についてお答えいただきます。一問一答は時間の関係で無理ですし、お一人がそれぞれの角度からお答えいただき、個別の質問については、それをお答えしていただきます。まず、金体の質問から申し上げまして、お二人への質問から申し上げます。「就職差別をなくしていくためには、企業に対しても行政に対して、在日韓国・朝鮮人に對して、日本人に對してどういった方法が考えられますか」、こういう質問がございます。そして「今年からの外国人登録法の改正についてどう思われますか」、「お二人とも民族性、民族のアイデンティティの重要さを指摘され、三世への民族性の伝達の難しさをお話されていましたが、お二人にとって民族とは何でしょうか」非常に哲学的な問い合わせでもあります。がこういう質問があります。それからこれもお二人への大きな質問ですが、「日本社会において在日韓国・朝鮮人が、民族的市民的権利を確立するのに最も大きな障害となっているのは何でしょうか」。これは日本側にあるという意味なのか、あるいはそれ以外に他の意味があるのかちょっとわかりませんが、ともかくにもそういう質問が寄せられています。もう一つは「一世と二世のギャップを埋めるものとして、一世の生活史や歴史を求めるることは観念的作業に過ぎないのではないか」という質問。それから「数多い具体的な就職差別に對してどのような所に重点を置くべきでしょうか」。お二人への共通したご質問がきいています。それからキムさん対して「大学院まで出られてその後も大変だったでしょうかが、常に勉強をなさつて力をつけられたハングリー精神がとても立派だったと思います。お子さんの話

しがありました。これから二十一世紀に向けて三世、四世の方々に民族心をどう植えつけていくか」とお考えか」。

それから林さんに対する質問は三点あります。「在日韓国人青年団活動は今も続いていると思います。理想は曲げずに子どもたちに受け継いでいきたいと思います」。分断された南北朝鮮の在日の生活との関わりは深いと思いますが、それが林さんへの具体的な質問です。「あなたは母親が日本人ということですが、なぜ母方の日本国籍を選択せずに父方の韓国籍に終わってこられたのでしょうか」。それから「在日本同士の関係の変化について、第三次産業が主になり、共通の話題がなくなってきたと言われましたが、それを防ぐためにどうしたらよいと思われますか」。いずれも大きな問題であり、共通する部分もあるかと思いますが、このあたりのところをそれぞれまとめてお話しをうかがいたいと思います。

私の人生の支え

金 有作 非常に大きなテーマの「質問をいただいたのですが、「何を今まで人生の支えとして、かつ在日三世・四世に対して、あるいは我々の祖国に対し何を期待し、希望して生きていくのかといいう質問をいただきました。自分自身の今まで歩んできた四十七年間の人生の中で、少なくとも今の職業を選択するにおいて、私自身を今日まで支えてきたのは、やはり小さい時から差別され、そのなかで植えつけられた反骨精神ではないかと思います。また、私自身の一つの信念ですが、「単に生きることが尊いのではない、真に生きることが尊いのである」。それぞれにとつて「真に生きる」意味は琴なると思います。しかし、私にとって真に生きるということとは、私自身が日本社会のなかで、いろんな難関や差別にぶち当たつてきた問題を真正面から受け止め、そして、それに立ち向かっていくことではなかつ

たかと思います。

韓国が現在の発展を遂げるに至つて、やはり祖国の発展が我々在日の地位、立場を向上させる大きなファクターであり、また二十一世紀を、在日の三世・四世が生きるうえで、在日のいろんな差別の状況を我々の仲間と共に社会運動として繰り広げ、そして我々が民族として生きる自覚を持つことが重要ではないかと思います。先ほどの「質問」もありましたように、私自身子どもを持つています。子どもの教育をどうするのか。現在、在日の九〇%以上の子どもが日本の小・中・高校に通っているのが現状です。

本名を名乗れる家庭環境作り

昨年、京都市におきましては、日本学校における外国人教育に対する具体的な方針案が出されました。その中でも示されましたが、小さい時の教育が一番重要であると。つまり日本と韓国・朝鮮の正しい歴史を学校で教え、また我々が両親から学んできたように、私自身は戦後生れですから戦争体験はあります。せんが、やはり在日の色々な問題を生活の中で我々の子どもたちに伝達し、それに対して正面から自分の問題として捉えるような教育をしたい。具体的に言えば自分の子どもたちの選択の問題になりますが、やはり本名を名乗つて生きられるような家庭環境なり、あるいは韓国語の勉強であり歴史の勉強であり、そして何より大事なことは、機会がある毎に自分の国に連れて行く、そして「百聞は一見にしかず」と言いますが、やはり自分の目で国を見て、そこで学び、考えることではないかと思います。

私にとって「韓国人である、在日である、民族である」とは一体何であるかというの非常に難しい質問ですが、先ほど申しましたけど、やはり在日として生きるということを学んだのは、私の父からです。私が高校生の頃だったと思うのですが、父といろんな話をしている中で、今、父は多分忘れている

と思うのですが、「私が死んだら自分の骨がらは祖国に埋めて欲しい」と言ったことがありました。

その時に私は一世の人々が自分の国に抱いていいる愛情、民族に対する愛情、情熱というものを感じました。在日一世の人ができなかつたこと、そして正直いって生活も苦しかつたため、学問とか、本当に学びたかったことも学べなかつたという状況であった。そういう一世の人達が苦労して日本の戦後の本当に何もなかつた時から今日まで苦労して自分達の権利を勝ち取ってきた。これをやはり正面から受け止めて、今、在日が抱えている様々な問題を自分自身が自らの問題として取り組む」と自体が民族として生きるということではないかと考えています。

コスモポリタン的な考え方がありますが、私は海外生活の経験もありますが、要するにパスポートを持たないと海外に出られない。海外に出ればキム個人の問題ですが、やはり韓国人としてどうかと外国人は私を見ます。その時に初めて自分は韓国人なんだ、コリアンなどと痛感させられます。海外へ出ればそのことを痛切に感じるのでないかと思います。

日本は我々に取つて外国ではあります、しかし日本に定住している我々にとっては我々の国でもあります。むしろ、韓国は私にとっては心の母国ではあるかも知れないけれど、生活そのものは日本であります。おそらく私は韓国に帰る」とはないと思います。

私も私の子どもも、ずっと定住外国人として、在日韓国人として生きていくでしょう。その時に日本人と同等の権利を要求し、勝ち取るといふこと、一九六五年の日韓会談以降、我々にとって重要な法定地位協定というものがありますが、その法定地位協定の中にある我々の権利は、日本政府から与えられるものではなく、勝ち取るものであり、九十一年問題、具体的に言えば皆さんもご存じの指紋押捺問題があります。この指紋押捺問題つまり押印を登録証になぜ押さなければいけないのか、我々は犯罪者じゃないのです。なぜ管理されなくてはいけないのかという素朴な疑問からスタートしていますが、その

根底にあるのは先ほども言いましたように、我々在日の組織が結束して訴え、政府に要求し、そして日本の良識ある多くの人々が闘つてきたからこそ勝ち得たものではないかと思います。

この意味で、九〇年代から「十一世紀に向かって、我々はこういった問題を日本人の人々と共に日本政府に訴え、そして勝ち取つてゆくんだ、奪い取るんだという視点があつてこそ初めて、在日の諸々の問題が解決できるのではないか」と思います。「外登法についてはどう思いますか」という質問がありますが、この事をもつて答えていただきます。

就職差別をどうなくすのか

また、就職差別をどのようにしてなくすのかという質問に対し、正直いって私にも解決策はありません。これは我々が運動を開いていかなくてはならないのですが、今まで在日一世の人達は日本社会の中で生活し、食べていいのが精一杯でした。しかし現在、我々、一世・二世・三世のなかには、いろんな分野で活躍されている学識者や専門家が多くおられます。数少ないですが、日本の一流の企業で技術者、研究者として働いていらっしゃる方もおられます。」」うう多くの学識ある人々が中心となって、そしていろんな分野で在日同胞自身が働ける力量をまざつこと。そして国際社会に飛び立つ力量を我々も持つこと。そして日本の社会の中で認められるように努力することが重要です。

その一方で民団組織とか、いろんな組織媒体を通じて、例えば日韓親善団体とか市民団体を通じて、就職差別の実態というものをアピールしていくを得ないでしょう。特にこのようなフォーラムを企画された京都市国際交流協会においても、公務員として在日同胞を具体的に採用していくべくよくな運動を自らしていただきたいと思います。我々自身は参加したくともその術すら与えられていない、権利は与えられていないのです。我々は日本人社会に訴え、そして日本の公機関に訴えることしかできない。

先ほど申し上げたように選挙権もありません、被選挙権もありません。そういう意味で、我々が選挙権を持つては我々の人権と在日の立場を本当に考えて政策実行される方を選びます。少なくとも私は「十一世紀を踏まえた基本的な問題である」と思います。

帰化するのではなく、在日韓国・朝鮮人として、京都市民として市政に参加する、府政に参加する権利、その中で我々の差別をなくす運動を具体的に政策として実行できるような社会を構築していくことが重要ではないかと思います。

仲尾 ありがとうございました。では林さん続いてお願ひします。

自分自身に自信をもつ

林 仁詰 いきなり抽象的な」とを言いますけど、人間にとつてその人一人一人にとつて一番寂しく悲しく辛いことは自分自身が自信を持てない、自分自身に対し人間としての誇りを持てないことだと思います。そして自分自身にどうしたらよいか、自分自身がどういうふうにしたら自信が持てるのか、これは具体的に自分のまわりにある一つ一つの困難とか障害を乗り越えていく、乗り越えられなかつたとしても、闘つていいくところの中에서도そういう自信は生まれないという。

つまり我々在日韓国人の場合で言えば、たまたまそれが民族差別であつたということです。つまり僕達が、僕自身が人間として自信をもつて生きていこう、自分自身が一個の人間なんだと胸を張つて生きていこうとすれば、その差別に向かっていかざるを得ないのじやないかと僕は感じます。

「なぜ日本国籍を取らずに父親の韓国籍にこだわっているのか」という問い合わせがありました。多分これで答えになつていると思います。我々の場合には具体的な差別がありました。一世の場合はもつときつかつたわけですけど、僕達一世の場合は具体的な差別に向かっていく中で、差別に対する抵抗とか、

差別の元になつてゐる日本の行政とか、韓国の政治体制と鬪うことで自分自身の誇りや生き方を取り戻していく過程がありました。今は生活条件も改善された部分もあり、具体的な差別もだんだん少なくなつて、差別がどんどん観念化して直接的には見えなくなつてきてゐる時代であるし、僕達と三世とのギャップが大きくなつてきていて、「生活史や歴史は観念的なもの過ぎないのですか」という質問があつたのですが、僕は観念的でいいと思うんです。その観念的な所を通じて歴史を勉強する」とによつて、現実の目を開いていく、自分が立つていきぎつかけとなればそれでいいのじゃないかと。そこからの出発から打ち勝つていく、それが僕は大切な」となんだと、いいにしろ悪いにしろ、本国から離れてから何十年も経つてゐるんですから僕達はそういう観念的な所からしか出発できないのですね。そこからもつと広げていくというか、つまり最後にも言つたんですが、現実との戦いを通じて、我々人間はこういうふうに生きていかなければならぬんじやないか。お互いの民族と民族との新しい関係を模索していく道が観念的であるから」そ、ある程度生まれてくるのではないかと思ひます。

民族からインターナショナルへ

次は具体的な問題になりますけど、僕は「統一」とかいう問題にはあまり興味がないと言つたらおかしいですが、手におえないことはちょっとできないものですから、いまのところは特に考えていません。

今、在日韓国人の世界の中でも具体的な問題があります。そしてそれは、我々在日韓国人が日本社会で生活している以上日本の問題でもあるんですが、いわゆる「老人問題」です。「一世と二世の問題である」と同時に一世と二世の問題なのです。それはもつと大きく言えば、この日本社会の問題であるし、老人と子どもをどうするかというのはもつと大きく言えば資本主義者会の体制の問題にもなるわけです。いろんな可能性をはらんだ、僕達が具体的に解決していかなければいけない問題が、今、日本社会の中で

韓国人を含む一般日本人の人達も含めていくつがあると思います。それらの問題を一人一人置かれた人が置かれた場所で解決していく、そしてそれをもつと観念的に広げていくという所で何か一つの新しい世界とか、僕は「民族からインターナショナル」という考え方を持っていて具体的な問題から普遍的な問題へという気がします。僕自身は今、そういうふうなことを考えております。

仲尾 ありがとうございます。

その他に一、三答えるべき質問がありますのでそれを報告します。

厳しい入居差別の実態

仲尾 まず入居の際の差別実態ですが、「地域的に片寄りがあるのだろうか、大阪、関西地区はどうか、関東地区では違うのだろうか」というお尋ねですが、今、これは控室でお一人とお話ししておりますと、先ほどの統計では四割くらいが入居差別の体験があるということでしたが、実際はもつと多いだろう、六割あるいはもつと多いだろうというのがご感想です。それから林さんのように東九条という在日の方が集住されている地区でも非常に多いというのが実態のようです。だから地域差が問題でなくして、なおかつ五〇%以上の入居差別の経験があるということは、無数にあると見てよいと、そういう実態があるということです。地域差というより、まず全体としての入居差別が多くなるというのが問題ではないかと思います。

それから学校教育については「人間は志願して」の世に生まれてきたのではない。だから人種や皮膚の色などによって差別されではないのだと思つ。このような観点から、日本の学校教育はどのように対処しているのだろうか。その現状を教えていただきたいと思います」これについては前回の「教育」というテーマでかなり具体的に日本の学校で、在日の子どもがたくさん来ている学校で教えておられる

先生からもお話を出ましたので、ちょっとそれを繰り返すのはどうかと思いますので「逆にどういう教育があるべきか」ということを皆様方の「感想の中から拾つてみたいと思います。在日の五十歳になられた女性からの」感想なんですが、「私自身一世で、相当の差別の中で今日に至ります。私の子どもたち、三世もですが四人います。中にはまつたく差別を感じずに成長した子、また小学校から差別された子どもがおります。話を聞くと子どもたち自身に意識はなく、その子の親から『あの子は朝鮮人だから仲良くならないよう』にと言われたと聞き、私は子どもたちにそのように言つ日本人の方が歴史を知らないから、もつと自分達日本人が朝鮮人に対し何をしたかを勉強するように言つてやりなさい」と言い、民族の誇りを持つように教えました」という感想がございます。

日本人が朝鮮人に何をしたか、日本の国家が、朝鮮半島に存在した独立した国家に対して何をしたのか、そのあたりの所が非常にころそくなっている、これが現実だと思うんです。それが学校で教えられない、親も正確な知識を持っていない。そして子どもたちにはあやふやな伝聞と偏見によつて差別意識が植えつけられていつていいる。この状況は基本的に変わつていない。それからもう一つ、では、どうしていつたらしいのかということで日本人の方の感想を読み上げてみます。

「金氏、林氏の経験をお聞きして、今の時代にこれだけ学歴のある方々に対し就職差別が本当にあつたということ、お子さま方に対して差別があつたということ。私どもは、ただ日本の土地に生まれ日本国籍を有しているというだけで、異文化の人たちに対しどれだけ優位なのかと情けなくなる。同一の中に違うものが入ってきて、また新しい、輝かしい時代が来る」と願つてやみません」大要「ういう趣旨の」感想でござります。

具体的な教育の視点を

つまり、私が思いますのは、日本の教育の中では一番欠けているのは、先ほどの「質問にもありましたように、例えば人種が違うということで差別をしちゃいけないとか、人間愛は国境を越えるとか言われておりますが、しかしながら一つの日本社会の中で異文化を持った人達が存在している人達がどんな歴史を持っているのか、そしてその人達とも一緒に共存していくかなくてはならないんだ、という具体的な教育が欠けているのだと思う。

従つて、親やその他の無責任な偏見や伝聞が、そのまま子どもたちの中に入っているというのが大部分の現状じゃないかと思います。その中で、心ある先生方が一生懸命「そうではないんだ」という教育をなさっているという」とですが、まだまだ努力に答えるような成果が上がっていない。その結果が、「この前も言わされましたように在日の子どもが三分の一、一分の一を占める学校ですから、通名を名乗っている子どもが非常に多い」ということに現れているのではないか、つまり本名で子どもたちが学校で勉強できない」という現状がある。

これが学校教育の現状じゃないか、これが日本の教育委員会、文部省を始めとする教育行政機関の責任でもあれば、現場の先生方に課せられた問題でもあります。私も短期大学ですけど同じような課題を課せられていると思いますね。そういうことをされほど正確に伝えていくか、在日の方の思いがどのようなものであるかといふ」とを伝えていくのが我々教育者・教育する立場の課題だと思います。

まだ他にもたくさん」「感想があるのでですが、在田三世の方の」「感想でもって締めくくつをさせていただきたいと思います。

「お一人とも大変」「苦労なさいたと思います。一世・一世の方が生きていくために尽力されてきたからこそ、現在の三世・四世が豊かな教育環境と生活環境を得られているのだと思います。心から感謝し

ております。今までには職業の選択肢も少なく自由に未来像も描けませんでした。現在でもまだまだ制限されてしまうと思います。しかしながらこれからは一つ一つの問題解決をし、日本社会に根を広げていく意味にも新しい分野に挑戦し、自由な未来像を描き、多様な人生を歩めるよう子どもたちに教育していく所へと思っている教育者の一人です」

一つ一つ胸を打たれるような感想です。大変つたない司会でしたが、一応このあたりで締めくくらせていただきたいと思います。

……第五回 「若者と将来」……

パネラー

李イ金キム
仁吉氏（在日二世・学校教員）
由美氏（在日三世・問題研究家）
仲尾宏氏（京都芸術短期大学教授）
コードィネーター

（一九九三年二月十四日実施）

第五回 「若者と将来」

第一 部

仲尾　皆さん今日は、寒い中をよつこそおいで下さいました。

全五回の最終回です。最初にパネリストのお一人にお話ししていただきます。その後、皆さまからのお一人に対する「質問」、それに對してお答えいただきます。最後に、五回フォーラムをしておきましたためと言いますか、要約のコメントを私の方からさせていただきます。

それではパネラーの金仁吉さん、李由美さんの紹介に入りたいと思いますが、まずはお一人にそれぞれ簡単に自己紹介をお願い致します。

金 仁吉　皆さん、アンニヨンハシムニカ。私は現在、京都の韓国人の民族学校で教員をしております。私の自己紹介は後ほど話しの中に織り混ぜていきたいと思ってますけど、一つだけ私の特徴として今日とらえてほしいのは、私は一世ですが母親が日本人で父親が韓国人。そういう状況の中で民族教育に現在取り組んでいると、そういう視点から私をとらえていただけたらよろしいかと思います。今日はどうぞよろしくお願ひ致します。

李　由美　五回にわたるフォーラムの今回は「若者と将来」ということですが、今回のパネラーの中で、私だけが三世で、両親が日本で生まれ育っているという中で生きております。このパンフレットには、在日三世 在日韓国人問題研究家といふすごい肩書きをもつておられるんですけど、本職は英語を使って英会話講師、翻訳の仕事をしております。

在日として生きていく時に私が仕事や留学で、自分がどう在日であるべきか、とか問題にどう取り組

んでいくべきかでいう、そういう視点が海外留学経験で芽生えてきました。それも私の話しおなかで色々話していただきたいと思いますので、今日はよろしくお願ひします。

仲尾 ありがとうございました。

それでは本題に入つていただきますが、今日のテーマは、「若者と将来」ということになつております。お一人ともまだ若いです。金仁吉さんは一世、李由美さんは二世という立場ですが、自身の今までの学園生活、あるいは仕事を通じて、特に金仁吉さんは韓国学園で教えていらっしゃいます。これから三世・四世の若者の将来、そういうことについても思いをはせていらっしゃると思いますので、そういうあたりを含めて、お一人から、体験と意見をいただきたいと思います。

では、李由美さんの方からお話をうかがいます。

「生き方が」つぶされる思い

李 由美 今日は専門的ないことは抜きにしまして、日本に生まれ育つてきて、たまたま在日に生まれてきたという生き立ちを含めまして、おつべばらんに話しながら私なりにこれから日本の社会がどういうふうに開けていかなければならぬかというお話を聞いていただきたいと思います。一方的な話しさはしたくありませんので、是非私の話を聞いた後、質問なり聞いてみたいこと、討議してみたいことなど、どんどん用紙に書いて下さい。生き立ちを話す時に、やっぱり辛い経験をしてきたこともありますので、心を開いてお話ししますので、どうぞ皆さんも心を開いて聞いていただきたいと思います。

生まれ育ちは京都なんです。天の橋立という本当に自然の美しい所で生まれ育ちました。本名の「」とは後でお話しますが、ずっと通名で、小学校時代は本当に山あり海ありの所で駆け回っていました。そういう小学校時代でした。特に自分が他のクラスの友達と違うとか意識はなくって、たまに法事でお

ばあちゃんの家で食べる物だとかが友達と違うかなと、それくらいの意識しか持つておりませんでした。その後、家族で京都市の方に移ってきて、今までの生き生きとした私の生き方がつぶされてしまふような生活が待ち受けていたわけです。それはどういうことかと言いますと、私は市内の中・高・大学と通つておりますが、中学の時に仲の良いクラスメートなんかが、嫌なことがあつたり、見たり聞いたりした時、また人を威嚇する時に「この朝鮮!」という言葉を投げかけるわけですね。「朝鮮みたい」とか、「朝鮮人みたい」とか、漢字を思い浮かべていただきますと、朝鮮というのは朝に鮮やかなというすゞいきれいな響きを持っている言葉なのに、中学校高校時代、嫌なことがあるたびにその言葉を投げかけてくるんですね。

当時はずっと通名を使っていましたから、そのことを知っている友達は本当に少なかつたです。当時は隠すのが精一杯でした。元々性格は活発な方なんですが、表面はすこく活発にしているんですが、何か心の底でだんだん重いものができていって、中学・高校をそういう状況で過ごしていきました。スポーツが大変好きなので中学・高校とバレー・ボール部に入つていきました。高校の時も同じ練習に打ちこんで一緒に汗を流す友達なんかでも、何か嫌な事があると、「朝鮮みたい」と言い、その時には自分の中で何かやりきれない気持ちになつて、だんだん部活に行くのが嫌になつて、結局やめることになるのですが、退部した後も後悔もしなかつた理由があります。それは、続けていても団体に出られなかつたのですね。高校は公立の北嵯峨高校に行きました。北嵯峨高校は何年か前に野球で甲子園へ出て有名になりました。当時もバレー・ボールは府下三位で、本当にスポーツに力を注いだ高校時代だったんですがその高校時代に、一生忘れられないことが一、三回、起きています。

ここに来ておられる在日の方は経験があると思いますが、十六才の時に外国人登録証というのを持たれるようになるんですね。持つて来ているのでお見せしますけど、当時自分が外国人と意識したこともないのに、わけも分からず外国人登録証というのを持たされる」とことになります。その時にはもう居たまらない気持ちでした。指紋なんか別にいいじゃないかという声をよく聞きますが、日本では指紋を捺すのは犯罪者のみなんですね。今回それが廃止されるということになっていますけど、つい最近までそういうことが行われてきました。

私はスポーツが大好きで、体育の教師になるのが私の夢だったんです。高校三年の時、体育大学を目指していたのですが、その時に聞いたこともない「国籍条項」、韓国・朝鮮人国籍により教師になれないとことを姉から聞かされました。今だからこそ笑顔で当時のことを語れるんですけども、当時は、どうしようもなく毎日泣き明かすという状態でした。先生にも一回相談したんですけども、どう対応していいかわからない。家族なんかには言えません。子どもっていうのは、自分の中で消化しようとして、親にはなかなか自分の体験したことを言いたくないという気持ちで進路に迷いました。スポーツしか好きじゃなかつたですから、他にどんな道があるのかなと。その時にたまたま英語もやっていたもので、そしたら国際的にいつてやろうじゃないかということで英文科に入りました。とにかく英語をものにして何かをしたいという気持ちで勉強しました。英語にもだんだん自信がついてきてはいるんですけど、いざ就職する時になるとまたとにかく能力でなくて、韓国人であるがために一般企業も就職課に無理だろうと言われあきらめてしまいいます。

母國で感じる疎外感

その後、アルバイト生活がしばらく続いたんですが、たまたま大韓航空の乗務員を募集している」と知りました。当初は「差別される日本なんか嫌だ」という気持ちがあり、おじいちゃん、おばあちゃんが来た韓国に行ってみようと思いました。

いざ行ってみると、日本で生れ育った在日三世ですし、母國語も日本語で友達関係も文化なんかも日本なんですね。向こうに行くと「やっぱり私は韓国人ではない」という気持ちの狭間でどうしたらいいのかと、すごく疎外感を感じるというかそんな気持ちでした。

スチュワーデスという仕事は、なかなかきついのですが、飛行機の中にいるときの自分や、空から見ると国境がない世界への思いがすごく新鮮でした。なぜこんな形式的に国籍や民族区別されなきやいけないのかと感じて、その時から本名を名乗るようになりました。在日韓国人として本名を名乗って生きていくということでは、私が在日を始めてまだ十年足らずで十歳にもならないんです。大学時代にふきれたことがあるんですが、それは在日の学生達が韓国に行って母国の言葉や歴史を学ぶという研修旅行に参加し、初めて韓国に行つてきました。

みんな普段は通名でいっているものですから、在日の90%以上は初対面でした。ところが、その旅行でたまたま大学のクラスメートがいたりして、「へえ韓国人だったの」っていうか、それまで公立学校へ行つてますから、特に在日の歴史だと日本との近代史はさらっと流す程度で自分自身も分かつてなかつたんです。韓国に行って、別に差別されるような国でも、人間でもないという思いと自信が初めて湧いてきたのと、その後のアメリカ研修旅行の影響もありました。

米国と日本社会との違い

アメリカという国は皆「なんも」存じだと思しますが、多民族であります。向うに行つた時に、韓国人、日本人、中国人という、その民族で捉えられるのではなく一つの大きなアジア人として、ASIANとして捉えられるんですね。その時に自分が住んでいたり、生活したりしているとその社会が見えなくなるのですけど、高校時代にも色々何か見えない傷を受けてきて、生れ育った社会から自分をちょっと離してみると、アメリカでは、「日本社会に対するやうな」とが見えてきたのです。アメリカにいる時は、向うが日本人であれ韓国系であれ生き生きとしている。名前を隠すなんてもってのほかだし、民族は何であってもそここの社会の構成員であり、市民として生きています。初めてリ・ユニと、スムーズに本名が使えた時の解放感というのは、今まで心にたまっていたものの中に本当にすっと穴が通つたようでした。

皆さん名前はお持ちですね、名前っていうのは自分のアイデンティティを確かめる第一番の原点だと思つんですけども、在日の私達は本名を名乗つて生きにくい、この日本社会で生きてます。本名を宣言する、「宣誓」という大変なことになりかねないので、本名宣言をする時には在日の友達でも足ががたがたぶるえたり、泣いてしまつたりした人も多くいます。本名を名乗ることが何でこれほど難しいのでしょうか。これは本当にまだまだ日本社会が、隣人である私達に本当に開かれていないという物差しにもなるんだと思うんです。

その後、色々海外旅行をしたり、スクワードレスとか留学をして差別ということ、そして自分に対しても、これは逃げては通れないのだと、しっかりと直視して何が問題なのかということを自分なりに整理をしておおした。

日本の差別の特異性

在日と一言でいっても、金さんのようにお母さんが日本人である方だと、まず世代の違いがあります。不幸な事に政治的に北とか南に分かれてしまつ」とになりますし、友達の中には帰化している人もいます。どこの範囲が在日韓国・朝鮮人なのかなど」とは多様化されていますので、私の話もある在日三世の話し」ということで聞いていただきたいと思います。

先ほども言いましたように日本に戻つて来て、色々な国に行きました。よく見ますと、差別というの人は間社会がある限りどこにでもあるんだということが見えてきます。ただ日本の差別の特異性というのは、この先進国の中の諸国を見ても特異性が見えます。それはどういうことかと言いますと、制度化されているのです。

私の祖父母は臣民として日本に渡つてきているわけですね。歴史的背景がありながら日本に三世代、四世代住んでいるにもかかわらず、「外国人登録法」や「入管法」といった制度でもつて管理されてしまいます。そして政府が制度化してしまうと、一般企業もあからざまでも在日韓国・朝鮮人を排除してしまう。一般社会においても政府や行政がそういうことをするのために、本当は行政なんかが差別に対して立ち上がりいかなければならぬのに、差別が世間の常識みたいになつてゐる。最近はいろんな市民運動がありますから、状況は随分変わってきていますから、私も希望を大きく持つております。

アジアに対する蔑視

日本で生きていて感じるのは、アジアに対する蔑視や軽視は小学生から始まつてゐるんですね。一度小学校でも一年程クラブ活動で民族講習したことがあるんですけど、京都は文化都市、国際都市と言われていますけど、同じ外国人でも西洋人に対しては羨望の目で見てしまふ。同じアジア人なのに軽視し

てしまふ。その一番いい例が、京都のスタンフォード大学日本センターでは、多くのアメリカ人学生が学んでいますけど、あの学校ができる時には日本の企業が誘致しているんですね。資金なんかを出して「ぜひ日本に来て下さい」ということでした。

一方、金先生が教鞭をとつていらつしやる韓国学園が当初、東山に建設ということになつた時、誘致どころか地元で反対運動が起つてゐるんですね。在日の子どもが京都に生まれ育つて、民族の学校に健全に学びたいという姿勢があるので、そういう学校建設において地元でまず反対が始まつてゐる。これはアジアに対する、隣人に対する蔑視であり、否定的なイメージでとつてしまつてゐる。西洋に対しては憧れで見てしまふ。まあこのギャップをとにかく小さい時にとつていかなければ、だんだん助長されしていくのではないかと懸念しているのです。

色々と問題がおこつた時に、れき然とした民族差別があるんだということを、在日、日本人に聞わらず、まず直視していかなければならない、と私は強く感じています。やはり私がこのように呼ばれてお話しするのも、敢えて運動をやっていくのも、自分が高校・大学時代に味わつた気持ちを一度と次の世代に味わせたくないと思うのと、やはりそれは在日だけの問題ではなくて日本全体の問題として、いかに共に生きる人間として、学び、働き、住んでいくのか。その中でいかに自分が同じ人間、同じ隣人に対してどれだけ多くの豊かな心で、もつて対応していくのかということを、今、日本は問われていると思つてゐます。

民族差別に関して言ひますと、私が先ほど言ひました就職差別もそうですが、あからざまに韓国・朝鮮人はダメです、とは言ひません。私が一回経験したことをお話したいと思います。英語関係でたまたま翻訳・通訳の仕事が入る時があります。京都は織物でも有名ですから、何年か前に国際会議場での通訳コンパニオンに応募したことがあります。面接の数日後、採用の連絡がありました。ところがその時

の面接官の答えが、「本当だつたら韓国人は雇わないのですが、今回は例外なんです」と言つたのです。そして私はどう答えたかというと「ありがとうございます」と言ってたんです。電話を切つた後、何か嬉しいんだけど何か俯に落ちないんです。知らず知らずに自分が韓国人である」とを卑下して、人格を踏みにじられるようなことを言わねながらも「ありがとうございます」という言葉を出している。「ういうことは私だけでなく他の友達も経験していることです。

歴史を直視して未来をみる

人間が大人になつて生きしていくためには、仕事を持つて自分で家族を養うこと、そして住む所がいります。私は今、親元を離れて住んでいるのですが、アパート探しは外国人にとつては非常に厳しい状況です。ついこの間も新しいアパートを探していたのですが、「とにかく外国人はダメだ」と言つたのです。なぜかと聞くと「大家さんが言葉が通じなかつたら困るから」というので、私が三世で日本で生れ育ち日本語が母国語だということを説明したら、次には「食べ物が違うので困ります」と言つたのです。「私は民族の物を食べる時もありますが、それがどう迷惑をかけるのですか」と言つと、向こうも対処できなくて、「いや、私達はいいんですけど大家さんがちょっと困るので」という調子でした。他の先進諸国を見てもらえれば分かりますが、差別撤廃法とか入居差別撤廃法という法律があるのです。民間レベルでも個人レベルでもそういうことをすると処罰されるのです。日本だと差別されても黙つておくしかな
い。

昨年、いとこが結婚して新居を探す時にも十軒回つて一軒も扱つてもらえなかつたのです。皆さんは、どう思われますか。これから希望をもつて新しいパートナーと住もうと思つた時に、まず住む所が決まらないという実態。色々お話しすると三十分では話しきれないです。私も若いと思つてしまふし、これが

ら未来を見ていきたい、その時にやはり歴史を直視しなければならないと思います。私も戦争を知らないし、他の人もそんな昔のことを掘り起こしても仕方ないのでないかという方もいらっしゃると思います。

しかし、在日が「」で生きているといふ」とはおじいちゃん、おばあちゃんが強制連行、土地調査の形で土地や自分の家を取られてやつて来たという経過があります。そしてその中で慰安婦の問題や戦後補償の問題が放置されたまま、痛みを癒されないままになっているのです。それは決して遠い所の話ではなく、ここ京都でもあるのです。宇治のウトロ地区には、戦前に労働力としてたくさんの朝鮮人が渡つて来られました。そこには三百八十人が住んでいる家族コミュニティーがあるのです。ところが土地の転売が行われ立ち退きの裁判が行われています。「」とを直視しないで未来を見ようとしても、「若者は手をつないで未来志向に生きていましましょっ」と言っても、現在、入居差別や就職差別があるところなどを直視しなければ無理だと感じます。

自分を大切にして

今、しっかりと問題を解決しておけば、私達の次の世代は、もう少し生きやすいと思いますね。だからこの現在、過去、未来という切り離せない関係を我々若者が、どう捉えていくかを私は在日の立場で見ていきたいし、日本の方は社会の問題として捉えていくともうえたらと思ってます。日本人、在日にかかるわざ私達は日本に生れ育ってきたんです。本当は、「」の日本という国を愛するべきなんですね、愛するべき国なんですよ。そうなつていくには、やはり皆一人一人がもう少しゆとりをもって、もつと自分をもう少し大事にして隣人のことを考えていくことが必要だと思います。

自分を大切にしてと言いましたのは、日本の社会がタテ社会と言われてますけど、まず一人一人が疲

れているんじゃないかと思うのです。英会話を教えている関係上いろんな生徒さんがクラスに来られます。私はただ語学を教えるだけで満足しているのではなくて、英語という言葉を通して、手段として色々な人と友達になって、いろんな民族、文化を持っている人と本当に心と心で通じ合える。言葉とはそういうふた素晴らしいものを持つていてると思います。

授業で趣味の話をしてた時に、若い子から大人の方まで真剣な顔をして「寝ること」だって言う、「ぐっく多いんですよ。これが何を物語っているのか。教育なんかも詰め込み教育で人間教育なんてまだまです。知り合いの先生で現場で一生懸命やつてらっしゃる方がおっしゃつてましたが、受験戦争に追われて、「まず寝たい」と子どもたちが言う。夜十時くらいに大阪から仕事で帰つて来ますけど、電車の中で鞄を持った子どもたちが寝ているんですね。大人の人達は長時間労働で疲れて、睡眠もとれなくて自分を大切にできない人達に、「在日のことを考えて下さい、他の人のことを考えて下さい」と叫うのは無理ですよ。

広い心で違いを大切にする

一世の方達は労働力でもつて日本にやつてきました。食べていいくのが精一杯だったんですね。一世である私達の親の世代はまず私達に教育をくれました。だから今、本当に親に感謝しています。この三世、いわゆる二十代から三十代にかける私達若者の次の世代に何をあげられるのか、私は先ほどから言ってますように人間の権利ですね、もちろん就職差別、入居差別なんてなくて当たり前のことです。もっとと広い心で違いを大切にできる、違いを持つたことをチャンスだと思つて何か面白いこと、新しいことが学べるのじゃないかと、そういう前向きの姿勢を我々は培つていかなればと思ひます。

最後になりますけど、決して忘れちやいけない」とは、日本にいると見えなくなる」とが私もありま

す。でも今私が着ていい物にしても、どこにある机にしても、どこの国の人にお世話になつて作つてもらつたのかも知れないし、どこの国の輸入物かも分からぬ。どかでいつも相互移動してお世話になつてゐる」とがあると思うのです。目に見えないそのお世話というか、お互いに相互依存してこの地球は成り立つてゐるのだと思います。

「若者と将来」という時にもう少し幅の広い、みんな地球にいる人、お世話になつてゐるんだ、という感じでこれから生きていつたらいいんじゃないかと思います。本当はもうとお話ししたいのですが、とりあえずここまでにしました。また質問とか聞きたいことがあればぜひ紙に書いて後で出してみて下さい。ありがとうございました。

仲尾 ありがとうございました。

在日二世として、過去、現在、未来をどうつなぐといふところが非常に具体的な」体験をお話しいただきました。それでは次に金仁吉さんにお話しをおうかがいします。

人格が尊重されない社会

金仁吉 皆さんは日本という社会がどんな社会か、「自身で考えられたことがあるでしょうか。私は日本は面白い社会だと思います。どういうふうに面白いのか、僕は外国に行つたことはありません。日本と韓国しか知りませんけど、違つた文化を持つてゐる人に触れ、感覚が研ぎ澄まされることによって日本という社会が変わつた社会だなど最近つくづく感じます。個人の意志よりも社会的な規範、社会で一般に言われてゐる通念のようなものが優先して、個人の人格がいまいち尊重されない社会だなあと思います。

特に私の勤め先でもある韓国学園という民族学校の現場でも、土台には日本の通念、日本の常識が私の学校にも影響しています。学校がこういうふうに決めたんだから、世間では、こういうふうに見ているのだからそれに合わせなさいというのが一般の常識です。日本の社会への国際化の波に対して一番の壁といふのはまさにこれじゃないかと思います。「世の中が」こうなっているんだから仕方がない」。この考え方にはまさにこれから私達在日韓国人が生きていこうとやでの一番の壁は何かといえば、「皆がやっているから」「自分だけ違うのは嫌だ」、「仲間はずれにされるのは嫌だ」ということだと思います。

これは日本の歴史の上で培われた土台かも知れませんけども、私達がそういうふうな部分で、そういう感覚を受ける立場でも最近つくづく感じられます。例えば、ちょっと失礼かも知れませんが、こういう場所で話しを聞く場合の態度について、日本という国では、聞く姿勢とか、手の位置とかそういうことにしてもすぐ気を使って、本来のその人の心の中身を大事にせず、見ようとしたいような風潮があるんじゃないかと思います。

少し話しがそれましたが「若者の将来」ということを考えた時と、学校の教師という私の職業から考えていいきたいと思います。

二つの面に絞つて話したいと思います。ひとつは我々在日外国人の結婚問題と、もう一つは私が取り組んでおります「子ども会」についてのお話をする中で少しでもそういうことを感じていただけたらと思います。

在日本と日本人との結婚問題

先ほど李由美さんの方からいろんな障害があるんだというお話しがありましたので、私は「この社会は、日本という社会はまんざらやないな」という、希望を持った角度からお話をさせていただきたい

と思います。私自身が李由美さんと違つて、差別らしい差別は今まで受けたことがありません。まわりに大事にされながら、」」まで頗調にきましたので、私自身はこの日本と韓国の社会の間で、大変幸せな三十年間を今まで過りして、これたという実感がありますので、決して負の社会ではないと思ひます。

在日外国人にとつての結婚問題というのは、否が応でも自分の立場と周囲とのからみではつきりと分かつてくるという大きなイベント行事になつてくるわけです。ここにI君という日本人とKさんという韓国人の女性がおります。一人は三月六日に結婚することになつています。I君はちょっと変わった日本21人で、性格も粗野でぶっきら棒な所もあるんですけど、受けたものを100%自分のものとして吸収しようとする、柔軟性を持った日本人の青年です。Kさんは、私達在日同胞の中で組織しております民団の青年部で頑張つてる女性なんすけども、I君も私と幼なじみという関係で、日本人でありますから在日同胞の社会の中にどっぷり浸つております。

そういう縁で二人は結ばれたんですけど、約一年の恋愛期間のなかで結婚という具体的な問題を突きつけられた時にいろんな壁がありました。まずKさんの方はちょっと事情がありまして、おじいさんとおばあさんはずっと育てられました。おばあさん、おじいさんは彼女をものすごく愛しております。相手が日本人ということに対し、おばあさんは自分の孫が幸せになるのだつたら関係ないんじやないか、幸せにしてくれるんだつたら嫁にいつたらいと賛成してくれたのですが、おじいさんは日本に徴兵でこつちへ連れて来られた経験があります。日本人のI君を呼んで「わしはお前が嫌いではない、そやけどお前の後ろにひつといふものがわしは嫌なんだ」、何がと言ふと日本人が嫌だと言つうんです。「人間としては受け入れられるけど君の肩書きである日本という国によつて大変辛い思いをしたのだから、私自身がまだ納得できない」ということを突きつけられました。

I君自身も国籍の違う女の子を嫁にもらつにあたりまして両親が反対しました。韓国人であるからだ

めだという意識よりも、息子を試す意味でそういうふうに言われたような所があつたことが最近分かってきたのですが、その時は「とりあえず、韓国人の子はやめてくれ、親戚に申し訳ない。結婚するんだったら籍を抜いてくれ」と言われました。その後、一人はものすごい葛藤のうえ、家を出る覚悟でアパートを捜しに回りました。ところが、不動産会社に行くと戸籍を出してくれと言われます。「奥さんに戸籍はありません、外国人登録証明書しかないんです」という話になると、「ちょっと遠慮してもらいたいのですけど」ということになり、アパート何十軒、何百軒、何日も何日もかかつて回つてもなかなか入居のめどが立ちませんでした。

周囲の眼との闘い

一人が結婚するにあたつて色々周りで心配する声もありました。我々、在日同胞の立場としても二人が何とかうまく添い遂げるよう頑張つてみたいという気持ちがあつたんですが、二人は追い詰められているものですから心に余裕がありません。その中で友人関係にひびが入つたり、せつからく心配してくれる気持ちをお節介という形で受け止める時期もありました。そんな状態がずっと続いたんですけど、I君にとってはKさんは自分にとっての生涯の伴侶と決めていますから、そんな苦痛も受けていかなければいけないと、必死で耐えてきました。

皆さんは「存じないかもしれないんですが、在日韓国人の結婚は、すごく難しいんです。我々の文化の中ではこれは恥の部分なんですけども、いまだに地域感情というのが残っています。日本でいうと何々県ですね、県が違うとものすごく仲が悪いです。済洲島の人には済洲島同士でないと結婚しないとか、それに加えてもう一つ、占いを非常に好む性格があります。干支が合わないからだめとか、その人の人格なんかまったく無視して関係ありません。それだけで縁談がつぶれてしまうという可能性もあるので

す。在日韓国人も日本の広範域に住むようになりましたので、相手に巡り会う機会が大変に少なく、さらにいろんな事情を持ち、「まれた時に、自分が意中とする人と結ばれる可能性がどんどん低くなっています。

僕は一君に対して、「両親がきわどく参加して、祝福してもらえるような形でするために最後まで努力しないかんやないか。どうしても結婚を諦めないのだったら最後までお父さんに式に出席してもらえるように頼みなさい」と言ったのです。結局、最後に二人はもう一度彼のお父さんに所に最後の勇気をふりしぼって行きました。ところが意外なことにお父さんは、できる限りのものなしをしてくれたのです。韓国ではお客様に対しても「おなか一杯食べてもらうのが最大の礼儀なのです。私はその話を聞いた時に、この日本人の親は大変國際感覚に優れて人間を評価する立派な親なんだなあと、いうので驚いたのです。それまでは僕たち在日韓国人のことについてもよく認識してもらつてないのじやないかなと、少し悔しさとか苛立ちもあつたわけですが、それを聞いて、もうこれしかない、これにつきると思つたんです。まだ親戚との関係や周りからの眼と闘つていく心の準備に少し時間がかかるみたいですが大変肯定的に取り組んでおられる姿を間近に見られて僕は大変良かつたなあと思っています。

未来に夢をつなぐ

話しさは変わりますが、私自身が今、左京区で「子ども会」というのをしております。なぜ、「子ども会」をしているのかといえば、やはり若者の将来というのを考えたうえで、私達ができる最大限のことというのは、未来に夢をつなぐことだと思っています。

私達、在日韓国人は受け身の姿勢でいると思います。日本の社会や風土が変わってくれないと、私達が恩をする場所がないという厳しい現実です。ただ、そういう状況のなかで、変わるもの待っていると

いうわけにはいきませんので、今、自分達ができる限りのことをはやつておこう、未来のためにそういう種だけはまじとおこうというのが、まさに「子ども会」の大きな目的だと思います。

「子ども会」を取り組んでいく中で、子どもたちの会話を聞いていると、在日韓国人社会が見えてきます。子どもの言葉や発想から親の姿が見えてきます。子どもは本来、真っ白なものだと僕は思っています。子どもの会話を聞いていると学校生活の上では差別された子はほとんどいません。日本の社会もこれから子どもをうまく育てれば、そういう差別意識もどんどんなくなっていくのではないかと思います。私の学校もそうですが、子どもたちは愛情をたっぷり受けていないなあ、という印象を全体的に受けています。苦労して食べることに精一杯で教育に関心を持てない一世を親に持った二世の世代は、ある意味で親の犠牲としてほっておかれたという部分があると思うのです。愛情が足りないものですから、その子どもは自分の精神を維持するために変な固執をしている部分があります。僕も二世の子どもたちを扱っているのですが、非常に心に壁を作っています。突っ込んだことを言つとものすごく反発をするという部分で、うまく言えませんけど愛情をたっぷり受けていないんだな、というのをひしひしと感じるのであります。

人格形成期に充分な愛情を

そういう意味で小学校、幼稚園、情緒や人格を形成する時期に親や親戚以外の人からたっぷり愛情を受けることはものすごく大事だと思うんです。その子が広い視野でこれから物を見ていくようになるためには、やっぱり一番大事なものとして人間から愛情を受けることやと思うんです。将来そういう大きな目で物事を見られるようにするために、子どもの頃から民族的などハングル文字、歴史を教える」とも大事かも知れませんが、私はこれに主眼をおいていません。

今、いる子どもにたっぷりと愛情をかけてあげたい。大人から愛情を受けた子どもはきっと自分達の子どもにも愛情をあげられる、そういう目的を持つて将来に夢を継いでいくというような形でおせていただいています。

日本という社会は何もしなければ、何も感じる事はできないと思っています。ただ反対に何か行動を起こした時には必ずそれに対する反応があります。

八十五年だったと思うんですけど、私の母親が指紋押捺拒否をしました。報道されましたので色々な反応がありました。家には脅迫状も一通来ました。「京都の川には蓋がない、外に外出する時には気をつけなさい。お前は元日本人のくせに朝鮮みたいな卑しい國の奴と結婚して裏切った大惡党である。今後、命の保障はされない」と書かれていました。名前も書いてあるんですけど、たぶん嘘の名前なんでしょうね。それとは反対に模造紙五枚分くらいつなぎ合わせた大きい紙に大激励文が届きました。

「あなたのやっている」とは大変勇氣のある行動である。私達はこの一枚の紙に託して、あなたを支持する」。

折ることと育てる」と

おふくろは、もともと猪年で猛突進の性格でぶつかるまでやらないと分からない、そういう性格でもあるんですけど、父親は母親のことを大変愛しますから、その脅迫状を見てものすごく足がすくんでしまいました。差別をする人と、激励してくれる愛すべき日本の方もおられるということです。私達は「折ることと育てる」と、この二つをやっていくしか私達の生きる道がないということ。「ういうふうに理解を示していくだけの日本の方々、集まっている方々を通じて、いろんな人の心中をお互いに理解し合えるような文化が、この京都の地を中心どんどん花咲いていく」と願って

おります。先ほど結婚問題に関して紹介しましたI君とKさん実は「」に来て います。I君、飯塚要さん、Kさん、イ・イムジさんと言われます。どうか皆さん祝福の拍手をよろしくお願ひします。
私の話は「」まだなさせていただきます。どうもありがとうございました。

第一部

仲尾 今回もやはりたくさんの方の意見・質問をいただいております。それぞれお一人への具体的な質問項目についてはお二人から答えていただきます。そして「」意見あるいは決意表明のようなものが何通かござります。まずそれを最初に読ませていただき、それからお二人への質問とお二人からのそれに対する回答をしていただきたいと思います。

まず最初に「私はすつと日本学校に通つてきました在日三世です。今まで民族教育に触れる機会がほとんどなかったので、民族学校、民族学級特に興味があります。ながら民族学校については思想的な教育が根強く、私はこれに疑問を感じます。今日、愛情を育てるという『子ども会』の方向は、民族教育の側面しか知らないかった私にとってとても新しいものでした。できれば詳しくお聞かせ下さい」これは主に金先生にお答えしていただきます。

「私は日本人ですが若い頃に、相手が朝鮮人だから喧嘩するといつ」とよく聞きました。私は、そういう考え方の方が現在もいるように思います」。それから後は「意見ですが、「在日韓国人・朝鮮人問題について関心を持ちながら、在日の人が、日本社会におけるどのような生きにくさを経験しているのか、具体的に今までよく分かっていなかつた。まだまだ在日韓国・朝鮮人問題について無関心な日本人がたくさんいる。自分自身も在日の人ともうと触れ合つていろいろない」とも知りたいし、他の人たちにも知らせたいと思う」、「ういう」意見です。

「行政で働いている一員として、行政が指紋、外登法などをするから正当化されてしまうという意見に同感しています。民間企業が採用で差別しないようにと指導しながら市としては採用しないなど、ひどい状況です。これからも頑張っていきたいと思います」。行政の方からのご意見です。

「十数年前、仕事でカリフォルニア郊外のあるアパートで単身滞在していた時のことです。アパートのコインランドリーコーナーで、アジア人、朝鮮人に声をかけられましたが無視しました。この時ほど自分の内に潜在的に差別意識を持つていてるのを思い知らされたことはありません。今は自分の子どもたちにはできる限りその時の違和感を正直に話し、少しでも意識改革をしていきたいと思っています」、「ういうご意見が寄せられております。お一人の具体的な質問に関わるものに入っています。

民族の心をどう捉える

「金先生、日本人の生徒の特に同世代の若者に対する見方にはどのようなものがありますか。『子ども会』の取り組みには大変興味がありますが、日本社会において、社会には望めなくとも、家庭と学校で愛情を育んでいくことは同胞達の力を合わせてやつていただけると思います。愛情を育んで育ててあげるとの愛情という意味をどう捉えておられるのか、民族の心を抜きにしては語れないと思います。それから民団では具体的にどういう活動をされているのか教えて下さい。『子ども会』の活動内容はどのようなものですか、日本人の子どもに在日の子どもを理解してもらおうような活動はありますか、そんな企画があればいいと思います。韓国学園の教師をなさっているそうなので、学園の子どもたちのようすなど知りたいのです。何の科目を教えておられるのですか、部活なども聞いてみたいです」。いくつか重なる質問がありましたので、以上のところをまとめて金先生からお答えいただきます。

それから李由美さんには、「一昨年、アメリカの大学にて講義なさった時の現地での反応、意見、感

想をお聞かせ下さい」、「国際会議場での『韓国人は採用しない』といふ」との理由は何だったのですか、その後、クレームをつけに行きましたか、行く予定はありますか、行くんだったら協力します。私もアルバイトしたことがあるし、韓国だと知ってる人もいたし」ということです。「自分が在日であることを知ったのはいつ頃、どのようにしてですか。中高時代に初めて自分が在日であることを知ったという方が、もし身近におられたらどのように知ったのかその過程を教えて下さい。さらにいろんな差別を受けられたけど、今は本名を名乗って頑張っていらしゃる、生き生きとしたその姿に私も力が湧いてくるようです。英語を勉強なさってかなりハイレベルでいらっしゃると思いますが、母国語は勉強されないのでですか。民族の証である母国語はこれからも必要であると思うのですが」

「」のような質問がお二方に来ております。まず金仁吉さんからお願ひします。

文化的なものに価値をみいだす

金 仁吉 色々な意見、ご感想ありがとうございます。時間の関係上、羅列をする形で述べさせていただきます。

まず「民団の青年部は何をしているか」との質問なんですが、支援母体である民団という組織があります。在日韓国という国籍を持つた団体なんんですけど、今までの展開としては権益擁護ですね、実際の生活においての差別と闘つて「べく」という、そういう姿勢であつたんですけど、世代が三世・四世になるに従いまして、もっと民族的なものに力を入れよう。自分のルーツが分からなくなっていますので、そういう文化的な活動への取り組みへの切り替えの時期だと思います。

今、そういう部分で民族樂器を弾いてみたり、韓国語講習会を開いてみたり、民族舞踊を習ってみたりという文化的活動への移行期で、それに重点を入れた活動をしています。

それともう一つ、私は今、京都の韓国学園におりますが、教科は韓国語と韓国の地理歴史です。確かに思想的なものは「十年くらい前まではあったのではないかと思われます。でもその思想的なものが曖昧なんですけども、韓国人だから愛国心を持たなければいけない。私も民族学校出身だからそういうの」とを聞いたことがあります。それは一世の発想なんです。國というものがなくなつた時に自分の国籍を持つことがいかに大切であるか、大事であるかという発想に基づいて「國を愛せよ」というような発想が出てきて今、一世二世には通じません。

そういう部分で、より文化的なものに価値を見出そうといふことや、思想的なことは一切しておりますせん。京都韓国学園ではそういう部分で、学校の中にも変化があるんだといふことを認識していただきたいと思います。ただ、国籍を持っていいる学校ですから、朝総連の方の民族学校、韓国系の民族学校、それぞれ同じ民族学校ですけど、国籍を有する学校ですので自分の国に対する良い部分というんですかね、こんな部分で頑張っているんだ、というようなことは教えています。ただ、それによつて無条件に押しつけの愛国心を持てといふようないふことは一切しておりません。客観的な情報を提供することによつて自分で判断しないといふように心がけておりますので、ちょっとニュアンスが違つかもしません。

「『子どもの心』で愛情を育てる教育に、民族の心は必要だ」という質問ですけど、まさにその通りではありますが、我々の世代といふのは、ある意味で、日本の社会で自分たちが民族であるとの情報が極端に少ないのです。その中でいきなり民族という重圧を押しつけても、むしろ拒絶反応を示すばかりです。ものを聞く姿勢というのは、その人間を信頼しきつたうえでその人から吸収していくのが一番望ましいと思うのです。理論的な」とは中学高校でも十分にできると思うので、その段階にいくまでの土台意識として愛情をたっぷり受けて、相手からものを吸収する姿勢を子どもの時期に養つていぐ。その

中にちょっと民族的な」とを混じえていけば理想的ではないか、という姿勢で「子ども会」を運営せています。

地域の日本人との交流

地域の日本人との交流というのも念頭にはあります。大きなイベントがある時には、子どもたちに「日本人の友達がいれば連れて来てもいいよ、クリスマス会一緒にやろうよ、林間学校やキャンプに行く時に日本の友達を連れてきたいいよ」と声をかけています。まだ初步的ではありますけれども、そういう部分の交流も深めていきたいと思います。「この会が存続する限りはそのへんも念頭にいれながら発展させていきたいと思います。

そして「うちの学校の生徒は日本人の同じ世代の若者に対してどんな見方をしているのか」という質問に関しては、子ども同士のつきあいの中での差別は、いうほど意識的なものじゃありません。むしろそれを取り巻く社会状況の方がすごく重荷みたいです。友達の家に遊びに行つた時、友達の父母とはつきあいはありませんから、どういうふうに見られているかという不安はありますが、同じ世代同士ではなくどないといつてもいいと思います。

あと学校での他に取り組みとして、「在日韓国人」というのがあります。在日韓国人の子どもたちも在日韓国人の歴史を知らないんです。うちの学校では、校長先生みずからが一年生を対象にして話しきをしている。校長の民族教育に対する思いを自然に悟らせようという取り組みがされています。かえつて歴史や地理の時間にそのまま韓国の歴史や地理を教えて、実際住んだことのないソウルの話をしても全然びんと「ない」のですね。

ですから歴史教育をする「えでも気をつけている」とは、各時代にあつたいろんな日本と韓国の交流

をクローズアップして、「こんなに仲の良い時代が続いていたんだというような方向で、子どもたちに歴史教育を認識させる方向でやつております。子どもたちにとつて無理なく吸収されるためにはどうしようと考へています。毎年、修学旅行から帰つてから、修学旅行の体験談や感想を一つのものにまとめて発表する機会を与えたらいが一番自然じゃないかというような取組みを現在しております。

仲尾 それじゃ、続いて李由美さんお願ひします。

人権を身近なものに

李 由美 色々な感想をありがとうございます。時間の許す限りお話ししたいと思います。

まず「李由美さんの人権についての活動について聞かせて下さい」という質問についてですが、私の思いとして日本では人権というものについてかなり難しく捉えられている方が多いということ、それをもう少し身近なものとして話しあえる場ができるかと思うのです。例えば私は個人的な勉強会から初めて、その輪が広がり、いろんな所で講演を頼まれたりするようになり、現在に至っています。

せっかくですので、今日、持ってきた感想文をいくつかご紹介したいと思います。これは何年か前に「子ども国際クラブ」というところで一年間、子どもと遊び、韓国文化を教えたりするクラブに入つたんですけど、そういう場はなかなかなくて現在は高校を中心に講演活動をしています。先日もある滋賀県の高校へ行つきました。高校生はまだまだ感性が豊かですし、まだまだ希望を持てるなと思うのですが、その場ではなかなか皆さんの気持ちが分がらないので、いつも講演先の高校生に感想文を書いてもらうのです。この間も四百枚の感想文をやつと読み終えました。思った以上に大部分の若者たち、在日の子も含めて非常に前向きにこういう問題を受け止めているんですね。まだまだ希望はあるなどいふ感じなんですが、その時に高校生はこういふことを言つています。「どうして日本という国は日本人

と外国人という区別をつけたがるのだろうか。いろんな人が仲良く暮らしていくのが面白いのに」とか「日本人の大人は近代の日本がしてきたことをもつと詳しく、正しく教えるべきだと思う。そうすれば在日本の人達の背景も分かり、差別されるべきでない」とも分かるから」とにかく大人の世界を批判しています。

大人の世界を批判

「制度が改正されないのはなぜでしょう。私達の田でもこれがおかしいのは分かる、大人はどうかしている」「隣国同士であるのにどうして交流が少ないのか、もつと交流を増していくこと」などで問題は解決していくと思う。もつと暖かい国になつていくために皆が努力していけたらいいです」というような感想が寄せられています。そんな中にもまだ「差別が悪いのは分かるけれど大人から植えつけられた差別感はなかなか拭えない。どうしたらよいのでしょうか」と言つてくる生徒さんもいます。

私自身、学校で在日の歴史を習つていませんから自分で読むしかなかつたですね。そういう時に図書館へ行つたり、本屋さんへ行つたりするとかえてとつづきにくい問題というふうに感じでしますところがあるのですが、もつと身近な問題として考えていけばいいのじゃないかと思います。そういうた意味でも来年くらいに私の考え方なんかをまとめた本なんかを出せばいいなど考えています。とにかくいろんな活動の中で一生懸命日本をよくしようというたくさんの日本人に出会つています。だから手を結んでこの運動を進めていきたいということで頑張つています。しかし、先ほどお話ししたウトロ地域の問題も、本当は日本の中で解決されなければいけないのにまだまだ「私には関係ないわ」というような感じでなかなか先が見えていません。

次に「自分が在日である」と知つたのはいつ頃ですか」という質問ですが、これは「」にいらつし

やる在日の方にも多いと思うのですが、特に親が私に在日である」とを言つたというのではなく、知らず知らず何となくというのが率直な気持ちです。おじいちゃん、おばあちゃんの話の中で強制労働のことなんかを聞いていて、うちに何となく確認していくことがあります。ですから逆に在日である」とをはつきり聞かされた方が身近にいらっしゃれば教えていただきたいと思います。

家庭での民族教育の大切さ

「これは生活していくのが精一杯で民族教育どころか正しい朝鮮觀を次の世代に上げられてしませんから、そういう一世を両親にもつ二世のお母さんが三世の子どもを育ててますからなかなか子どもにも前向きに話せない。なかには子どもに黙つている親もいます。もちろん家でしつかり民族教育をしてきて別に卑下する」とも、否定的に考える必要もなく前向きに考えていらっしゃる親もいます。その時には子どもも本名を名乗つていけますが、現実はまだ一〇%にもなりません。

「昨年、アメリカで講義された時の現地の反応について聞かせて下さい」。二年前の九月から四ヶ月ほどアメリカの大学で在日の目を通した日本人の権について講義をしてきました。感想としては、本当に反応が早く、五十人いたらほぼ五十人全員が質問してきます。非常に積極的だということです。アメリカでは肌の色がすぐ問題になるのです。向こうの友人が言つには、アジアの人を僕達から見たら同じ肌の色をして、同じような顔をしている。僕達から見たら中国人も韓国人も日本人も家族みたいなものなのに、なぜそんなに制度的な差別があるのかというようなことを言つていました。

国際会議場の一件について「抗議するなら協力します」ということについてですが、知つておいていただきたいのは国際会議場 자체が私を雇つたわけではありません。私はその時はそれで済ませました。今後、もっこりのようなどがあれば抗議していくつもりはあります。

自分のバックグラウンドを尊重する

あと「母国語は勉強されないのでですか」という質問ですが、幸運なことに大韓航空で一年間務めた経験があります。しばらくソウルに留学したことで生活には困らないくらいの韓国語はできます。ただし、母国語ができるから民族、在日としての証があるというのではないと思います。

在日の中で母国語のできない人は民族の精神がないのではないかというのではなくて、自分の出生や自分のバックグラウンドを尊重でき、本名も隠さない」といったことが在日韓国・朝鮮人に課せられていくと思うのです。しかし母国語を勉強したいという希望があるのも、この国際都市、京都でも韓国語を専門的に勉強できる大学はありません。こういう状況の中で母国語を勉強できる機会があまりないともこれから改善していくかななければならないと思います。指紋押捺廃止の対象者としての在日韓国・朝鮮人の永住者に関しては、この指紋押捺制度は廃止されています。ただし永住者でない外国人の方にはこれが課せられています。

戦後補償の問題については、「日韓条約すでに解決済ではないか」と、よく言われますが、あの中に「在日韓国・朝鮮人はこれに及ばない」という項目があります。これは皆さんにぜひ知つておいていただきたいと思います。

一人一人が運動を取り組む

そしてもう一つ「日本の差別は制度化され続けるのだろうか」ということがあります。ただ、ドイツなんかの外国人排斥運動を見てましても、実際に起こしているのは一部の人です。そして次の日には反対デモが何百と起ります。人間の本質は何なのかを聞いた時に、縦の社会だったたら自分より下の人

間がいたら氣分が落ち着くという状態になりやすく、そななる時というのは自分が弱い立場にいる時ではないかと思うのです。だから人間は差別し続けるのだということにはならないと思うんですね。人の可能性というものはそれを克服するくらいの力を持つていると私は信じています。

今の日本の中でも、私達だけでじゃなく他のマイノリティーの人達も生きにくい立場がある。仕方がないのじゃなくて克服する力があると思います。行政の方も先ほどおっしゃいましたが、行政まかせにするんじゃなくて、やはり私達一人一人が声をあげていくことで運動は進んでいくと思うのです。

歴史にけじめをつける

仲尾　どうもありがとうございました。

最後の方で李由美さんが総括的に今の日本における在日の問題について触れられましたので、私が考えて繰り返す」ともないのですが、今日は全体の最終回という」となので、何度も足を運んでいただきたい方もいらっしゃいますし今日初めてという方もいらっしゃいますので、合わせて簡単にコメントさせていただきます。

全5回を通じて、十一人の在日の方にお話を聞きました。いろんなお仕事をお持ちの方で二十代から七十代の方から多様にわたっておりました。それぞれ皆さん生活者としてお話ししていただきました。在日の方々の本当の思いというのに私は触れたような気がいたします。やはり触れ合いというのは大事ですけど、いろんな建て前がありますね。自分の生活や職業を通じてなかなか語り合う機会がないのですが本当の生身の声を聞かせていただいたという点で大変よい貴重な機会であったと思います。ここでお話をいただいた四人の在日一世の方は大変な辛酸を舐めて、今日の年齢に達せられた方ですし、事業的に成功された方も中にはいらっしゃいました。私達が一世の方々のことを考える時には今までに何

十万人の一世の方が非常な無念だ思いで、この日本の国土の中で、あるいは戦場で、あるいは強制労働の現場で命を落とされたという「」ことを考えねばなりません。

敗戦当时二百五十万の在日の方が日本の本土におられました。海外に連れていかれた方を考えると三百万人を越えているでしょう。そのうちどれだけの方が本当に幸せな人生だったと言えるのか、ほとんど言えなかつたでしょう。

そういう一世の方々の無念の思いとこうものを私達は引きずつてゐる。この歴史にきちんとじめをつけなくてはいけないというのが日本人としての私の思いです。それから一番目に現在の在日の問題について言いますと、先日、東京の上野公園で鴨が矢を打たれて非常に痛ましい姿で我々の前に登場しました。あの矢は不条理なんです。鴨にすれば何でああいう辛い思いをしなければならないのか、何の理由もないのです。それと同じように日本社会の不条理がなおいくつか在日の方に突き刺さつてゐるという思いがします。例えば外登法ですね、なるほど指紋は消えただれど署名、家族書き、常に携帯していなければいけない、持つていなければ罰金だ。こういうことは日本人の住民登録には全くないのです。

つまりあくまで、治安対策として外国人を見る目というのが残っています。

それから民族教育の問題は、金仁吉さんに民族学校の現状について色々触れていただきおもしだけれど今、民族学校、韓国学園・朝鮮学校を含めて一番の問題は進路の問題です。民族学校へ進学する在日の方が多いということがあります。つまり民族学園の高等部を卒業した後、同時に日本の定時制の学校へ通

在日に刺さる不条理

つて大検を受けなくては進学させてくれる大学が多い。つまり民族学校へ行つては進学できない。例えば京都の府立大学、府立医科大という公立の学校ですらまだそうです。そういうために民族学校が順調ではない。

一方、日本の文部省は海外にたくさんある日本学校、補習学校がありますが、そこにはどんどん補助金を出しているのですね。ところが日本国内にある民族学校の現状については一條校ではないということとで補助金は出ないという問題もあります。一番の問題は、何ら民族的教育をする保証がなく、市内にわずか三つの民族学級がありますが、京都市内の小中学校には三千数百人の在位日の方が通学されています。在日の方々にどういう教育をしていくのかという自覚が、実はまだ先生の方には、ほとんどないんですね。昨年、ようやく市教委で、「外国人教育に関する基本方針」がでて、特に在日韓国・朝鮮人に対する民族教育をきちんとする方針がでましたけれど、まだまだこれからです。

日本社会の教育を見直す

そういう点で、これから在日の方が二世・四世と世代を繰がれるのに従つて、在日の方々の日本社会での教育の在り方を見直していく。ちゃんと本名で通学できて、それがいじめや偏見の対象にならないような社会にならないと民族教育の問題というのは解決できないのではないかと思う。それに基本的に民族学校で学べるような環境づくりをしていく、そういうことが中心かと思います。

それから就職については、不条理という言葉を先ほど申し上げましたが、自治省は地方公務員に規程がないにもかかわらず、当然の法理として外国人は公務員になれないのだ、あるいは国籍による合理的な差異を踏まえて問題の解決を図る、同じ合理的とか法理とか、「理」という言葉を使っております。しかしこれこそ不条理です。つまり国籍が違えば公務員になれない、特に一般職、事務職になれないわ

けですね。例えば区役所の窓口で、金さんや李さんという方が職員としておられて、どういう不都合があるが、全然これは分からぬですね。そういうわけですから、いまだに京都府でも京都市でも正規の職員として採用された方は一人もいません。

ただ一つ希望を申し上げれば、今、司会をしていただいている鄭さんは、この財團法人京都市国際交流協会という市の外郭団体の正規職員として採用されております。鄭さんは在日の方ではなくて韓国から最近来られた方ですが、外国人として日本人と同じように職場を得られたのですね。こういう希望の灯も少しはともりかけておりますが、まだまだこれからというところであります。

それからその次には、やはりこれから世代を重ねるにつけて、国際結婚あるいは帰化の問題が出てきます。一九七九年に国籍法が改正されまして「父か母が日本人であればその子は日本人に足りうる」となっています。従って子どもさんが日本国籍を自動的に取られるような例が非常に増えています。それから帰化という方法で日本国籍を取る方法もあります。

在日として希望をもつて生きる

しかし帰化という言葉自体が私は問題だと思うのですが、これはさて置きまして、日本国籍を取られたりしても、やはり今最後におっしゃいましたように在日韓国・朝鮮人として生きていくという、そういう希望と期待を持つておられるのは当然なことなんですね。しかも帰化が悪いのは、帰化したところではやはり差別偏見がついてまわる。私は今、大学の期末レポートを学生諸君に書いてもらっていますが、ある在日の女子学生はお父さんが韓国人でお母さんが日本人で帰化したのですね、ところが戸籍には「帰化」と書いてある。これは就職や結婚の時どうなるか不安で仕方がない。だから帰化しても日本社会の中で差別偏見の構造が残っている限り問題は解決しません。

そういう点で特に名前の問題ですね、最近は役所の方も考えが少し緩くなりまして、帰化されても、例えばイさんでもパクさんでもキムさんでも受け付けてくれることになりましたけど、今まで日本人らしい名前を付けろということで受け付けられなかつた。そのことで考えますと、例えばハワイではアリヨシ知事というのが出ました。ダニエル・イノウエーという上院議員が出ました。そしてペルーでは、フジモリさんが大統領になつております。それぞれの現地の市民権を取つておられるわけですが、ちゃんと日系の出身であることを名乗つて、そして政治のトップに立つというのが南米でもアメリカでもできています。だから将来、リーさんパクさんキムさんという市長や国会議員が出てきてもおかしくない。

戦後世代の日本人の責任

しかし今はそうじやない。今でも国会議員で帰化されている方がおられますし、やっぱり日本名といふことになりますね。こういう社会のあり方は、どこかおかしいのではないかと思わざるをえません。そういう点で現在の在日の在々に刺さつている不条理のこと、参政権のことですけど、それらはやはり我々戦後世代の日本人の責任問題だと思うのです。戦前の方について、一世の方を大変な目に会わせたのはおじいさんおばあさん、あるいは今の七十歳以上の老人のしたことじやないかという形で切ることもできないわけじやない。私は切つちやならないと思うのですけれど、しかし戦後四十数年たつて、なおかつ不条理が存在している。これは今の我々の世代の日本人の責任の問題であり、日本社会の責任の問題ですね。そういうものとして私達は受け止めていかなければならないだろうと思うのです。

それじゃこれから日本社会はどういうふうに変わればいいのか、在日の方々はさつき言つた帰化の問題を含めまして、全部で七十万人位おられます。好むと好まざるにかかるらず、やむを得ず帰化された

方を含めますと百数十万人でしょう。それから在日の方以外の外国籍の方々は、二ヵ月以上滞在されている方がやはり數十万人おられます。ですから外国人登録法で登録されている方だけで合計百五十万人ですね。登録していない方や帰化された方を含めると二百万人を超えているでしょう。二百五十万人くらいになっているかも知れない。これは日本人口の一パーセントに達します。

つまり多民族化が日本社会の中で進行しているわけですね。しかしこれは日本が外国人に一方的に入つてこられて、非常に大変だ、大変だと騒ぐこともないのです。今、外国で住んでいる日本人がどれくらいいると思いますか、長期滞在者・永住者含めて七十万人くらいなんです。これはやはり日本以外の所へ行つて勉強したりお金稼いだりしているわけです。その七十万人はそれぞれの社会の中で、それぞれ受け入れられたりあるいは一緒に住むという経験はしてきています。

だから日本社会の中でもいろんな民族の人と生きていくというのは、むしろ当たり前のことになりつつあるのですね。そういう中で、どうしたら異なった文化、異なる民族を持つ人と共存していくのだろうか、これが課題なのです。そういう時に、えてして言われがちなのは「郷に入つては郷に従え、だから何でも日本式にやれ」という一つの意見があります。これは一面での真理ではある。その社会の習慣や何かをよく知つた上で適合させていくというのは必要な生活手段でありましょう。しかし他方ではどうしてもゆずれないものがあります。例えばやはり私は納豆が好きですし、お茶漬けが好きです。ベッドは嫌で布団が好きで、畳がないと落ち着かない。在日の方はやっぱりキムチは離せないです。オンドルがあつたらいいなと思われるのも当然であります。ハレの日にはチマチョゴリを着たい、これは日本のお嬢さんがちょっととした時には着物を着たいと思うのと同じ心情ですよね。だからそれと同じように着物を着ろ、納豆を食べろとか、これは良くないです。ですから大切なことは違いを認めて一緒に生きるということなんです。同化しろと言う」とはどんな民族であれ言つことはできません。これは非常に

一方的な思い上がりの優越意識ではないかと思います。違いを認めて、違いを生かしながら共存していくことが、これから日本社会の課題であろうかと思います。

在日は日本にとって貴重な宝

そういう意味で私は在日の方が日本におられる」と、「これはむしろ日本社会をより良くなれていくために非常に貴重な宝として、いくださっているのではないかという思いすらします。つまり日本社会がもっとよくなるために差別や偏見のない社会にするために、在日の方々に突きおさへている不条理の矢をどうしたら抜いていくことができるか、それが我々一人一人の課題ではないかと思います。

私達日本人のこれから課題はまことに多いし、そして何が問題なのかということをまず知らなければいけません。そういう意味で、」のように素晴らしい触れ合いの機会を作つて下さった京都市の国際交流協会の方々に感謝をしたいと思います。ですから「」いう場を第一歩として、それぞれの職場で地域で家庭で、在日の方々の存在をどのように考えていくのかということを、私も含めてみなさんと一緒に考える機会を少しでも持てたらいいなと思います。

私自身いろんな在日の方に接することによって少しこちらでも自分の心が豊かな心になつていいくような気がします。おそらくそういう思いを持つていらっしゃる方、多いと思います。私は出会いという「」とは何よりも人の心を豊かにするものだという思いをいたしました。まだまだ申しのべたいことはありますが、皆さんそれに心に感じられたことの方がより大事かと思います。
ありがとうございました。

■ ■ ■ あとがき ■ ■ ■

幼稚園の頃、仲良しだった女の子が、民族学校へ通っているのを見て、彼女が在日韓国・朝鮮人であることを自然に知りました。学校で習つたというハングル文字を教えもらつたり、彼女が着ているチマ・チョゴリの鮮やかな美しさに感動した思い出があります。

相手の国を理解しようとした時に大切なのは、その国の文化・歴史に興味を抱き、素直に感動できる心をもつことだと思います。お互いの違いを認識したうえで向き合ふことができれば、私たちはもっと深くお互いを理解できるのではないでしょか。

この小冊子では、在日韓国・朝鮮人の人々の生活や文化を通じて、在日韓国・朝鮮人問題と私たちの関わりを知ることができます。また、私たち日本人が、事実として受けとめなければならない歴史、そして、在日を取り巻く現在の厳しい状況についても、それぞれのペネラ―から率直な意見が寄せられています。

お互いの違いを受けとめ、過去を知り、そして、これからと共に考えていくためにも、ぜひ、「在日韓国・朝鮮人はいま、その生活と意見」が多くの人々に読まれ、在日韓国・朝鮮人問題を、もっと身近な問題として語れる日がくることを心から願っています。最後に、今回の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました希望の家カトリック保育園崔忠植園長、およびペネラ―の皆様、コーディネーターの京都芸術短期大学仲尾宏教授に深くお礼を申し上げたいと思います。

アジアの風文庫⑧

「在日韓国・朝鮮人はいま～その生活と意見～」

1994年3月1日 第1刷発行

[編集・発行] 財団法人 京都市国際交流協会

〒600 京都市左京区粟田口鳥居町2の1

(☎075-752-3010)

(財) 京都市国際交流協会